

# 中学校・高等学校段階で求められる英語力の指標に関する研究報告書

2004年3月(文部科学省)

研究グループリーダー 吉田研作(上智大学)  
藤田 保(上智短期大学)  
渡部良典(秋田大学)  
森 博英(日本大学)  
鈴木 栄(神奈川県立神奈川総合高等学校)  
長田美佐(埼玉県立川越初雁高等学校)

\* 本報告書は、平成15年8月に文部科学省に提出した「中学校・高等学校段階で求められる英語力の指標に関する研究(中間報告)」(付録1参照)で示した記述統計に基づいた内容を、因子分析等の統計手法を用いて、より詳しい解釈を加えたものである。

## I. はじめに

平成14年7月、文部科学省は、『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想』を発表した。その中で、日本人に求められる英語力として次のような2つの目標を示した。

### ① 国民全体に求められる英語力

これは、中学・高校で達成すべき目標を示したもので、具体的には、中学校卒業段階では、挨拶や応対等の平易な会話(同程度の読む・書く・聞く)ができるようにすること(卒業者の平均が英検3級程度)。そして、高等学校卒業段階では、日常の話題に関する通常の会話(同程度の読む・書く・聞く)ができること(高校卒業者の平均が英検準2級～2級程度)、と設定された。

### ② 社会に活躍する人材等に求められる英語力

これは、大学における英語教育の目標を示したものであり、各大学が、仕事で英語が使える人材を育成することが求められていることを示している。

文部科学省では、上記の目標を達成するために「英語教育に関する研究グループ」を組織し、それぞれのグループで次のような研究を促進することとした。

第1研究グループ: 中学校・高等学校段階で求められる英語力の指標に関する研究

第2研究グループ: 中学校・高等学校における英語教育及び教員の研修プログラムに関する研究

第3研究グループ: 英語教員が備えておくべき英語力の目標値についての研究

第4研究グループ: 大学の英語教育の在り方に関する研究

## II. 第1研究グループの研究テーマ

我々第1研究グループは、上記のうち「①中学校・高等学校段階で求められる英語力の指標に関する研究」を委嘱され、下記の具体的な項目についての研究を行っており、本報告書は、この

研究に基づくものである。

- a. 中学校・高等学校段階で求められる英語力の指標についての研究
- b. 外部試験を指標に関連づけることの妥当性に関する研究
- c. 外部試験結果を入試等で活用すること等の方策に関する研究
- d. 中学校・高等学校を通じて一貫した英語教育の研究

平成14年度は、上記 a～d の内、特に a を中心に研究することにしたが、英語力の指標というのは、単なる理論によって設定できるものではない。実際のコミュニケーション場面においてどれぐらいの英語力が必要か、という具体的なデータを基にしなければならない。

日本の場合、国立教育政策研究所が発表した「評価基準・評価方法の研究開発」(外国語)及び、同研究所が実施してきた評価テストが学習指導要領を基本にしていることから分かるように、その指標は学習指導要領によって示されている。ところが、学習指導要領に掲げられている内容は、「抽象的」である、と批判されることが多い。確かに、現実のコミュニケーション状況から帰納的に導き出された英語の指標ではない。しかし、学習指導要領がどの程度まで実施されているか(教員の指導において)を調査し、その結果、生徒が英語で何ができるようになるかを具体的に研究することで、英語力の指標として、学習指導要領がどの程度有効なものかを調べることができるだろう。さらに、外部の英語能力テストが学習指導要領で示されている英語力の指標をどの程度客観的に測定できるかを探る必要がある。こうしてはじめて、「英語ができる日本人」を育成するための英語力はどうかを明確にすることができるのである。

図1は、上記のことを含め、本研究の全体像を表したものである。

図1. 英語力育成のための枠組み

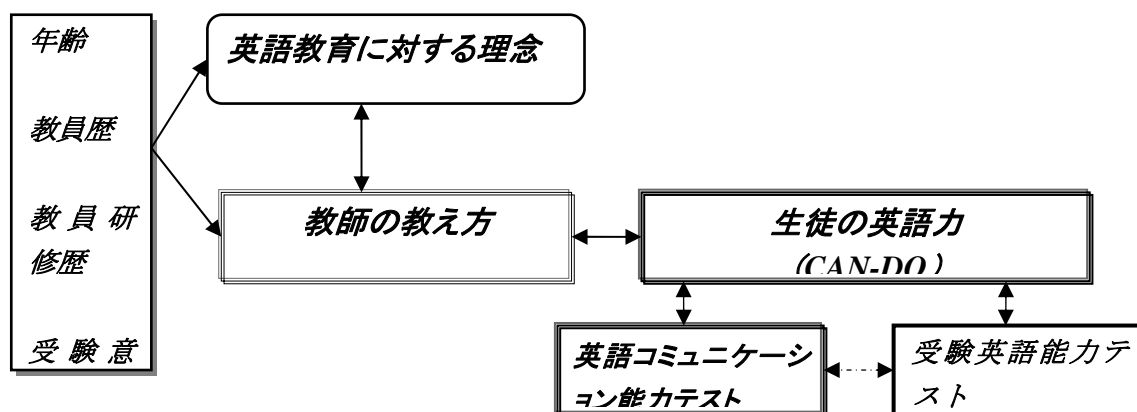


図1から、次のような仮説が立てられる。学習指導要領が日本の中・高校生の英語力の指標である、ということから、教師がどれだけそれに沿った教え方をしているかを見ることによって、生徒がその指標にどこまで到達しているかを推測することができる。つまり、教師の教え方が生徒の英語力に影響する、という前提にたたなければ、学校教育において生徒が到達できる現実的な英語力の指標を見出すことはできない、ということになる。従って、本調査では、まず、教師がどこまで学習指導要領に沿った授業展開をしているかを中心に見ることとした。教師の教え方は、教師自身が持っている英語教育に対する考え方に影響される。もし、その考え方が学習指導要領等に述べられているものと近ければ、よりコミュニケーションを中心とした教え方をしているだろうし、受験など

の「現実的」状況に近ければ、教え方は、コミュニケーションを中心としたものから離れたものとなるだろう。そして、教師の教え方がこのどちらにより大きく影響されているかによって、生徒がどのような英語力を身につけるかが決まってくる。

また、教師の教え方は、教師が英語教育の方法や考え方について勉強しているか(教員研修など)にも影響されるだろうし、また、教師自身の英語力にも影響されるだろう。

しかし、教師の教え方だけでは生徒が到達すべき英語力の指標は得られない。そこで、今回の調査の補足研究として、教師の教え方が生徒の英語力にどの程度影響するかという点、及び外部テストを生徒の英語力の指標として使うことの可能性について、予備的な調査を行った。

以上のことを考慮した上で、今年度の課題を次のように設定した。

「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会(以降、改善懇)」、また、「英語教育改革に関する懇談会」等を通して、日本の英語教育の進むべき方向性について色々な考え方が示されてきたが、それらは果たして、日本の英語教育の現状の中で、どこまで実現可能なのか。その具体的な内容、方法等について研究する。

### III. 研究実施計画

本研究は下記の順に実施する。

- ① 中学および高等学校学習指導要領とその解説書、そして、それ以後発表されている改善懇報告評価規準の参考資料等をもう一度検討し、どのような具体的な英語力の目標が考えられるかを検討する。
- ② 各都道府県教育委員会、また、各都道府県英語教育研究会(中高)、私学教育研究会(外国語部会)等が今までに行ってきた中学、高校の英語教育に関する調査結果を分析する。
- ③ 上記を基に、独自の調査項目を作成、全国都道府県からそれぞれ数校の中学、および高校を選び、アンケート調査を行う。
- ④ 調査結果をもとに、中学、高校における英語力の具体的な目標を検証し、それを実現するための具体的施策を提案する。

### IV. 研究経過

現在までの研究経過を示す。

- ① まず、現在の日本の中学高校の英語教育の現状把握、また、新学習指導要領(以降学習指導要領とする)の内容を吟味し、それに基づいて全国の教員が学習指導要領に示されている内容をどの程度実現しているかを調査することとした。
- ② 同時に、上記について今までに実施された関連する研究を調べた。その結果、中学・高校における英語力の指標に関する具体的な研究はないことが分かったが、教員の教え方、理念等に関するものが存在することから、実際のデータを扱ったものを中心に分析を行った。
- ③ 学習指導要領をもとに、教員対象のアンケートを作成し、全国の都道府県教育委員会を通してアンケートを依頼し、中学校教員 395 名、高等学校教員 386 名から回答を回収し、その分析を行った。今回の報告は、このアンケート調査の結果に基づき、学習指導要領が実際

に教育現場でどの程度まで実施されているかを知ること、そして、各教員が持っている「英語教育に対する理念・目標」と「実際の教室活動」との関係を把握することを主な目標としている。

- ④ また、吉田が共同研究を行っている民間教育団体を通して、生徒(9309名)に対するCAN-DO調査(「できる」と思っていることの調査)を実施した。この調査結果をもとに、まず、生徒が「教室活動として」出来ると思っていること、「教室外で」出来ると思っていること、そして、「海外に出た場合に」出来ると思っていること、この3点の間の関係を調査した。更に、調査に参加した生徒の英語教員教師(168名)に上記のアンケート調査を実施し、「教師の英語教育の実態」と「生徒のCAN-DO得点」との間の関係について分析した。(なお、本研究報告書では、既に、ベネッセ・コーポレーションより公表されている結果を参照している)
- ⑤ 上記の結果に基づき、「英語が使える日本人」の育成のための具体的方策について提案を行う。

## V. 文献調査の結果

本研究に先立ち、日本の英語教育の現状を客観的に分析した研究(実際のデータを基にした研究)を中心に調べてみた。その結果、英語力の指標に関する客観的な研究は見当たらなかった。しかし、図1に見られる様々な関係と関連する研究したものがいくつか見つかったので、それについてまとめた。

### 1. 教師に対する調査－現状と課題

まずは、教員を対象とした研究から見てみよう。

Gorsuch (2001)は、彼女が1999年に著した博士論文の内容を基にしたもので、日本の高等学校における英語教育の実態と文部科学省の英語教育政策とを比較した統計分析に基づいた研究となっている。Gorsuchは、論文の中で、教育に対する信念や態度というものが、本来教員の教え方に最も大きな影響を与えるはずだが、彼女が876人の日本の高校教員に対して行った調査では、入試などの外部要因により、必ずしも理念に沿った形での教育はできていない、ということを示した。

Miller (2001)は、日本人英語教師と日本で英語を教えている外国人英語教師に対してアンケート調査を行い、伝統的な日本の英語教育と外国人教師が主張するオーラル・アプローチとの違いを、目標、言語活動、教材、教師の役割、生徒の役割、正しさの基準、そして授業の雰囲気、という観点から比較し、両者の間に根本的な違いがあることを指摘した。ただし、Millerは、外国人教師に対して、日本と言う言語習得環境をよく考える必要がある、と結んでいる。

雨宮 (1999)は、実践的コミュニケーション能力の育成について、Canaleのコミュニケーション能力と新学習要領との関わりについて研究している。ALT教員69名にアンケート調査を行った結果、コミュニケーション能力については、「本当にコミュニケーションをしたいという気持ちをどうやって喚起するか」が大切としていて、また、方略的能力に関わる表現なども実践的コミュニケーション活動において必要であるとしている。

齊藤 (2000)は、より実践的な立場から、21世紀を生きる高校生に真のコミュニケーション能力を育てるための、ディベートの指導方法、教材の研究開発等について検討した。その結果、英語教育における指導の実態(埼玉県における「英語I」と「OC」の担当教員に対してアンケート調査)から、授業の実態として、「英語I」では「4技能の統合」(33%)より「読むこと」(53%)に重点を

置いた指導をしている人が多い。「OC」では「聞くこと」、「話すこと」が各々35%、「4 技能の統合」22%であることが分かった。また、授業での英語の使用については、「英語 I」では8割近くが(あまり)使っていない。「OC」では3割近くが(あまり)使っていないことが分かった。そして、レシテーション、スピーチ、プレゼンテーション、ロール・プレイなどに関しては、「英語 I」では7割から8割が(あまり)やっていない。「OC」では4項目ともやっている割合が多かった。ただし、ロールプレイは58%がやっている、と答えた。また、ディスカッション、ディベートは、「英語 I」では9割前後が(あまり)やっていない。「OC」でも6割から8割が(あまり)やっていないことがわかった。

長田(2000)は、ライティングをめぐる現況として、a) 高校での「書く」指導の軽視がある。2段落以上の自由英作文の経験がない者は8割以上。「自分の考えや意見などの作文」を扱っていないのは、英語 I で72%、OC で64%。また今後扱う予定も6割強がなく、関心が低い一方で、新学習指導要領では書く過程が重視されており、場面や目的に応じて書く能力、相手に伝えるという態度が重視されていることや、大学入試でも、79国公立大学中41校で100字程度の自由作文形式の出題されている、という点を挙げている。そして、ライティングが敬遠される理由として、添削や評価の煩雑さ、教師自身のライティングおよびその指導についての知識や経験不足、言語形式の習得面での指導効果のあいまいさ、などを挙げている。

コンピュータなどのITの活用についての調査がいくつかあるが、伊東(1999)は、コミュニケーション能力の育成をめざす中学校の英語教育で、LL、コンピュータなどのメディアをどのように利用しているかを調査した結果、コンピュータの利用率が低く、映像系機器の利用率が高いこと、自作および編集教材は高い効果をもつことが明らかになった。

また、教員の意識に関しては、新学習指導要領で実践的コミュニケーション能力の育成の強調については、「(やや)賛成」は58%、「どちらともいえない」が27%。今後取り上げたい指導方法として、「英語 I」で最も多かったのは「コンピュータの活用」、次に「英語での Q&A」。「OC」では「スピーチ」、次に「英語での Q&A」。そして、最後に、コミュニケーション重視の指導を行う際の問題点としては、「英語 I」、「OC」ともに「クラスの人数が多い」、次に「生徒が積極的に授業に参加しない」ということがわかった。

大分県教育センター(1997)が行った教師に対するアンケートの結果から、実用に活かせる文法力・語彙力を重視している教員はわずか10%に過ぎず、相変わらず文法・読解中心の授業で、生徒の主体的な活動の場が保証されていないことが明らかになった。

また、古川(1993)は、学生や教員に対して国際理解に関するアンケートを行った結果、国際理解教育を推進するための提言として、英語教育へのコミュニケーションニーズを満たすこと、生徒に国際交流の機会をもたせること、生徒の発達段階に応じて全教育活動を通して指導していくこと、という3点を挙げている。

## 2. 生徒に対する調査－現状と課題

次に、生徒に対する調査を基にした研究の結果として、新英語教育研究会(2000)が生徒に対して行ったアンケート調査によると、英語の授業で英会話を重視することに賛成と答えた生徒が圧倒的であった。また、学校別に見ると、「積極的に賛成」は大学生になるほど増加しており、反対に「積極的に反対」は中学生ほど増加していた。なお、英会話重視反対派の生徒は英会話だけではなく、4技能をバランス良く身につける事が必要だと考えていることがわかった。

また、高橋(2000)が行った高校生へのアンケートから、以下のことが分かった。1)生徒は、学校の授業が英会話塾のようなものになってほしくないと思っている傾向がある。2)生徒は、教室で

はバイリンガルになり得ないと醒めている。3)生徒にとって、実践的コミュニケーション能力を獲得しなければならない状況が存在するのは難しい。4)生徒は、授業頻度、クラスサイズ、一斉授業が「実践的」能力養成を妨げていると考える。この調査の結果、高橋は、実践的かつ豊かな言語経験を保証する授業を可能にするためには、大学入試問題の改善、英語技能試験との連携、教師の実践的能力を磨く、授業負担を軽減して英語教育の全体像を見直すゆとりを与えるなどの環境整備が必要である、と結論している。

この他にも、英語小教育委員会（1998-2001）は、コミュニケーション能力を疎外する要因を明らかにし、その要因を取り除いた指導法の開発を目指すため、中・高・大学生約 3000 人を対象にアンケートを行った。アンケート内容は英語授業全般について、学習目的、英語での自己表現、人前で話をする事、言語活動についての 5 項目から構成された。その結果、「興味が持て、良く分かる授業が面白い」は、中・高・大に共通した反応であり、英語の聞き取りや発表・会話練習に対する興味は女性の方が強く、英語を学ぶ意味に関して、男性より女性の方が積極的であることなどが分かった。また、英文解釈や文法を嫌う傾向は高校女子が最も強かった。

伊藤（2000）は、生徒と英語教師の実態調査から、生徒にコミュニケーションを図る意欲はあるが、言いたいことを英語で表現できないという悩みを持っていることが分かった。

小関（2002）は、大学生を対象にアンケート調査を行い、中学英語教育では、発音指導に対する不満が一番多かった反面、文法解説についての不満は思ったよりも少なかったことが分かった。また、高校英語教育では、中学英語教育の評価に比べて圧倒的にマイナス評価が多かった。特に、文法の懇切丁寧な解説、音声指導を望む者声が目立った。中学と高校英語との落差の原因は大学入試にあるといえるだろう。

生徒の動機づけ、という観点からの調査として、田尻（1998）は、中学一年生 177 名の英語についての印象をアンケート調査した結果、英語が将来的に必要と考えている生徒は大半である一方、外国語の学習が英語に限られているのはおかしいと思うという生徒が半分弱みられた。また、柳井（1998）は、大学 1・2 年で非英語専攻 60 名の男子学生に高校・大学での英語授業への態度について調査した。その結果、高校のとき、英語嫌いだった学生は 43%で、英語好きの学生は 12% だった。

その一方で、英語学習に対する態度について、斎藤（2001）では、全体的に生徒は自分が努力する事で英語学習で良い成果を上げうるであろうと考えていることが分かった。また、自分の学習行動の結果、特に成果が思ったよりもよくなかった原因を生徒が自らに起因すると考える傾向が強く、学習行動に前向きで真面目な取り組みをしている様子が伺えた。また、宮本（2000）は、生徒の英語学習に対する実態調査を行い、生徒の英語学習に対する願いを分析し、それを叶えるためには授業で何を扱えばいいかを考察した。その結果、a) 言いたいことが英語で言える、語彙を増やす対処法として、生活用語を input していくことが重要であることや、b) 英語を聞くことに慣れる対処法として、リスニング指導の重要性が挙げられることがわかった。

### 3. 英語コミュニケーション授業の改善策

どのようにすればよりコミュニケーション授業が可能か、ということだが、二見（2000）は、生徒の実践的コミュニケーション能力を育成するために、有効な手段として授業で行うコミュニケーション活動の形態を研究した結果、(1) コミュニケーション能力の育成の具体的手立てとして、コミュニケーション能力育成のための学習過程を技能の習得(Skill-Getting)と技能の使用(Skill-Using)の段階に分け、その両方がスパイラルな形で展開できるように、英語の授業を二つの形態に分けること、

(2) Text-Based Program では、技能の習得 (Skill-Getting) を目指すこと、(3) Task-Based Program では技能の使用 (Skill-Using) を目指すことなどを提案している。また、本研究の目指すコミュニケーション活動を「学んだ英語を伝達を目的にして使用してみる活動」と位置づけ、①言語材料の獲得のための言語活動、②コミュニケーションに視点を当てた言語活動、③コミュニケーション活動、の3つの活動を提案している。最後に、コミュニケーションへの積極的態度の育成 (コミュニケーションのブレークダウンを切り抜ける方法を身につけさせる) ために、①Strategic Competence の育成、②語彙の伸長が必要である、としている。

宮内 (2000) は、インターネットを取り入れた具体的な授業展開例・教材について次のような指摘をしている。Eメールを利用した授業展開としては、各生徒に、特定の Key pals を割り当てて交流させる方法やメーリングリストを利用した方法が考えられる。また、Eメールを利用した授業の利点としては、英語学習の動機付けとなるが考えられるが、問題点としては、快適にインターネットが利用できる環境の整備・維持がひつようであること、そして、生徒がコンピュータ操作に慣れる必要がある点が挙げられる。次に、WWW を利用した授業展開としては、英語教育用ウェブサイトを利用する、サーチエンジンを使って自分の興味のある英語ホームページを利用する、そして、情報発信のためにホームページを利用する、等の方法が挙げられる。ただし、WWW を利用した授業展開の留意点としては、インターネット上の情報から正しいものを選び分け入手し利用する情報処理能力が必要であること、そして、教師が WWW を授業中で使用する方向性を定め、ただのネットサーフィンにさせないことなどが挙げられる。この他にも、リアルタイムの交流を取り入れた授業展開としては、メッセージ交換 (チャット)、インターネット電話 (メッセンジャー・ソフトウェア) が考えられるとしている。

#### 4. 国際比較

宮原・山本(1999)は、中国、韓国そして日本の学生の動機付けの比較をテストのデータの分析から行っている。その結果、中国では「道具的言語使用」、韓国では「文化的相互理解」と「道具的言語使用」、そして、日本では「専門的な知識の取得」の因子が全ての学力側面と有意な関係にあった。しかし、著者は、単に「運用技能の養成」という動機だけでは運用能力を伸ばすことはできないと述べ、中・韓では学習態度が日本より前向きであることが英語力を大きく伸ばす結果を生んでいると思われる一方、日本は明確な目的意識に欠ける為に「運用技能の養成」を願いながらも力が伸びないのではないかと結論している。

伊藤・伊原(1998)は、日本語と韓国語の教科書題材の比較から、日本の教科書は様々な国や地域、人々、文化を視野に入れた異文化理解教育を扱っているのに対し、韓国では自文化、アメリカ文化理解を中心としている、と報告している。英語教育が目指している異文化コミュニケーション能力の育成といった観点からすると small c やアメリカ以外の国を多く扱っている日本の教科書の方が理想に近いが、韓国の教科書に関しては一つの題材の扱いが詳細で深い点を指摘している。

#### 5. 教員研修とALTとの授業

新英研編集部 (1998) が実施したアンケートのデータから、ALT との授業は「楽しさ」「面白さ」が中心であり英語の定着という点では十分に活用されていないということが分かった。今後はオーラル・コミュニケーションだけでなく、リーディングやライティングにおける ALT との授業実践の開拓と研修の必要性を指摘している。

また、猪井 (2001)は、ティームティーチング(TT)の経験を通して、日本人教師(JTE)と外国人教師(AET)の英語教育観が変化したことを指摘した。JTE は前向きな考え方へ、しかし、AET は後退的な考えへと変化した。その結果、両者の英語教育観の不一致が生まれた。研究の結果、TT の効率を上げるために、JTE は海外渡航経験を持つ事、そして、AET は TEFL を学んだ者を採用する事が今後の課題として挙げられた。これと関連して、西村 (1993)は、日本人教師の英語免許取得必須条件に長期海外研修を義務づける事を提案した。英語教育 (2000)でも、高校教師へのアンケート結果から、ALT に払う金で JTE の海外研修を実施すべきだ、との意見が多数見られた。

## 6. 結論他

この他にも、中高一貫教育を考えた場合の問題点の指摘等についての研究(飛田 1998、本田 1998、桂 1999、英語教育 2000)、また、入試(英語教育 2000、谷口 1997)やコミュニケーション・テスト(渡辺・米沢・塩川・奥村 1997年10月から1998年1月)についての研究などが見られる。

しかし、全体としては、英語力の客観的指標について直接問う研究は見当たらず、それ以外の要因に関しても教師の英語教育に対する理念、教え方、そして、生徒の学習との関係などについての客観的研究は多くないと言える。以下に、本章で取り上げた文献を挙げておく。

## 参考文献

- Gorsuch, G. 2001. Japanese EFL Teachers' Perceptions of Communicative, Audio-lingual and Yakudoku Activities: The Plan Versus the Reality. Education Policy Analysis Archives Vol. 9 no. 10. (retrieved August 20, 2003 from <http://epaa.asu.edu/epaa/v9n10.html>)
- Miller, T. 2001. Considering the "fit" between native and imported approaches to teaching English in Japan. Studies in English Language and Literature 48 vol. 25, no.2 :21-35.
- 雨宮信也 1999.「実践的コミュニケーション能力の育成について - 社会言語的能力と方略的能力の活性化への模索-」『山梨県総合センター・英語科教育研究室・研究紀要』pp.151-165
- 池田真澄 2000.「心に響くコミュニケーションを」『英語教育』別冊 pp.92-95
- 伊藤幸男 2000.「実践的コミュニケーション能力の育成を目指した指導法の研究」『研修報告書』埼玉教育委員会 pp.112-114
- 伊藤幸恵・伊原巧 1998.「中学校英語教科書題材にみる日本と韓国の異文化理解教育の特徴」『中部地区英語教育学会「紀要」』pp. 45-50
- 伊東武彦 1999.「中学校英語科におけるメディア利用の新傾向」『英語教育』第10号(増刊号) pp.66-69
- 猪井新一 2001.「TT 経験による JTE と AET の英語教育観の変化」『東北英語教育学会研究紀要』第21号 pp.21-35
- 英語教育 2000.「全国公立高校進学校アンケート集計結果」「入試が変わる、授業が変わる」『英語教育』増刊号 2000年1月号 p11-12
- 英語教育 2000.「47 都道府県英語科指導主事アンケート集計結果」「入試が変わる、授業が変わる」『英語教育』増刊号 2000年1月号 p13-19
- 英語小教育委員会「コミュニケーション能力の育成を阻害する問題点を克服するための指導法の開発に向けて」
- 大分県教育センター 1997.「英語習熟度別指導におけるコミュニケーション能力の育成」『平成



- 9年度共同研究報告・豊かな心と確かな学力を育む実証的研究』pp.84-94
- 沖原勝昭 1997.「TOEFL データと日本人の英語力」『現代英語教育』 pp.4-7
- 長田美佐 2000.「異文化間コミュニケーションにおける「伝える」英語の指導」『研修報告』 pp.124-126
- 桂邦彦 1999.「英語教育における連携のあり方」『英語教育』 pp.26-28
- 小関文典 2002.「大学生からみた中・高の英語教育」『東北英語教育学会研究紀要』 第 22 号 pp.1-14
- 齊藤澄江 2000.「コミュニケーション能力育成のためのディベート指導の研究」『研修報告書』 pp.121-123
- 齋藤嘉則 2001.「中学生の英語学習に対する学習意欲の実証的研究」『東北英語教育学会研究紀要』 第 21 号 pp.47-58
- 島根県立松江教育センター 2000.「国際理解教育の推進に関する研究(Ⅱ)―中学校・高校生の意識とそれをふまえた英語の授業実践並びにその分析―」『平成 11 年度研究紀要』 pp.1-31
- 新英語教育研究会 2000.「実践的コミュニケーション」を乗り越える『新英語教育』 pp.17-25
- 新英研編集部 1998.11「生徒・教師の目から見た ALT 制度」―12 年目を迎える ALT 制度が提するもの―『新英語教育』pp. 17-26
- 高橋正夫 2000.「実践的コミュニケーション能力」考『英語教育』 p.37
- 竹前文夫 1993.「21 世紀に向けての英語教育 ―K.外国人教員の充実―」『英語教育』別冊、英語教育実態調査研究会編著 pp.89-94
- 田尻悟郎・柳井智彦・高塚成信・寺島美紀子・長瀬荘一 1998.「英語ギライとは何か」『現代英語教育』 pp.5-25
- 谷口賢一郎 1997.「新学習指導要領でセンター試験はどう変わったか」『現代英語教育』 pp.8-12
- 飛田牧弘 1998.「高校英語教員の中学校英語教育理解度調査」『現代英語教育』 pp.23-27
- 西村嘉太郎 1993.「21 世紀に向けての英語教育 ―J.教員のおかれた状況、研修、養成―」『英語教育』別冊、英語教育実態調査研究会編著 pp.84-89
- 二見隆久 2000.「コミュニケーション能力の育成を目指した指導法の研究」『研修報告書』 pp.106-108
- 古川尚子 1993.「21 世紀に向けての英語教育 ―.国際理解教育の促進―」『英語教育』別冊、英語教育実態調査研究会編著 pp.56-63
- 本田勝久 1998.「Communicative Syllabus と中・高一貫の英語教育」『中部地区英語教育学会「紀要」』第 28 号 pp. 21-28
- 宮内讓志 2000.「インターネットを利用した授業展開とそのための教材開発」『研修報告書』 pp.115-117
- 宮原文夫・山本廣基 1999.「英語学力の国際比較」『英語教育』 pp.26-28
- 宮本典行 2000.「実践的コミュニケーション能力を育成するための指導法の研究」『研修報告書』 pp.109-111
- 渡辺時夫・米沢修一・塩川晴彦・奥村信彦 1997.a.「ペーパーテストによるコミュニケーション能力の測定―どこまで可能か」『現代英語教育』 pp.4-7
- 渡辺時夫・米沢修一・塩川晴彦・奥村信彦 1997.b.「ペーパーテストによるコミュニケーション能力

の測定—どこまで可能か』『現代英語教育』 pp.28-31  
渡辺時夫・米沢修一・塩川晴彦・奥村信彦1997.c. 「ペーパーテストによるコミュニケーション能力  
の測定—どこまで可能か』『現代英語教育』 pp.38-41  
渡辺時夫・米沢修一・塩川晴彦・奥村信彦1998.d. 「ペーパーテストによるコミュニケーション能力  
の測定—どこまで可能か』『現代英語教育』 pp.44-47

## VI. 本研究

### 1. 教員アンケート作成

本アンケート調査は大別して2つのパートから成る、つまり、「英語教育の目標・理念」に関するもの「英語教師の教え方」に関するものである。前者の英語教育の目標・理念に関するアンケート項目は、学習指導要領、英語指導方法等改善の推進に関する懇談会報告、および、21世紀日本の構想懇談会報告書等を基に作成した。また、教師の教え方に関する項目は、平成14年度から実施されている中学校学習指導要領、および、平成15年度から実施されている高等学校学習指導要領の内容を基に作成した。

アンケートの実施時期は、平成15年1月から2月の2ヶ月間で、中学校、高校それぞれにつき、各都道府県8校、政令指定都市各4校を無作為抽出し、各都道府県教育委員会を通して各学校1名に回答を依頼した結果、全国の中学校英語教師395名、高等学校英語教師386名の回答を得た。

### 2. 結果の分析

結果の分析にあたっては、最初に、教員の基本情報(年齢、教育経験年数、英語教員研修参加経験、勤務校の受験に対する意識)等の特徴を検討した。

次に、上記の2つのパート、それぞれについて因子分析等の統計を行い、その結果と教員の基本情報との関係を検証した。以下、詳細を述べる。

#### 2.1. 基本情報

##### 2.1.1. 中学校教員

###### 2.1.1.1. 年齢

回答者には30代(43%、169名)、40代(36%、143名)が多く、20代(11%、42名)、50代(10%、38名)が少ない傾向がある。60代にいたっては1%(2名)にすぎない。従って、今回の調査結果については、主に30代、40代の教員の回答を最も強く反映したものとなっていると言えよう。

###### 2.1.1.2. 教員歴

5年以内の教員歴を持つ回答者が少ない(9%、36名)ことが分かる。これについても差を考慮した分析を行うが、5年以内の教員歴を持つ回答者の教員の考え方に不明な点がある可能性があることは留意する必要がある。

###### 2.1.1.3. 受験への意識

受験への意識については「高い」と回答した教員が6%(22名)、「低い」と回答した教員が5%(20名)であった。ほとんどは「比較的高い」(54%、209名)あるいは「比較的低い」(34%、132名)とい

うふうに「比較的」という条件がつく。これは「多かれ少なかれ受験を意識している教員が多い」と捉えることもできるが、一方、中学校では、受験を過度に意識したり、全く意識しない教員はそれほど多くはない」ととらえることもできる。

#### 2.1.1.4. 研修会

全体の 62.5% (245 名) の教員が何らかの形で教員研修を受けている、と回答していることが分かる。中でも、文部科学省各教育委員会主催の研修は、おおよそ 15% (57 名) が受けたことがあると回答している。そのうち、75% (43 名) は国内、25% (14 名) は海外の研修に参加している。

#### 2.1.1.5. 英語教員人数

1名しかいない中学は 77 校、2名は 82 校、3名は 93 校と続く。全国さまざまな中学を対象とした結果であるから一般化することはできないが、英語教員の数が少ない学校の数が比較的多いことが分かる。

#### 2.1.1.6. ALT の人数

1名という回答が多い(308名)。人数が小数点となっている回答もあったが、1人の ALT が数校を掛け持ちしていることを表している。常住の ALT を各校に配置するなどの措置をもっと考える必要があるだろう。

### 2.1.2. 高校教員

#### 2.1.2.1. 年齢

年齢は 30 代 (150 人、38%)、40 代 (129 人、4%) が多い。20 代 (49 人、13%)、50 代 (57 人、15%)、60 代は 0 名である。したがって、今回の調査結果については、中学校同様、主に 30 代、40 代の教員の回答を最も強く反映したものとなっていると言えよう。

#### 2.1.2.2. 教員歴

教員歴は、5 年以下 (48 名)、6-10 年 (78 名)、11-15 年 (72 名)、16-20 年 (84 名)、そして 20 年以上 (104 名) となっている。中学同様、5 年以下の教員の数が少ないことが分かる。従って、高校の結果を解釈する際にも、5 年以内の教員歴を持つ回答者の教員の考え方に不明な点がある可能性があることは留意する必要がある。

#### 2.1.2.3. 研修会

研修ありと回答した教員は 211 人 (55%) で、無しと回答した教員は 170 人 (45%) だった。英語教員研修に参加した教員は 302 人である。これは、過去 5 年間での英語研修有りの回答者 211 人 (?) を上回っているが、一人の教員が過去 5 年間に複数の研修に参加していることを表している。研修の内容では、文科省・県関係などの公の研修参加者が 145 人、その他の自主研修が 157 人であり、半数以上の研修は、教員が自主的に参加したものであることが分かる。

#### 2.1.2.4. 学科

英語科・国際科があると回答した学校は、37 校で、全体の約 10% にあたる。

#### 2.1.2.5. 受験への意識度

高い・比較的高いと回答した教員は 152 人で、全体の約 40%であった。比較的低い・低いと回答した教員は 232 人で、全体の約 60.1%であった。半数以上の教員は、受験を特に強くは意識していないことが分かった。

#### 2.1.2.6. 英語教員数・全校生徒数

900 人以上の生徒がいる学校は 89 校で、全体の約 23%である。それに対して、英語担当教員は、5 人以下が 181 校、5 人から 9 人までは 116 校で、全体の約 80%を占める。

#### 2.1.2.7 担当学年

中学経験者が 89 人いることが分かった。

#### 2.1.2.8 経験授業

オーラルの授業担当数が 553 で、全体(2176)の約 25%であり、ここ 10 年、オーラル・コミュニケーションが重視されてきていることを考えると、あまり多くないと言えるだろう。

#### 2.1.2.9. ALT(外国人講師)の数

1人という回答が圧倒的に多い。(304人、78%)2人が、22人で、全体の6%、3人が、全体の2%、4人が、全体の0.7%であった。2.1.2.6.の生徒数、英語教員数、そして、2.1.2.8.のオーラル授業担当教員数を考えると、ALT の数を増やす必要性について今後もっと検討しなければならないだろう。

### 3. 英語教育の目的・理念に関する項目の分析

英語教育の目的・理念に関する因子分析を、中学・高校それぞれに分けて行い、分析した。

#### 3.1. 中学校教員

文部科学省指導要領、英語指導法等の改善推進に関する懇談会報告書、「英語が使える」日本人を育成するための戦略構想等に見られる理念的側面についてのアンケート項目の解答から、中学教員の間には下記5つの因子が認められた(表 3.1)。すなわち、「学習者全員の英語到達レベル」(因子1)、「国際的に通用する英語伝達能力」(因子2)、「個人レベルでの交流」(因子3)、「実践的コミュニケーションの定義」(因子4)、「コミュニケーションを前提とした英語指導」(因子5)である。今回実施したアンケートに回答した中学教員は、英語教育の理念・目標についての項目をこれら5つのグループに統合して捉えているということを示している。

---

#### 因子 1:学習者全員の英語到達レベル

中学あるいは高校卒業時においてどの程度の英語力がどのくらいのレベルにあればよいかを表す因子。

8. 中学校卒業時には、だれでも英語で挨拶をはじめとする簡単な日常会話ができなければならない。
9. 中学校卒業時には、だれでも簡単な英語を読んだり書いたりできなければならない。
10. 高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で聞いたり話せたりできなければならない。
11. 高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で読んだり書いたりできなければならない。

---

#### 因子 2:国際的に通用する英語伝達能力

英語教育の目的を、最終的には国際的に通用するレベルに到達させることにおくことを表す因子。

4. 国際社会に生きる日本人として、世界の人々と協調し、積極的に国際交流などを行っていくための資質・能力の基礎を養う観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である。
5. 英語を実践的に使うことが出来なければ日本および日本人はこれからの国際社会で取り残されてしまう。
7. これからの国際社会において、日本の立場を明確に表明するために、英語を実践的に活用する能力は必要である。
12. 日本における英語教育の最終目標は、英語で議論・ディベート・スピーチ・プレゼンテーションなどができることである。
14. 英語を国際的な場面で実践的に使えるように指導することは重要である。
20. 日本という国が国際的に貢献できることを目的に英語を教えることは重要である。

---

#### 因子 3:個人レベルでの交流

英語教育の目的を、視野を広げる、ホームステイで英語が使えるようにするなど個人レベルの活動ができるようにさせることにおくことを表す因子。

18. 英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である。
19. 英語を学ぶことにより、生徒が海外旅行やホームステイに困ることなく参加できるような指導をすることは重要である。
21. 英語を使って英語圏の人とより親密な交流をもつよう指導することは重要である。

---

#### 因子 4:実践的コミュニケーション能力の定義

実践的コミュニケーションの定義に関する因子。

1. 実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことをいう。
2. 実践的コミュニケーション能力と言った場合、聞き、話す能力だけでなく、読み、書く能力もさす。

---

#### 因子 5:コミュニケーションを前提とした英語指導

国内では、英語によるコミュニケーションは必要ないが、知識としては必要であることを表す因子。

6. 英語を実践的に使う能力が必要になるのは、海外に出かけた時だけである。
13. 英語は、実際に使えることよりも、知識として身につけるために指導することが重要である。
15. 英語を、入試などのテストに合格するために指導することは重要である。

---

表 3.1

中学校教員理念因子分析表

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
B1	0.05	0.04	0.07	<b>0.67</b>	0.07	0.49
B2	0.01	0.05	0.16	<b>-0.51</b>	0.08	0.30

B4	0.10	<b>0.62</b>	-0.11	-0.08	-0.15	0.42
B5	-0.02	<b>0.72</b>	-0.10	0.09	0.01	0.44
B6	-0.06	-0.01	-0.09	0.04	<b>0.51</b>	0.27
B7	-0.15	<b>0.66</b>	-0.02	0.05	-0.15	0.38
B8	<b>0.73</b>	-0.01	0.04	0.12	-0.02	0.58
B9	<b>0.83</b>	-0.08	-0.01	-0.01	0.08	0.63
B10	<b>0.80</b>	0.08	0.03	0.03	-0.07	0.73
B11	<b>0.83</b>	0.00	-0.01	-0.08	-0.02	0.69
B12	0.20	<b>0.50</b>	-0.09	-0.05	0.18	0.37
B13	-0.06	-0.06	-0.15	-0.04	<b>0.37</b>	0.17
B14	0.10	<b>0.46</b>	0.03	-0.05	-0.01	0.29
B15	0.10	-0.05	0.05	-0.02	<b>0.38</b>	0.16
B18	0.03	-0.19	<b>0.49</b>	-0.10	-0.12	0.19
B19	0.02	0.06	<b>0.63</b>	0.05	-0.03	0.45
B20	-0.10	<b>0.44</b>	0.31	-0.09	0.10	0.43
B21	-0.01	0.24	<b>0.42</b>	0.04	0.06	0.36
信頼性 $\alpha$	0.88	0.74	0.54	-0.90	0.38	0.17
固有値	4.499	1.883	1.423	1.344	1.170	
負荷量平方和	4.011	1.392	0.782	0.647	0.509	

### 3.2. 高等学校教員

文部科学省の指導要領の理念的側面について、高校教員の間には上記5つの因子が認められた。すなわち、「学習者全員の英語到達レベル」(因子1)、「国際的に通用する伝達能力」(因子2)、「積極的態度」(因子3)、「社会的場面で必要な英語力」(因子4)、「読む書く能力」(因子5)である(表 3.2)。

---

#### 因子1: 学習者全員の英語到達レベル

学習者全員の英語到達レベルとは、中学、高校卒業時には、英語を聞く、書く、読む、話す力がどのくらいのレベルにあればいいかを表す因子である。

8. 中学校卒業時には、だれでも英語で挨拶をはじめとする簡単な日常会話ができなければならない。
  9. 中学校卒業時には、だれでも簡単な英語を読んだり書いたりできなければならない。
  10. 高校卒業時には、だれでも日常的な! 簡単な話題について英語で聞いたり話せたりできなければならない。
  11. 高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で読んだり書いたりできなければならない。
-

### 因子2: 国際的に通用する伝達能力

国際的に通用する伝達能力とは、英語教育の目的を、最終的には国際的に通用するレベルまで到達させることに置く因子である。

4. 国際社会に生きる日本人として、世界の人々と協調し、積極的に国際交流などを行っていくための資質・能力の基礎を養う観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である。
5. 英語を実践的に使うことが出来なければ日本および日本人はこれからの国際社会に取り残されてしまう。
7. これからの国際社会において、日本の立場を明確に表明するために、英語を実践的に活用する能力は必要である。
13. 英語は、実際に使えることよりも、知識として身につけるために指導することが重要である。
14. 英語を国際的な場面で実践的に使えるように指導することは重要である。
20. 日本という国が国際的に貢献できることを目的に英語を教えることは重要である。

### 因子3: 積極的の態度

積極的の態度とは、生徒が積極的にコミュニケーションをしたいと思うように指導することを重視するという因子である。

16. 生徒が英語を好きになるような指導をすることは重要である。
17. 生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てる
18. 英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である。

### 因子4: 社会的場面で必要な英語力

社会的場面で必要な英語力とは、海外旅行、ホームステイなどでの主に会話を中心とした英語力が必要であり、その手段としては、社会的に英語を使う手段を増やすことも必要であるという因子である。

1. 実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことを言う。
3. 海外旅行などの海外における社会的場面で英語が話せる観点から、英語を実践的に活用する能力の育成は重要である。
6. 英語を実践的に使う能力が必要になるのは、海外に出かけた時だけである。
19. 英語を学ぶことにより生徒が海外旅行やホームステイに困ることなく参加できるような指導をすることは重要である。
22. 日本人が学ぶべき英語は、英米のネイティブの英語をモデルとしたものでなければならない。
24. 英語で実践的コミュニケーションする力が今以上に向上しない場合、いずれは英語を第二公用語にするなどの思い切った手段が必要である。

### 因子5: 読む書く能力

読む書く能力とは、実践的コミュニケーションは、話す、聞くだけではなく、読む、書く能力もさし、受験指導も視野に入れるという因子である。

2. 実践的コミュニケーション能力と言った場合、聞き、話す能力だけでなく、読み、書く能力もさす。
15. 英語は入試などのテストに合格するために指導することは重要である。

表 3.2

高等学校校教員理念因子分析表

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
B1	-0.02	0.05	-0.04	<b>0.42</b>	-0.39	0.36
B2	0.05	0.10	-0.02	-0.20	<b>0.54</b>	0.39
B3	0.08	0.05	-0.06	<b>0.52</b>	0.04	0.32
B4	0.05	<b>0.57</b>	0.03	0.09	0.04	0.44
B5	0.04	<b>0.75</b>	-0.23	0.04	-0.12	0.47
B6	-0.11	-0.39	0.01	<b>0.43</b>	0.00	0.23
B7	0.00	<b>0.70</b>	0.07	-0.03	0.02	0.53

B8	<b>0.83</b>	0.01	0.01	0.08	-0.12	0.72
B9	<b>0.92</b>	-0.14	-0.01	0.02	0.05	0.77
B10	<b>0.85</b>	0.09	0.05	0.04	-0.09	0.82
B11	<b>0.84</b>	-0.02	0.02	0.00	0.12	0.77
B13	0.14	<b>-0.43</b>	-0.06	0.16	0.10	0.13
B14	-0.06	<b>0.50</b>	0.06	0.10	0.18	0.39
B15	-0.06	-0.09	-0.09	0.27	<b>0.51</b>	0.24
B16	-0.01	-0.03	<b>0.66</b>	0.01	-0.06	0.41
B17	0.03	0.06	<b>0.81</b>	-0.05	-0.13	0.66
B18	0.05	-0.05	<b>0.57</b>	-0.01	0.09	0.34
B19	-0.09	0.11	0.29	<b>0.46</b>	0.09	0.39
B20	0.01	<b>0.49</b>	0.08	0.14	0.05	0.39
B22	0.11	-0.09	0.04	<b>0.39</b>	0.07	0.17
B24	0.13	0.10	-0.11	<b>0.37</b>	0.00	0.22
信頼性 $\alpha$	0.92	0.64	0.70	0.56	0.37	
固有値	5.31	2.04	1.79	1.49	1.26	
負荷量平方和	23.28	30.74	36.31	40.91	43.63	

#### 4. 具体的な教え方についての項目の分析

具体的な教え方についての因子分析を、中学・高校それぞれに分けて行い分析した。

##### 4.1. 中学校教員

文部科学省指導要領の実践的側面について、中学教員の間には下記 8 つの潜在因子が認められた(表 4.1)。すなわち、「実践的コミュニケーション活動」(因子1)、「相互の意向を考慮した文字媒体による活動」(因子2)、「教材選定に関して配慮している事柄」(因子3)、「(音声以外の) 言語形式の指導」(因子4)、「正しい言語形式の指導」(因子5)、「言語使用を行う上で必要な活動」(因子6)、「内容に留意した聞き取り」(因子7)、「付加的指導事項」(因子8)である。今回実施したアンケートに回答した中学教員は指導要領の個々の項目をこれら8つのグループに統合して捉えているということである。

---

##### 因子 1:実践的コミュニケーション活動

グループワークを取り入れる、実際に言語を使わせながら文法の指導をするなど、実際に使える英語の習得を促進するためのさまざまな教授法に関する因子。

6. 自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話させる。
  7. 聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ合ったりさせる。
  8. つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が続くよう話させる。
  19. 自分の意見を言う、発表する、報告するなど、考えを深めたり情報を伝えたりする表現を取り上げた言語活動をさせる。
  20. 依頼する、約束する、賛成する/反対するなど、相手の行動を促したり自分の意志を示したりする表現を取り上げた言語活動をさせる。
  25. 実際に英語を使用して互いの気持ちや考えを伝え合うなどのコミュニケーションを図る活動を行わせる。
  26. コミュニケーションを図る活動においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を生徒自ら考えて
-



---

言語活動を行わせる。

27. 文法事項の取扱いについては、用語や用法の区別などを理解するだけでなく、実際に使わせる。
34. 生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用する。
36. 学習形態などを工夫し、ペアワーク、グループワークなどを適宜取り入れる。

---

#### 因子 2: 相互の意向を考慮した文字媒体による活動

手紙、メモ、伝言など書き言葉を使った伝達活動を表す因子。

12. 伝言や手紙などから書き手の意向を理解し、適切に応じさせる。
14. 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書かせる。
15. 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書かせる。
16. 伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書かせる。

---

#### 因子 3: 教材選定に関して配慮している事柄

日本の日常生活、習慣などを扱ったもの、世界の文化に関心を持ち尊重するようなものなど、授業で扱う教材を選定する際に配慮している事項に関する因子。

37. 英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史などに関するものの中から、生徒の心身の発達段階及び興味・関心に即した適切な題材を取り上げる。
38. 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つ教材を使う。
39. 世界や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つ教材を使う。

---

#### 因子 4: (音声以外の) 言語形式の指導

文字符号の指導、語、連語、慣用表現、文法事項など、主に書き言葉としての英語の言語形式面に関する因子。

22. 言語活動を行う中で「文字及び符号」の指導を行う。
23. 言語活動を行う中で「語、連語及び慣用表現」の指導を行う。
24. 言語活動を行う中で「文法事項」の指導を行う。

---

#### 因子 5: 正しい言語形式の指導

強勢、イントネーション、文字、符号など話し言葉としての英語、また書き言葉としての英語の言語形式に関する因子。

1. 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取らせる。
5. 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音させる。
9. 文字や符号を識別し、正しく読ませる。
13. 文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意をして正しく書かせる。

---

#### 因子 6: 言語使用を行う上で必要な活動

挨拶、自己紹介、家庭生活、地域の行事など、実際に言語を使う場面を設定して行う言語使用活動に関する因子。

17. あいさつ、自己紹介、道案内など、特有の表現がよく使われる場面を取り上げた言語活動をさせる。
18. 家庭生活、学校での学習や活動、地域の行事など生徒の身近な暮らしにかかわる場面を取り上げた言語活活動をさせる。
21. 礼を言う、ほめる、謝るなど、気持ちを伝える表現を取り上げた言語活動をさせる。
33. 辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるように指導する。

---

**因子 7: 内容に留意した聞き取り**

質問や依頼を聞いて適切に応じる、聞き返すなどして内容を正しく理解するなど、内容を正確に聞き取ることを重視した活動を表す因子。

3. 質問や依頼などを聞いて適切に応じさせる。
4. 話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解させる。

---

**因子 8: 付加的指導事項**

発音記号、筆記体など言語活動の中心ではないが、付加的な指導事項を表す因子。

30. 発音表記が読めるように指導する。
  31. 筆記体が使えるように指導する。
- 

表 4.1

中学校教員の教え方に関する因子分析表

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8	共通性
J25	<b>.69</b>	-.01	.08	.13	-.07	.06	-.05	-.13	0.51
J26	<b>.59</b>	.02	-.05	.02	.00	.04	-.02	.07	0.37
J36	<b>.55</b>	-.10	-.03	.08	.03	.17	.00	-.19	0.37
J8	<b>.53</b>	.08	-.08	-.03	-.05	-.04	.12	.11	0.38
J7	<b>.52</b>	.08	-.01	-.03	.06	-.16	.16	.16	0.45
J6	<b>.52</b>	.13	.03	.05	-.02	-.02	.15	-.11	0.45
J27	<b>.51</b>	-.15	.04	.23	.03	-.01	.07	-.05	0.30
J19	<b>.49</b>	.18	.03	-.14	.09	.10	-.04	.07	0.53
J34	<b>.36</b>	.15	.11	-.06	-.04	-.06	-.08	.06	0.23
J20	<b>.36</b>	.17	-.01	-.10	.05	.28	-.13	.09	0.43
J16	.02	<b>.80</b>	-.09	.00	-.08	.06	-.01	.02	0.61
J15	.12	<b>.76</b>	-.10	-.01	-.04	.00	-.07	-.11	0.54
J12	-.11	<b>.66</b>	.06	.09	.02	-.06	.12	-.02	0.46
J14	.16	<b>.39</b>	.14	-.09	.06	-.01	-.07	.10	0.37
J11	.09	<b>.39</b>	.02	.15	.02	-.05	.05	-.15	0.21
J38	.00	.01	<b>.87</b>	-.03	-.04	-.06	-.04	.05	0.72
J39	-.04	-.08	<b>.82</b>	.02	-.03	.08	.07	.00	0.68
J37	.16	-.03	<b>.60</b>	-.02	.08	.06	-.05	-.11	0.48
J24	.15	-.02	-.06	<b>.79</b>	-.09	.01	-.10	.09	0.58
J23	.05	.07	.01	<b>.70</b>	.05	-.10	.01	.13	0.52
J22	-.06	.07	.03	<b>.54</b>	.08	.07	.00	.25	0.44
J5	.20	-.14	-.04	-.01	<b>.72</b>	-.09	-.09	.06	0.50
J1	-.05	-.14	-.02	-.11	<b>.64</b>	.05	.04	.18	0.43
J9	-.12	.14	.02	.08	<b>.59</b>	-.09	.10	-.12	0.38
J13	-.15	.26	.05	.14	<b>.36</b>	.18	-.02	-.10	0.35
J18	.12	-.02	.03	-.02	-.11	<b>.62</b>	.15	.06	0.53
J17	.29	-.17	-.05	-.05	.04	<b>.49</b>	.03	-.03	0.39
J21	-.03	.18	.03	-.02	.06	<b>.47</b>	.03	.07	0.37

J33	-.05	-.01	.09	.06	-.13	<b>.36</b>	-.02	.26	0.20
J4	.12	.05	.08	-.08	-.03	-.03	<b>.69</b>	.03	0.65
J3	.06	-.03	-.09	-.04	.06	.21	<b>.60</b>	-.03	0.49
J30	-.07	-.03	-.01	.19	.05	.11	.05	<b>.54</b>	0.36
J31	.02	-.12	-.01	.16	.04	.04	-.04	<b>.42</b>	0.20
信頼性 $\alpha$	.834	.747	.809	.729	0.667	0.624	.688	.430	
固有値	7.790	2.762	1.884	1.587	1.304	1.179	1.170	1.094	
負荷量平方和	7.256	2.222	1.412	1.068	0.793	0.636	0.558	0.541	

## 4.2. 高校の教え方

文部科学省の指導要領の実践的側面について、高校教員の間には下記7つの因子が求められた(表 4.2)。すなわち、「内容把握を踏まえた上での表現活動」(因子1)、「実践的なオーラル活動」(因子2)、「読解重視の活動」(因子3)、「英語学態度の育成」(因子4)、「英語の言語形式的側面の学習」(因子5)、「基本的学習項目の指導」(因子6)、「高い完成度を目指したライティング指導」(因子7)である。

### 因子 1: 内容把握を踏まえた上での表現活動

聞いたり読んだりした内容について、メモを取る、サマリーを書く、自分の考えを書き発表する、意見交換をする、などの英語、日本語での発展的な活動に関する因子。

2. 英語を聞いて、その情報や話し手の意向などの概要や要点を、サマリーを書くなどして、とらえる。
5. まとまりのある英語を聞いて、必要に応じメモを取るなどしながら、その概要や要点をとらえさせる。
7. 読んだ内容に関して聞き話す活動をさせる。
8. まとまりのある英語を読んで、その内容について、概要や要点を英語でまとめさせる。
9. 聞き取った内容に対して自分の思いや考えなどを整理して、日本語で書いたり話したりさせる。
10. やさしい話題について話し合ったり(問題点や原因などを考え、意見交換する)、討論したり(賛成と反対の立場から相手を理論的に説得する)させる。
13. 伝えようとする情報や考えなどを、整理し、ジェスチャー、スピードなどを工夫して効果的に発表させる。
15. 聞いたり読んだりして得た情報をまとめ、発表させる。
21. 実際の言語使用場面を反映させた、複数の領域! にまたがる総合的な活動を設定して練習を行わせる。
25. 聞いた内容について、概要や要点を書かせる。
26. 読んだ内容について、概要や要点を書かせる。
27. 聞いた内容について、自分の考えなどを整理して書かせる。
28. 聞いた内容について、概要や要点を書かせる。
29. 聞いた内容について、自分の考えなどを整理して書かせる。
30. 自分が伝えようとする内容を整理して書かせる。
34. 文章の構成や展開に留意しながら書かせる。
36. 場面やことばの働きを設定して書かせる。
40. まとまりのある英語を読んで、その内容について、概要や要点を英語でまとめさせる。
42. 読んだ内容について、書き手の意向(考え、意見、気持ち、感情など)を理解し、自分の考え、感想などを英語でまとめさせる。
43. 読んだ内容について、書き手の意向(考え、意見、気持ち、感情など)を理解し、自分の考え、感情をまとめさせる。
53. 教科書以外の読み物を楽しみのために多読させる。

---

## 因子2:実践的なオーラル活動

ティーム・ティーチング、ペア・ワーク、グループ・ワークなどを取り入れた、実際に英語を使う活動に関する因子である。

1. 英語を聞いて、その情報や話し手の意向(考え、意見、気持ち、感情など)を理解させる。
3. 英語を聞いて、その情報や話し手の意向について質問したり、感想を言わせる。
4. 身近な話題について英語で情報を伝えたり会話をさせる。
- 6.自分が考えていることなどについての考えをまとめ、簡単なスピーチ等の発表をさせる。
13. 伝えようとする情報や考えなどを、整理し、ジェスチャー、スピードなどを工夫して効果的に発表させる。
- 14.モデルをもとにするなどして、スキット、ロールプレイなどを創作し、演じさせる。
- 16.関心のあることについて相手に質問させたり、相手の質問に答えさせたりする。
19. 聞き取った内容に対して簡単な言葉で返答したり、ジェスチャーなどの非言語的手段で答えたりして反応させる。
- 22.言語材料の分析や説明は必要最小限にとどめ、実際の場面でどのように使われるかを理解し、実際に使えることに重点を置いた活動をさせる
- 23.中学校における指導内容との関連を考慮した上で、音声によるコミュニケーション能力を重視した活動させる。
- 64.ティーム・ティーチングやペア・ワーク、グループ・ワークを適宜取り入れた指導。
- 65.視聴覚教材や、LL、コンピュータ、情報通信ネットワークなどを生かした指導。
- 66.ネイティブスピーカーなどの協力を得て行う授業を積極的に取り入れる。

---

## 因子3:読解重視の活動

文法や語彙、段落の構成などに注意して読む、速読・精読をおこなう活動に関する因子である。

- 39.読んだ内容について、必要な特定情報を読み取らせる。
- 41.まとまりのある英語を読んで、その内容について、概要や要点を日本語でまとめさせる。
- 44.読んだ内容について、英語で質問に答えさせる。
- 45.読んだ内容について、日本語で質問に答えさせる。
- 47.未知の語の意味や文法の知識を活用して推測したり、背景となる知識を活用したりしながら読む。
- 48.文章の中でポイントとなる語句や文、段落の構成や展開などに注意して読ませる。
- 49.目的や状況に応じて、速読や精読など、適切な読み方をさせる。

---

## 因子4:英語学習態度の育成

日常的な話題から、グローバルな視点へと広がる考え方を育てる指導の必要性に関する因子である。

- 57.家庭生活や学校生活の中で生徒の1興味・関心の対象となる日常的で身近な話題を取り上げる。
- 58.学習成果の成果を利用して、教室の内外において積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
- 59.多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育む。
- 60.世界や我が国の生活や文化についての理解を深めさせるとともに、言語や文化に対する関心を深めさせる。
- 61.広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を広めるとともに、国際協調の精神を養う。

---

## 因子5:英語の言語形式的側面の学習

文型・文法、語句の解説、英文和訳など、英語の言語形式に関する指導に関する因子である。

17. オーラル・コミュニケーション活動に必要な基本的な文型や文法事項などについて説明し、理解させる。
50. 英文和訳をさせる。
51. 語句の解説をする
52. 文型・文法の解説をする。

---

## 因子6:基本的学習項目の指導

中学校における基礎的な学習の指導と、それを基にした多様な場面での言語活動に関する因子である。

18. オーラル・コミュニケーション活動に必要な基本的な文型や文法事項!などを使った練習をさせる。
-

54. 生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を整理して教える
55. 生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を用い、多様な場面での言語使用の指導をする。

**因子7:高い完成度を目指したライティング指導**

正確で的確な場面に応じた英文が書けるように、書く過程を重視した指導、表現の指導に関する因子である。

31. 自分の伝えようとする内容について、整理して、場面や目的に応じて、読み手が理解できるように書かせる。
33. 考えや気持ちを伝えるのに必要な語句を教え、活用させる。
35. 文法や語法について正しく書くことに留意して書かせる。
37. より豊かな内容で書けるように、書き直しを含めて書く過程を重視した指導をする。
38. より適切な構成や言語形式で書けるように 2オ、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導をする。

表 4.2

高等学校教員の教え方に関する因子分析表

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	共通性
H1	-0.02	<b>0.50</b>	0.17	0.00	-0.06	-0.06	0.04	0.32
H2	<b>0.57</b>	0.13	0.00	0.00	0.04	0.01	-0.09	0.36
H3	0.24	<b>0.46</b>	-0.03	0.01	-0.03	0.04	0.06	0.43
H4	0.04	<b>0.56</b>	-0.04	-0.05	-0.04	-0.01	0.17	0.41
H5	<b>0.40</b>	0.22	0.15	-0.09	0.12	-0.06	-0.04	0.32
H6	0.32	<b>0.39</b>	0.01	-0.09	0.05	-0.22	0.13	0.45
H7	<b>0.50</b>	0.26	-0.03	-0.05	0.04	0.07	-0.03	0.40
H8	<b>0.64</b>	0.21	-0.16	0.03	0.05	-0.10	0.07	0.59
H9	<b>0.49</b>	0.06	-0.01	0.09	-0.04	0.26	-0.06	0.38
H10	<b>0.51</b>	0.17	-0.14	0.05	0.02	-0.16	0.13	0.45
H13	<b>0.39</b>	<b>0.39</b>	-0.20	0.04	0.07	0.11	0.01	0.43
H14	-0.07	<b>0.62</b>	0.04	-0.15	-0.05	0.00	0.08	0.36
H15	<b>0.58</b>	0.25	-0.04	-0.05	0.01	-0.07	0.04	0.52
H16	0.07	<b>0.52</b>	-0.04	-0.09	-0.03	0.03	0.22	0.41
H17	0.09	0.00	0.02	-0.07	<b>0.43</b>	0.42	0.18	0.38
H18	0.05	0.09	0.04	-0.12	0.27	<b>0.48</b>	0.13	0.34
H19	-0.12	<b>0.44</b>	0.13	0.01	-0.07	0.24	0.11	0.34
H21	<b>0.38</b>	0.32	-0.14	0.10	0.00	0.03	0.04	0.41
H22	-0.22	<b>0.59</b>	0.10	0.02	-0.19	0.22	0.11	0.46
H23	-0.07	<b>0.48</b>	0.18	0.01	-0.17	0.26	-0.06	0.39
H25	<b>0.79</b>	-0.13	-0.01	-0.07	0.00	0.16	0.02	0.55
H26	<b>0.74</b>	-0.16	0.21	-0.20	-0.01	0.09	0.06	0.61
H27	<b>0.85</b>	-0.10	-0.12	0.02	-0.04	0.11	0.05	0.65
H28	<b>0.77</b>	-0.17	0.03	-0.02	-0.04	0.06	0.20	0.66
H29	<b>0.52</b>	0.05	0.06	-0.06	-0.14	0.05	0.27	0.53
H30	<b>0.45</b>	0.05	0.09	-0.09	-0.13	-0.05	0.44	0.64

H31	0.40	0.01	0.08	0.01	-0.15	-0.04	<b>0.48</b>	0.64
H33	-0.04	0.24	0.16	0.05	0.05	0.11	<b>0.41</b>	0.42
H34	<b>0.41</b>	-0.06	0.06	0.06	0.08	-0.08	0.40	0.52
H35	0.07	-0.13	0.24	0.03	0.28	0.03	<b>0.47</b>	0.49
H36	<b>0.46</b>	-0.05	-0.16	0.17	0.00	0.06	0.26	0.39
H37	0.41	-0.05	-0.02	0.12	0.04	-0.03	<b>0.49</b>	0.60
H38	0.35	0.01	0.01	0.09	0.06	-0.04	<b>0.49</b>	0.59
H39	-0.04	0.14	<b>0.67</b>	-0.02	0.07	-0.09	0.09	0.52
H40	<b>0.68</b>	-0.07	0.31	-0.08	0.01	-0.06	-0.13	0.56
H41	0.38	-0.07	<b>0.54</b>	-0.01	-0.08	0.13	-0.09	0.56
H42	<b>0.73</b>	-0.06	0.16	0.03	-0.04	-0.07	-0.06	0.59
H43	<b>0.40</b>	-0.02	0.35	0.07	-0.09	0.22	-0.08	0.49
H44	0.08	0.21	<b>0.44</b>	0.04	-0.02	-0.17	0.04	0.35
H45	-0.18	0.09	<b>0.46</b>	0.08	0.14	0.04	0.12	0.30
H47	0.05	0.02	<b>0.51</b>	0.16	0.02	-0.15	0.10	0.42
H48	-0.03	0.05	<b>0.53</b>	0.05	0.22	-0.10	0.22	0.51
H49	0.26	0.02	<b>0.54</b>	0.09	0.08	-0.16	-0.03	0.53
H50	-0.05	-0.03	0.08	-0.08	<b>0.56</b>	0.11	0.06	0.35
H51	-0.10	-0.04	0.10	0.04	<b>0.69</b>	0.15	0.02	0.55
H52	0.00	-0.03	0.10	-0.02	<b>0.74</b>	0.06	0.00	0.57
H53	<b>0.39</b>	-0.08	0.16	0.11	-0.02	-0.15	0.05	0.27
H54	-0.08	-0.03	-0.17	0.15	0.10	<b>0.56</b>	-0.04	0.33
H55	0.19	0.09	-0.20	0.17	0.06	<b>0.61</b>	-0.07	0.45
H57	0.03	0.07	-0.15	<b>0.50</b>	0.03	0.23	0.01	0.34
H58	0.23	0.10	0.02	<b>0.50</b>	-0.03	-0.06	-0.04	0.44
H59	-0.10	-0.10	0.20	<b>0.70</b>	-0.14	0.00	0.17	0.60
H60	-0.12	0.01	0.14	<b>0.73</b>	0.04	0.10	0.08	0.63
H61	0.01	-0.09	0.11	<b>0.75</b>	-0.02	0.08	-0.01	0.60
H64	-0.05	<b>0.68</b>	0.15	0.05	0.10	-0.05	-0.21	0.43
H65	0.16	<b>0.35</b>	0.01	0.13	0.05	-0.01	-0.19	0.22
H66	0.00	<b>0.59</b>	0.05	0.06	0.13	0.01	-0.21	0.34
信頼性 $\alpha$	0.9288	0.8214	0.8208	0.8103	0.7067	0.5438	0.8249	
固有値	15.45	3.81	3.26	2.19	2.02	1.71	1.58	
負荷量平方和	26.23	32.00	36.77	39.66	42.23	44.36	46.19	

## 5. 理念と教え方の因子相関等の分析

### 5.1. 中学校教員

基本的には、理念に関する因子と教育活動に関する因子は互いに独立しているようである。つまり、教育に関する考えと、実際の教育活動は互いに独立した別の次元にあると考えられる。通常、常識ではなんらかの教育上の信念 (belief) があり、それが教育活動という形で具体化されると考え

られるが、今回の調査の示すところそのような関係は認められなかった。理念を実行するためにはさまざまな現実的な問題を解決しなければならないことがあることが示唆されていると言え。ただし、表 5.2 が示すように、部分的に次の因子については弱い相関が認められた。

表 5.1

理念と教え方の相関係数

教え方	信頼性	理念				
		因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5
		<b>0.88</b>	<b>0.74</b>	<b>0.54</b>	<b>0.90</b>	<b>0.38</b>
因子 1	<b>0.83</b>	0.15	0.21	0.18	-0.04	-0.16
因子 2	<b>0.75</b>	0.11	0.15	0.14	-0.17	-0.04
因子 3	<b>0.81</b>	0.06	0.18	0.2	-0.13	-0.06
因子 4	<b>0.73</b>	0.05	0.14	0.1	-0.06	0.05
因子 5	<b>0.68</b>	0.08	0.25	0.24	-0.14	-0.03
因子 6	<b>0.62</b>	0.19	0.23	0.19	0	-0.06
因子 7	<b>0.69</b>	0.13	0.16	0.13	-0.09	-0.08
因子 8	<b>0.43</b>	-0.02	0.1	0.11	-0.18	0.06

表 5.2

信頼性係数で訂正した理念と教え方の相関係数

教え方	理念				
	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5
因子 1	0.18 **	0.27 **	0.27 **	-0.05	-0.28 **
因子 2	0.14 **	0.20 **	0.22 **	-0.21 **	-0.08
因子 3	0.07	0.23 **	0.30 **	-0.15 **	-0.11
因子 4	0.06	0.19 **	0.16 *	-0.07	0.10
因子 5	0.10	<b>0.35 **</b>	<b>0.40 **</b>	-0.18 *	-0.06
因子 6	0.26 **	<b>0.39 **</b>	<b>0.33 **</b>	0.00	-0.12
因子 7	0.17 **	0.22 **	0.21 **	-0.11	-0.16
因子 8	-0.03	0.18 *	0.23 *	-0.29 **	0.15

注: 値はいずれも因子得点をもとに行ったピアソン積率相関係数を表す。信頼性係数をもとに訂正 (correction for attenuation) を行った。注: \*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ .

すなわち、国際的に通用する伝達能力および個人レベルでの国際交流のために英語を教えるという理念を持っている教師は、実際に言語活動を行わせる教育活動を行っていると同時に、正しい言語形式をも重視して指導していると回答している傾向がある。

## 5.2. 高校教員

高校教員の場合も、理念と教え方の関係では、強い相関は見られなかった。しかしながら、わずかではあるが相関が見られたものがあつた(表5.4)。「国際的な伝達レベル」(理念の因子2)と「英語学習態度の育成」(教え方の因子4) (0.31)、「積極的態度の育成」(理念の因子3)と「実践的な

オーラル活動」(教え方の因子2) (0.33)および「英語学習態度の育成」(教え方の因子4) (0.31)、「読む書く能力」(理念の因子5)と「読解重視の活動」(教え方の因子3) (0.40)および「文法・文型の解説」(教え方の因子5) (0.31)、「高い完成度を目指したライティング指導」(教え方の因子) (0.38)との間に弱い相関が見られた。

表 5.3

理念の因子と教え方の因子の相関

	信頼性	理念				
		因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5
教え方		<b>0.92</b>	<b>0.64</b>	<b>0.70</b>	<b>0.56</b>	<b>0.37</b>
因子 1	<b>0.93</b>	0.17	0.19	0.08	0.07	0.13
因子 2	<b>0.82</b>	0.09	0.18	0.25	0.05	0.04
因子 3	<b>0.82</b>	0.17	0.20	0.16	-0.06	0.22
因子 4	<b>0.81</b>	0.10	0.22	0.23	0.02	0.10
因子 5	<b>0.71</b>	0.09	0.10	0.03	0.07	0.16
因子 6	<b>0.54</b>	-0.04	-0.10	0.05	0.00	-0.11
因子 7	<b>0.83</b>	0.10	0.19	0.13	-0.04	0.21

表 5.4

理念の因子と教え方の因子の相関

教え方	理念				
	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5
因子 1	0.18 **	0.25 **	0.10	0.10	0.22 *
因子 2	0.10	0.25 **	<b>0.33 **</b>	0.07	0.07
因子 3	0.20 **	0.28 **	0.21 **	-0.09	<b>0.40 **</b>
因子 4	0.12 *	<b>0.31 **</b>	<b>0.31 **</b>	0.03	0.18 *
因子 5	0.11	0.15 *	0.04	0.11	<b>0.31 **</b>
因子 6	-0.06	-0.17 *	0.08	0.00	-0.24 *
因子 7	0.12 **	0.26 **	0.17 *	-0.06	<b>0.38 **</b>

注:値はいずれも因子得点をもとに行ったピアソン積率相関係数を表す。信頼性係数をもとに訂正 (correction for attenuation)を行った。\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ .

## 6. 教員の基本情報と理念についての因子相関等による分析

### 6.1. 中学校教員

#### 6.1.1. 理念と年齢の関係

英語教育の理念に関する因子と年齢には有意な差は見られなかった。すなわち、通常、英語教育に関する信条については、教員の年齢によって差があるように思われるが、今回の調査ではどの年齢の教員であれ同じような信条であるという結果となった。



表 6.1

## 理念と年齢(中学校教員)

因子		平方和	自由度	平均平方	F 値
1. 学習者全員の英語到達レベル	グループ間	2	4	0.42	0.48
	グループ内	348	389	0.89	
	合計	349	393		
2. 国際的に通用する英語伝達能力	グループ間	2	4	0.46	0.57
	グループ内	313	389	0.80	
	合計	315	393		
3. 個人レベルでの交流	グループ間	1	4	0.13	0.20
	グループ内	259	389	0.67	
	合計	260	393		
4. 実践的コミュニケーション能力の定義	グループ間	3	4	0.81	1.39
	グループ内	226	389	0.58	
	合計	229	393		
5. コミュニケーションを前提とした英語指導	グループ間	0	4	0.11	0.22
	グループ内	186	389	0.48	
	合計	187	393		

## 6.1.2. 教員歴と理念

年齢との関係と同様、教員経歴の長さとの間にも有意な関係は認められなかった。

表 6.2

## 理念と教員歴(中学校教員)

因子		平方和	自由度	平均平方	F 値
1. 学習者全員の英語到達レベル	グループ間	2.16	4	0.54	0.61
	グループ内	347.09	389	0.89	
	合計	349.25	393		
2. 国際的に通用する英語伝達能力	グループ間	4.72	4	1.18	1.48
	グループ内	310.05	389	0.80	
	合計	314.77	393		
3. 個人レベルでの交流	グループ間	2.77	4	0.69	1.05
	グループ内	257.03	389	0.66	
	合計	259.81	393		
4. 実践的コミュニケーション能力の定義	グループ間	2.37	4	0.59	1.02
	グループ内	226.94	389	0.58	
	合計	229.31	393		
5. コミュニケーションを前提とした英語指導	グループ間	0.47	4	0.12	0.24
	グループ内	186.37	389	0.48	
	合計	186.84	393		

### 6.1.3. 研修と理念

調査対象を何らかの研修を受けた教員と研修を受けていない教員のグループに分けて、両者の間に理念の上で差があるかどうかを検定した。その結果次の因子について、研修のある教員の方がいない教員よりも意識が高いという傾向が認められた(表 6.3)。すなわち、何らかの研修を受けた教員は、「学習者全員の英語到達レベル」(因子1) ( $t(390) = 1.99; p < .05, df = 390$ )、「国際的に通用する伝達能力」(因子2) ( $t(390) = 2.33; p < .05$ )、「個人レベルでの交流」(因子3) ( $t(390) = 2.14; p < .05$ )、これらについて意識が高いという結果である。一方、「実践的コミュニケーション能力の定義」(因子4) ( $t = -1.75$ )、「コミュニケーションを前提とした英語指導」(因子5) ( $t(390) = -1.67$ )については研修を受けたことのある教員と受けたことのない教員の回答の間に差が見られなかった。

表 6.3

#### 理念と研修(中学校教員)

因子	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差
1. 学習者全員の英語到達レベル	1.99	390	0.05**	0.20
2. 国際的に通用する英語伝達能力	2.33	390	0.02**	0.22
3. 個人レベルでの交流	2.14	390	0.03**	0.18
4. 実践的コミュニケーション能力	-1.75	390	0.08	-0.14
5. コミュニケーションを前提とした英語指導	-1.67	390	0.10	-0.12

注:\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ .

### 6.1.4. 受験意識と理念

受験に関しては、意識の高い教員に比べて意識の低い教員は「コミュニケーションを前提とした英語指導」(因子5)を認める傾向にあった ( $F(3, 379) = 3.00; p < .05$ )。つまり、比較的受験を意識する必要のない環境にある教員はコミュニケーションに必要な言語知識を教えることを意識しているが、それは必ずしも受験に必要なものではないといえるかもしれない(表 6.4)

表 6.4

#### 理念と受験意識(中学校教員)

因子		平方和	自由度	平均平方	F 値
1. 学習者全員の英語到達レベル	グループ間	0.64	3	0.21	0.24
	グループ内	342	379	0.90	
	合計	343	382		
2. 国際的に通用する英語伝達能力	グループ間	3.44	3	1.15	1.43
	グループ内	304	379	0.80	
	合計	307	382		
3. 個人レベルでの交流	グループ間	0.76	3	0.25	0.38
	グループ内	253	379	0.67	
	合計	254	382		
4. 実践的コミュニケーション能力	グループ間	0.11	3	0.04	0.06
	グループ内	223	379	0.59	
	合計	223	382		

5. コミュニケーションを前提とした英語指導	グループ間	4.27	3	1.42	3.00 *
	グループ内	180	379	0.47	
	合計	184	382		

注: \*  $p < .05$

表 6.5

理念と受験意識の有意グループ

コミュニケーションを前提とした英語指導

	高い	比較的高い	比較的低い	低い
Mean	-0.15	0.01	-0.04	0.42
高い	-	ns	ns	*
比較的高い	-	-	ns	*
比較的低い	-	-	-	**
低い	-	-	-	-

注: Scheffe 検定による多重比較。\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ . ns = 有意差なし

## 6.2. 高校教員

### 6.2.1 理念と年齢

理念と年齢の間には、強い相関は認められなかった。ただし、「社会的場面で必要な英語力」(因子4)非常に弱い傾向が見られた。しかし、多重比較の結果、個々のグループ間には差が見られなかった。

表 6.6

理念と年齢(高校教員)

因子		平方和	自由度	平均平方	F 値
1. 学習者全員の英語到達度レベル	グループ間	2	3	0.55	0.59
	グループ内	355	381	0.93	
	合計	356	384		
2. 国際的に通用する伝達レベル	グループ間	4	3	1.20	1.46
	グループ内	313	381	0.82	
	合計	317	384		
3. 積極的態度	グループ間	1	3	0.31	0.40
	グループ内	301	381	0.79	
	合計	302	384		
4. 社会的場面で必要な英語能力	グループ間	4	3	1.50	2.21
	グループ内	258	381	0.68	
	合計	263	384		
5. 読む書く能力の重要性	グループ間	1	3	0.31	0.51
	グループ内	234	381	0.61	
	合計	235	384		

### 6.2.2. 理念と教員歴

理念と教員歴の関係では、「国際的に通用する伝達レベル」(因子2)でのグループ間で有意差が見られた( $F(4, 381) = 2.56, p < .05$ )。また、表 6.8 から、教員歴の比較的長い教員の方が(特に11年から20年)国際的に通用する伝達レベルの必要性を強く感じていると推測できる。

表 6.7

理念と教員歴(高校教員)

因子		平方和	自由度	平均平方	F 値
1. 学習者全員の英語到達度レベル	グループ間	3.28	4	0.82	0.88
	グループ内	355.50	381	0.93	
	合計	358.78	385		
2. 国際的に通用する伝達レベル	グループ間	8.33	4	2.08	2.56 *
	グループ内	309.57	381	0.81	
	合計	317.90	385		
3. 積極的態度	グループ間	0.77	4	0.19	0.24
	グループ内	301.23	381	0.79	
	合計	302.00	385		
4. 社会的場面で必要な英語能力	グループ間	2.15	4	0.54	0.78
	グループ内	261.42	381	0.69	
	合計	263.57	385		
5. 読む書く能力の重要性	グループ間	2.50	4	0.63	1.02
	グループ内	232.80	381	0.61	
	合計	235.30	385		

注:\*  $p < .05$

表 6.8

国際的に通用する伝達レベルに関する年齢別全体平均値との差

教員歴	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	最小値	最大値
5年以内	48	-0.24	1.01	0.15	-4.42	1.14
5~10年	78	-0.09	0.89	0.10	-3.30	1.48
11~15年	72	0.14	0.79	0.09	-1.88	1.63
16~20年	84	0.19	0.91	0.10	-3.17	1.62
20年以上	104	-0.08	0.93	0.09	-3.17	1.57
合計	386	0.00	0.91	0.05	-4.42	1.63

### 6.2.3. 理念と研修

調査対象を過去5年以内で何らかの研修を受けた教員と研修を受けたことのない教員のグループに分けて、両者の間に理念の上で差があるかどうかを検定した(表 6.9)。その結果、何らかの研修を受けた教員は、「国際的に通用する伝達レベル」(因子2)( $t(324) = 2.54; p < .01$ )、「積極的態度」(因子3)( $t(330) = 3.83; p < .00$ )について意識が高いという結果が出た。

表 6.9

## 理念と研修(高校教員)

	T 値	自由度	平均値の差
1. 学習者全員の英語到達度レベル	1.63	379	0.16
2. 国際的に通用する伝達レベル	2.54 **	324	0.24
3. 積極的態度	3.83 **	330	0.35
4. 社会的場面で必要な英語能力	1.24	379	0.11
5. 読む書く能力の重要性	0.67	379	0.05

注: \*\*  $p < .01$  有意確率 (両側検定)

## 6.2.4. 理念と受験意識

受験への意識の高さに関しては、意識が高い教員は低い教員に比べて、「英語学習者の英語到達レベル」(因子1)( $F(3, 380) = 4.94$ ;  $p < .01$ )、「国際的に通用する伝達レベルに到達ことを目標とする」(因子2)( $F(3, 380) = 2.56$ ;  $p < .01$ )、「読む書く能力の重要性」(因子5)( $F(3, 380) = 13.77$ ;  $p < .01$ )に賛成する傾向があるという結果が出た。つまり、受験意識の高い高校教員ほど、高い目標を目指している傾向があるといえる。

表 6.10

## 理念と受験意識(高校教員)

因子		平方和	自由度	平均平方	F 値
1. 学習者全員の英語到達度レベル	グループ間	13.44	3	4.48	4.94 **
	グループ内	344.72	380	0.91	
	合計	358.17	383		
2. 国際的に通用する伝達レベル	グループ間	27.43	3	9.14	12.04 **
	グループ内	288.53	380	0.76	
	合計	315.95	383		
3. 積極的態度	グループ間	1.55	3	0.52	0.66
	グループ内	297.47	380	0.78	
	合計	299.02	383		
4. 社会的場面で必要な英語能力	グループ間	3.69	3	1.23	1.80
	グループ内	259.63	380	0.68	
	合計	263.32	383		
5. 読む書く能力の重要性	グループ間	23.06	3	7.69	13.78 **
	グループ内	211.97	380	0.56	
	合計	235.03	383		

注: \*\*  $p < .01$ . 有意確率 (両側検定)

表 6.11

## 理念と受験意識の有意グループ(因子1:学習者全員の英語到達度レベル)

	高い	比較的高い	比較的低い	低い
Mean	0.29	0.04	0.05	-0.24

高い	-	ns	ns	**
比較的高い	-	-	ns	ns
比較的低い	-	-	-	ns
低い	-	-	-	-

注: Scheffe 検定による多重比較。\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ . ns = 有意差なし

表 6.12

理念と受験意識の有意グループ(因子2:国際的に通用する伝達レベル)

	高い	比較的高い	比較的低い	低い
Mean	0.51	0.00	-0.01	-0.27
高い	-	**	**	**
比較的高い	-	-	ns	ns
比較的低い	-	-	-	ns
低い	-	-	-	-

注: Scheffe 検定による多重比較。\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ . ns = 有意差なし

表 6.13

読む書く能力の重要性(因子5)に関する受験意識のグループ間比較

	高い	比較的高い	比較的低い	低い
Mean	0.46	0.06	-0.04	-0.26
高い	-	*	**	**
比較的高い	-	-	ns	ns
比較的低い	-	-	-	ns
低い	-	-	-	-

注: Scheffe 検定による多重比較。\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ . ns = 有意差なし

## 7. 教員の基本情報と教え方についての因子相関等による分析

### 7.1. 中学教員

#### 7.1.1. 教え方と年齢

20代よりも50代の教員が「付加的事項」(因子8)すなわち、筆記体や発音記号などを頻繁に指導しているという傾向が認められた( $F(4, 389) = 4.81; p < .01$ )。また、統計的な有意差はないものの、教育活動の各因子に含まれる項目の得点の平均値を見ると、「付加的指導事項」に含まれる項目の平均値は、他の因子に含まれる項目の平均値と比べて低い(1.97)ことが分かる。

表 7.1

教え方と年齢(中学校教員)

因子		平方和	自由度	平均平方	F 値
1. 1. 実践的コミュニケーション活動	グループ間	1.26	4	0.32	0.36
	グループ内	338.66	389	0.87	
	合計	339.92	393		

2. 相互の意向を考慮した文字媒体の活動	グループ間	4.83	4	1.21	1.45
	グループ内	324.09	389	0.83	
	合計	328.92	393		
3. 教材選定	グループ間	5.92	4	1.48	1.73
	グループ内	333.27	389	0.86	
	合計	339.19	393		
4. 言語活動を行う中での言語材料の指導	グループ間	1.65	4	0.41	0.53
	グループ内	302.10	389	0.78	
	合計	303.75	393		
5. 言語使用を行う上で必要な活動	グループ間	3.59	4	0.90	1.18
	グループ内	294.54	389	0.76	
	合計	298.13	393		
6. 正しい言語形式の指導	グループ間	0.67	4	0.17	0.23
	グループ内	288.94	389	0.74	
	合計	289.61	393		
7. 内容に留意した聴き取り	グループ間	4.08	4	1.02	1.38
	グループ内	286.90	389	0.74	
	合計	290.98	393		
8. 付加的指導事項	グループ間	11	4	2.72	4.81 **
	グループ内	220	389	0.57	
	合計	231	393		

注:\*  $p<.05$ . \*\*  $p<.01$ . 有意確率 (両側検定)

しかし、統計的には年齢による大きな違いは見られないものの、単純な平均値からすると「読むこと」の言語活動の、「書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読させる」、授業全体について考慮していることの「発音表記が読めるように指導する」で、20代の教員の回答が他の年代と比べて多少低い値を示している。(付録、中間報告参照)

### 7.1.2. 教え方と教員歴

上述、7.1.1.の結果がここでも裏付けられている。すなわち、表 7.2 の示す通り、有意差は見られないものの、教員歴が 20 年以上の教員に「付加的事項」を強調する傾向が認められた ( $F(4, 389) = 2.77; p<.05$ )。

表 7.2

## 教え方と教員歴(中学校教員)

因子		平方和	自由度	平均平方	F 値
1. 実践的コミュニケーション活動	グループ間	2.38	4	0.60	0.69
	グループ内	337.53	389	0.87	
	合計	339.92	393		
2. 相互の意向を考慮した文字媒体の活動	グループ間	1.27	4	0.32	0.38
	グループ内	327.65	389	0.84	
	合計	328.92	393		
3. 教材選定	グループ間	1.96	4	0.49	0.57
	グループ内	337.23	389	0.87	
	合計	339.19	393		
4. (音声以外の)言語形式の指導	グループ間	1.17	4	0.29	0.38
	グループ内	302.58	389	0.78	
	合計	303.75	393		
5. 言語使用を行う上で必要な活動	グループ間	3.88	4	0.97	1.28
	グループ内	294.25	389	0.76	
	合計	298.13	393		
6. 正しい言語形式の指導	グループ間	2.14	4	0.54	0.73
	グループ内	287.47	389	0.74	
	合計	289.61	393		
7. 内容に留意した聴き取り	グループ間	1.30	4	0.33	0.44
	グループ内	289.68	389	0.74	
	合計	290.98	393		
8. 付加的指導事項	グループ間	6.38992	4	1.597	2.77 *
	グループ内	224.36	389	0.577	
	合計	230.75	393		

注:\*  $p<.05$ . \*\*  $p<.01$ . 有意確率(両側検定)

また、教育経験の違いによる教え方の違いはほとんどないものの、単純な平均値からすると「生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用する」に関しては、教職経験5年未満の教員が他と比べて、低い値をしめしている。(中間報告参照)

### 7.1.3. 教え方と研修

何らかの形で研修を受けたことのある教員が受けたことのない教員よりも、「実践的コミュニケーション活動」(因子1) ( $t(390)=3.27$ ;  $p<..01$ )、「相互の意向を考慮した文字媒体の活動」(因子2) ( $t(390)=3.80$ ;  $p<..01$ )、「言語使用を行う上で必要な活動」(因子5) ( $t(390)=2.60$ ;  $p<..01$ )、「正しい言語形式の指導」(因子6) ( $t(390)=2.32$ ;  $p<.05$ )、「内容に留意した聞き取り」(因子7) ( $t(390)=2.86$ ;  $p<..01$ )、などの教育活動内容を強調しているという結果であった(表 7.3)。すなわち研修はこれらの事項に目を向けるのに効果を挙げているといえる。一方、「教材選定に関して配慮



している事柄」(因子3) ( $t(390) = 1.83$ )、「(音声以外の)言語形式の指導」(因子5) ( $t(390) = 0.67$ )、「付加的指導事項」(因子8) ( $t(390) = 1.96$ )については何らかの形で研修を受けたことのある教員と研修を受けたことのない教員の間で差が見られなかった。

表 7.3  
教え方と研修(中学校教員)

	自由度	t 値	平均値の差
1. 実践的コミュニケーション活動	390	3.27 **	0.31
2. 相互の意向を考慮した文字媒体の活動	390	3.80 **	0.36
3. 教材選定	390	1.83	0.18
4. (音声以外の)言語形式の指導	390	0.67	0.06
5. 言語使用を行う上で必要な活動	390	2.60 **	0.23
6. 正しい言語形式の指導	390	2.32 *	0.21
7. 内容に留意した聴き取り	390	2.86 **	0.25
8. 付加的指導事項	390	1.96	0.16

注:\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ . 有意確率(両側検定)

#### 7.1.4. 教え方と受験意識

理念の場合とは異なり、実際の教育活動内容については受験意識の高さとの間に大きな差はなかった。ただし「内容に留意した聞き取り」(因子7) ( $F(3, 379) = 3.80$ ;  $p < .01$ )について、意識の高い教員が意識の低い教員よりも強調している傾向が認められた。高校入試にリスニング・テストが入っていることが理由であると推察される。

表 7.4  
教え方と受験意識(中学校教員)

因子		平方和	自由度	平均平方	F 値
1. 実践的コミュニケーション活動	グループ間	3.81	3	1.27	1.46
	グループ内	330.09	379	0.87	
	合計	333.91	382		
2. 相互の意向を考慮した文字媒体の活動	グループ間	1.07	3	0.36	0.42
	グループ内	318.31	379	0.84	
	合計	319.38	382		
3. 教材選定	グループ間	3.53	3	1.18	1.37
	グループ内	325.90	379	0.86	
	合計	329.43	382		
4. (音声以外の)言語形式の指	グループ間	1.64	3	0.55	0.70
	グループ内	295.62	379	0.78	
	合計	297.26	382		
5. 言語使用を行う上で必要な活動	グループ間	2.59	3	0.86	1.14
	グループ内	287.79	379	0.76	
	合計	290.39	382		

6. 正しい言語形式の指導	グループ間	1.32	3	0.44	0.59
	グループ内	282.99	379	0.75	
	合計	284.31	382		
7. 内容に留意した聴き取り	グループ間	8.08	3	2.69	3.80 **
	グループ内	268.53	379	0.71	
	合計	276.61	382		
8. 付加的指導事項	グループ間	0.38	3	0.13	0.21
	グループ内	223.86	379	0.59	
	合計	224.24	382		

注:\*  $p<.05$ . \*\*  $p<.01$ . 有意確率 (両側検定)

## 7.2. 高校教員

### 7.2.1. 教え方と年齢

年齢と教え方の関係については、「英語学習態度の育成」(因子4)について、差が見られた。表 7.6 の示すとおり、英語学習態度の育成をおこなっているのは、40代、50代の教員が、特に20代の教員と比べて多いという結果であった ( $F(3, 381) = 2.92; p < .05$ )。また、単純な平均値を見ると、全66項目中43項目で、40代の教員の値が一番高く、38項目で、20代の教員が最も低い値を示していることは注目に値しよう。(中間報告参照)

表 7.5

#### 教え方と年齢(高校教員)

因子		平方和	自由度	平均平方	F 値
1. 内容把握を踏まえた上での表現活動	グループ間	4.70	3	1.57	1.67
	グループ内	356.15	381	0.93	
	合計	360.85	384		
2. 実践的なオーラル活動	グループ間	3.93	3	1.31	1.49
	グループ内	335.08	381	0.88	
	合計	339.01	384		
3. 読解重視の活動	グループ間	1.55	3	0.52	0.61
	グループ内	323.95	381	0.85	
	合計	325.50	384		
4. 英語学習態度の育成	グループ間	7.30	3	2.43	2.92 *
	グループ内	317.69	381	0.83	
	合計	324.99	384		
5. 英語の言語形式的側面の学習	グループ間	2.24	3	0.75	0.94
	グループ内	303.75	381	0.80	
	合計	305.99	384		
6. 基本的学習項目の復習	グループ間	0.50	3	0.17	0.22
	グループ内	284.54	381	0.75	
	合計	285.04	384		

7. 高い完成度を狙ったライティング指導	グループ間	5.52	3	1.84	2.28
	グループ内	307.20	381	0.81	
	合計	312.71	384		

注:\*  $p<.05$ . \*\*  $p<.01$ . 有意確率 (両側検定)

表 7.6

英語学習態度の育成(因子4)に関する年齢のグループ間比較

年齢	20代	30代	40代	50代
Mean	-0.077	-0.054	0.1069	-0.027
20代	-	ns	*	*
30代	-	-	ns	ns
40代	-	-	-	ns
50代	-	-	-	-

注:Scheffe 検定による多重比較。\*  $p<.05$ . \*\*  $p<.01$ . ns = 有意差なし

### 7.2.2. 教え方と教員歴

教員歴については「実践的なオーラル活動」(因子2)および「英語学習態度の育成」(因子4)に差が見られることがわかった。また、表 29 が示すとおり、教員歴の長い教員(16年以上)の方が、教員歴の短い教員よりも、学習態度の育成に力を入れているという結果であった ( $F(4, 381) = 2.91; p < .05$ )。総体的には実践的なオーラル活動でも、有意な値が出ている(やはり16年から20年の教員が最も高い)が、グループ間の有意差は出ていない。また、単純な平均値を見ると、全体としては、全66項目中39項目で、教員歴15年から20年のグループの値が一番高く、また、全項目中45項目で、5年以下の教員の値が最も低くなっている。(中間報告参照)

表 7.7

教え方と教員歴(高校教員)

因子		平方和	自由度	平均平方	F 値
1. 内容把握を踏まえた上での表現活動	グループ間	7.44	4	1.86	1.99
	グループ内	356.25	381	0.94	
	合計	363.69	385		
2. 実践的なオーラル活動	グループ間	8.39	4	2.10	2.42 *
	グループ内	330.68	381	0.87	
	合計	339.07	385		
3. 読解重視の活動	グループ間	3.45	4	0.86	1.02
	グループ内	323.37	381	0.85	
	合計	326.82	385		
4. 英語学習態度の育成	グループ間	9.67	4	2.42	2.91 *
	グループ内	316.63	381	0.83	
	合計	326.30	385		

5. 英語の言語形式的側面の学習	グループ間	1.56	4	0.39	0.49
	グループ内	304.61	381	0.80	
	合計	306.17	385		
6. 基本的学習項目の復習	グループ間	4.05	4	1.01	1.37
	グループ内	281.73	381	0.74	
	合計	285.78	385		
7. 高い完成度を目指したライティング指導	グループ間	4.77	4	1.19	1.46
	グループ内	311.06	381	0.82	
	合計	315.83	385		

注:\*  $p < .05$ . 有意確率 (両側検定)

表 7.8

英語学習態度の育成(因子 4)に関する教員歴のグループ間比較

教員歴	～5年	5～10年	11～15年	16～20年	25年～
Mean	-0.37	-0.09	0.08	0.12	0.09
～5年	-	ns	ns	*	*
5～10年	-	-	ns	ns	ns
11～15年	-	-	-	ns	ns
16～20年	-	-	-	-	ns
25年～	-	-	-	-	-

注:Scheffe 検定による多重比較。\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ . ns = 有意差なし

### 7.2.3. 教え方と研修

過去5年以内に何らかの研修を受けている教員は、受けていない教員よりも場面にあった発話活動を行っている傾向がある( $t(379) = 2.54$ ;  $p < .01$ )。これは、受けた研修の内容に、場面にあった発話活動に関するものが含まれており、それを実際に授業の中に取り入れていることを示唆している。

表 7.9

教え方と研修(高校教員)

	t 値	自由度	平均値の差
1. 内容把握を踏まえた上での表現活動	-0.27	379	-0.03
2. 実践的なオーラル活動	2.54 *	379	0.25
3. 読解重視の活動	0.73	379	0.07
4. 英語学習態度の育成	1.32	379	0.13
5. 英語の言語形式的側面の学習	-1.34	374.55	-0.12
6. 基本的学習項目の復習	-1.84	379	-0.16
7. 高い完成度を目指したライティング指導	0.01	379	0.00

注:\*  $p < .05$ . 有意確率 (両側検定)

#### 7.2.4. 教え方と受験意識

受験への意識に関しては、教え方に関する因子すべてについて差がみられた(表 31)。すなわち、7つの全ての活動について、受験意識の高い教員の方が低い教員よりも高い値を示し、頻繁に行っているという回答であった。また、表 32から表 38が示すように、受験意識の高さの度合いによっても、それぞれ大きな差が見られた。

表 7.10

教え方と受験意識(高校教員)

因子		平方和	自由度	平均平方	F 値
1. 内容把握を踏まえた上での表現活動	グループ間	49.50	3	16.50	20.13 **
	グループ内	311.46	380	0.82	
	合計	360.96	383		
2. 実践的なオーラル活動	グループ間	7.40	3	2.47	2.88 *
	グループ内	325.69	380	0.86	
	合計	333.09	383		
3. 読解重視の活動	グループ間	44.27	3	14.76	19.90 **
	グループ内	281.75	380	0.74	
	合計	326.02	383		
4. 英語学習態度の育成	グループ間	15.31	3	5.10	6.26 **
	グループ内	309.56	380	0.81	
	合計	324.87	383		
5. 英語の言語形式的側面の学習	グループ間	21.14	3	7.05	9.42 **
	グループ内	284.24	380	0.75	
	合計	305.39	383		
6. 基本的学習項目の復習	グループ間	45.31	3	15.10	23.88 **
	グループ内	240.35	380	0.63	
	合計	285.67	383		
7. 高い完成度を目指したライティング指導	グループ間	34.50	3	11.50	15.68 **
	グループ内	278.72	380	0.73	
	合計	313.22	383		

注:\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ . 有意確率 (両側検定)

表 7.11

内容把握を踏まえた上での表現活動(因子 1)に関する受験意識のグループ間比較

	高い	比較的高い	比較的低い	低い
Mean	0.59	0.19	-0.01	-0.43
高い	-	ns	**	**
比較的高い	-	-	ns	**
比較的低い	-	-	-	**
低い	-	-	-	-

注:Scheffe 検定による多重比較.\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ . ns = 有意差なし

表 7.12

## 実践的なオーラル活動(因子 2)に関する受験意識のグループ間比較

	高い	比較的高い	比較的低い	低い
Mean	0.12	0.16	0.02	-0.18
高い	-	ns	ns	??
比較的高い	-	-	ns	*
比較的低い	-	-	-	ns
低い	-	-	-	-

注:Scheffe 検定による多重比較。\*  $p<.05$ . \*\*  $p<.01$ . ns = 有意差なし

表 7.13

## 読解重視の活動(因子 3)に関する受験意識のグループ間比較

	高い	比較的高い	比較的低い	低い
Mean	0.55	0.16	0.01	-0.42
高い	-	ns	*	**
比較的高い	-	-	ns	**
比較的低い	-	-	-	*
低い	-	-	-	-

注:Scheffe 検定による多重比較。\*  $p<.05$ . \*\*  $p<.01$ . ns = 有意差なし

表 7.14

## 英語学習態度の育成(因子 4)に関する受験意識のグループ間比較

	高い	比較的高い	比較的低い	低い
Mean	0.41	-0.04	-0.04	-0.17
高い	-	**	**	**
比較的高い	-	-	ns	ns
比較的低い	-	-	-	ns
低い	-	-	-	-

注:Scheffe 検定による多重比較。\*  $p<.05$ . \*\*  $p<.01$ . ns = 有意差なし

表 7.15

## 英語の言語形式的側面の学習(因子 5)に関する受験意識のグループ間比較

	高い	比較的高い	比較的低い	低い
Mean	0.23	0.21	0.06	-0.33
高い	-	*	**	**
比較的高い	-	-	ns	**
比較的低い	-	-	-	**
低い	-	-	-	-

注:Scheffe 検定による多重比較。\*  $p<.05$ . \*\*  $p<.01$ . ns = 有意差なし

表 7.16

## 基本的学習項目の復習(因子 6)に関する受験意識のグループ間比較

	高い	比較的高い	比較的低い	低い
Mean	-0.58	-0.21	0.10	0.37
高い	-	*	**	**
比較的高い	-	-	ns	**
比較的低い	-	-	-	ns
低い	-	-	-	-

注: Scheffe 検定による多重比較。\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ . ns = 有意差なし

表 7.17

## 高い完成度を目指したライティング指導(因子 7)に関する受験意識のグループ間比較

	高い	比較的高い	比較的低い	低い
Mean	0.49	0.15	-0.02	-0.36
高い	-	ns	**	**
比較的高い	-	-	ns	**
比較的低い	-	-	-	*
低い	-	-	-	-

注: Scheffe 検定による多重比較。\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ . ns = 有意差なし

ただし、受験意識の高い学校で教えている教師も、単純な平均値を見ると、「聞くことと話すことの指導」(2.59)、「書くことの指導」(2.72)、「読むことの指導」(3.27)という結果を示していることから分かるように、「オーラルコミュニケーション」に関わる言語活動の指導は、「書くこと」や「読むこと」の指導と比べて実施率が低いことが分かる。特に、「幅広い話題について話し合ったり(問題点や原因などを考え、意見交換する)、討論したり(賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する)させる」(2.09)、「発表や話し合い、討論などの活動に必要な表現やルールを学習し、活用させる」(2.12)、「伝えようとする情報や考えなどを整理し、ジェスチャー、スピードなどを工夫して効果的に発表させる」(2.12)「実際の言語使用場面を反映させた、複数の領域にまたがる総合的な活動を設定して練習を行わせる(たとえば買い物の場面で聞いた話を書きとめ、別の人に音声あるいは文字で伝えたり、新聞で読んだ内容について意見をまとめ、音声あるいは文字で発表するなど。)」(2.09)、というような、ディスカッション、ディベート、スピーチ、統合的活動の実施率が低いことが分かる。(中間報告参照)

## 8. 自由記述

本アンケートでは、回答者に自由に意見を書いてもらう場を提供したが、そのおおよその内容をまとめると次のようになる。( )内は言及のあった回答数を示す。

### 8. 1. 中学自由記述

#### 8. 1. 1 学習指導要領の理念、戦略構想に関して(56)

##### 1. 実践的コミュニケーション能力の育成に賛成する。(9)

2. 日本についての理解や日本語でのコミュニケーション能力が必要。(6)
3. 英語のみでなく英語圏外への視点を持つべき。(4)
4. 文化理解や国際的な視野を広げることが大切。(7)
5. 中学では興味を持たせることを中心に。(5)
6. 全員が英語を使える日本人になる必要性はない。(5)
7. 現在の日本では英語を日常的に使う必要性がない。(5)
8. 明確で具体的な目標設定が必要(9)
9. 小中高大の連携が必要。(6)

自由記述全体を通して、「実践的コミュニケーション能力」の育成という理念について「賛成」と明記しているもの以外でも、これに向けて努力している、しかし実際には実現が難しいという記述が多い。つまり理念としては認めるが、その実現のためには条件整備が追いついていない、もしくは逆行しているという指摘である。

教科の目的として、英語という言語の習得や英語圏の理解にとどまらず、世界へ向けての視野を育てることを重視する記述もある。これは指導要領の「内容の取り扱い」において教材の選択に関して指摘されていることと一致する。また、中学では興味をもち、好きにさせることが中心との指摘もある。

どちらも重要なことではあるが、「国民全体が英語を使えるようにする」という戦略構想と照らし合わせると、言語の習得という視点から捉えると物足りなさが感じられる。「興味・関心」は小学校で、中学からは言語習得を中心に据えられる環境をつくれぬものか。

一方、「全員が英語を使える日本人」になることについては、否定的な意見もある。英語よりも、まずは日本についての理解や日本語でのコミュニケーションが必要であると言う指摘もある。小学校での英語学習の是非でも同じことが論じられるが、どちらが先ということではなく、言語・文化という共通項を持つ英語科と国語科の協力体制を気づくことが重要と考える。

また、英語はあくまでも外国語であって、日常生活でこれを使う必要がない日本の環境の下で、実践的コミュニケーション能力をつけることの動機づけが十分でないという指摘もある。この改善の一つにインターネットの活用が考えられるが、アンケート集計結果(J34)にもあるようにまた十分に活用されていない。

さらに、指導要領の実現のためには、より具体的な目標が必要であるという意見がある。小中高大の連携の必要性も指摘されている。学校の枠を取り払った一貫した目標の設定と、これを評価するための基準を明確化にする事が必要であると思われる。

### 8. 1. 2. 授業中の活動について(45)

1. 「聞く」「話す」の活動が不足している。(29)
2. 「話す」活動よりも「書く」活動が多くなりがち。(11)
3. 「書く」活動があまりできない。(5)

この記述からは、学習指導要領にある「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能の全てを取り入れることの難しさがうかがわれる。特に「話す」「書く」というプロダクティブな活動をどのように取り入れて



いくべきかに苦心している様子が見られる。これは、アンケート項目においても、「話す」「書く」の活動が他の2つの活動に比べて取り入れられていないことと一致する。

「話す」より「書く」活動が中心になるというのは、クラスサイズや授業時間の制限のなかで、一斉に指導できる「書く」活動の特性を生かしていることや、入試に「話す」より「書く」ことが取り入れられていることが原因としてある。また逆に、「書く」活動ができない背景にも、「書く」活動の難しさに加えて、時間の制約の問題があると考えられる。

### 8. 1. 3 指導要領を実現を妨げるもの

#### 1. 週3時間(60)

指導要領で実践的コミュニケーション能力の育成が目標と掲げられる一方で、授業時間が3時間に減少したことについての不満が数多くあげられた。つまり、週3時間で4技能にわたるコミュニケーション活動を徹底的に行い、その能力を身につけることは不可能であるという指摘である。

また、単位数の減少は1教師が教えるクラス数の増加、つまり扱う生徒数の増加を意味し、個々の生徒へのきめ細かい指導が難しくなるという弊害も生んでいる。

現状のまま、この問題の解決を図ろうとする方策として、①3年間の指導計画が非常に重要である。②授業外での学習や英語使用の場面設定が必要である。という指摘があった。しかし②については、英語に限らず家庭学習の習慣のない状況では難しい、授業外で英語を使用する場面を作りにくい環境にあるという記述もあった。

#### 2. 入試(45)

入試の内容が指導要領の目指すものと一致しない。つまり入試は読み書き中心で、話す活動が取り入れていない。また正確さが重視されるという現状があり、授業でもこれにこれを重視し、入試に必要な言語材料を教えることを中心にせざるを得ない。その結果、時間の制約の上からもコミュニケーション活動を十分に取り入れることができないことになる。

また、入試が英語学習の動機付けとして大きな位置を占めている以上、入試に直接関係のないコミュニケーション活動を中心とした英語学習に対する動機づけは低くならざるを得ないという指摘もある。

その一方で、アンケートの結果では、入試に対する意識の高い学校の教員の方が、その指導法においてコミュニケーション活動に力をいれるという指導要領に則した方向を示していることは興味深い。

#### 3. 教科書(32)

中学においては教科書を教員が自分で選べないという現状があり、自分で教材を選ぶという意識が小さいことがわかる。また、前述の通り週3時間で入試に間に合わせるという制約の中では、教科書を終わらせることが優先され、その他の教材を挟む余裕がないこともわかる。

一方、新課程の教科書になってから、コミュニケーション活動が扱いやすくなったという指摘もある。教科書・教材づくり、この選び方の重要性を再認識する必要がある。

#### 4. 教員(27)

教員に関する問題として、指導力の不足、研修の必要性と多忙さがあげられている。つまり、指導要領に則した教授法がわからない、力が伴わない、ゆえに事例や研修を要望するが、その一方で、教科以外に抱える仕事が多く、教材研究が十分にできない、研修にも出られないというジレンマがある。

アンケートの数字では、実際に研修に参加している教員数は参加していない教員数より多いが、限られた時間の中での、効果的な研修のあり方の検討が必要であると考えられる。

#### 5. クラスサイズ(17)

実践的コミュニケーション能力を身につけるための授業を行うためには、少人数クラスが必要という意見である。アンケートでは、「学習形態を工夫しペアワーク・グループワークを取り入れている」(J36)という項目で4段階のうち 3.59 という高い値が出ている。しかし、このような工夫だけでは、30人を越える生徒が実践的コミュニケーション能力を身につけるには至らない。実際に少人数クラスを実施し、これが有効であったという指摘もあり、制度の改善が望まれる。

#### 6. ALT(15)

ネイティブ・スピーカーの活用についてもアンケート項目J35で 3.43 という高い値が出ている。この経験から、ALTは有効であるので常駐を希望するという意見があがっている。一方で、質の高いALTを望む声や、ALTを有効に活用するための教材研究のための時間の保証が望まれている。

#### 7. 生徒の多様性(9)

生徒の能力や意欲の差、将来における英語の必要性の違いが、授業を難しくしている。これは英語に限った問題ではないが、英語がスキルの習得という具体的な目標を持つことを考慮すると、習熟度別授業などの具体的な策を検討する必要がある。

### 8. 1. 4 アンケートに答えて

1. 自分の教授法について振り返ることができた。(48)
2. 指導要領についての理解が深まった。(11)
3. 調査結果が行政に有効に生かされることを望む。(15)

本アンケートが、回答者の授業の進め方についての振り返り、また学習指導要領の内容理解に役立った、との意見が多くあった。自分の授業を振り返って評価することの重要性とともに、指導要領を具体化してその理解を深めることが大切であることが確認された。

一方、8.1.3.のように多くの問題を抱えた現場において、この調査が単なる実態調査にとどまることなく、今後の行政面での改革に生かされることを望むのは、当然のことであると考えられる。

## 8. 2. 高校記述

### 8. 2. 1 指導要領の理念・戦略構想について

1. 指導要領はかなり高度な力を要求している。中学と高校の差が大きい。(8)
2. 学校単位、もしくは個々の生徒のニーズや学力に合わせた目標設定が必要。(27)
3. 英語を通して、異文化理解・国際的視野・物事の見方や考え方を身につけることに重きを置く。(12)
4. 英語への興味を持たせることが中心。(6)
5. 大学入試の影響を受けざるを得ない。(15)
6. 小中高大で一貫したシステム、多様で具体的な指標を望む。(4)
7. 日本社会の中では英語を使えるようになることの必要性がない。(9)
8. 英語以前に、日本語力・コミュニケーション能力が必要。(13)
9. 英語以外の言語や文化圏への配慮が必要。(5)

まず、高等学校の指導要領の内容はかなり高度である、中学との差が大きいという指摘がある。一方、高校になると生徒の学力差や意欲の差が開き、また授業時間数も学校によってかなりの違いがあるため、一様に目標を定めることの不合理さが指摘されている。このため、高等学校においては、学校・学科・個人の差を認めた上で、目標を設定していることがわかる。その中には、「大学入試」という現実のニーズや、「英語の楽しさ」「国際理解等」といった言語習得以外が目標となっている場合もかなりある。

小中高大を通した具体的な指標を望むという指摘は中学校でも見られている。中学校の目標をマスターしないで高校に入学する者が多い、中学校での文法の軽視が高校の授業に影響を与えている、個々の生徒により英語の必要性は異なるという回答もあり、中高という区分でなく、小中高大を通しての英語教育の指標を示すことにより、各学校における適切で具体的な目標設定に役立てることができる。と考える。

また、戦略構想に関連しては、やはり中学と同様に、日本社会において英語を使えることが必要ない現状があげられ、全員が英語を使える日本人になることについての必然性や動機付けの不足が指摘されている。また、英語への偏重に異を唱えているものもある。

### 8. 2. 2 授業中の活動について

1. 読む・書くが中心になっている。(8)
2. まとめる・発表する活動が少ない。(12)
3. 書く活動は難しい。(3)
4. 話す活動が少ない。(3)
5. 科目により活動内容が大きく異なる。(6)
6. オーラルコミュニケーションやチームティーチングでは4技能を統合しやすい。(6)

授業中の活動については、読む・書く活動が多くコミュニケーション活動をしていないという回答と、まとめたり発表したりするという統合的な活動が少ないことに気づいたという回答が多くあった。

また、書いたり話したりするという発信型の授業が、クラスサイズや生徒の学力の問題から難しいという意見もあった。

一方、高校の場合、科目によって授業内容が大きく異なるという指摘があり、その中で注目すべきものとして、オーラルコミュニケーションの科目やチーム・ティーチングでは、コミュニケーション活動ができて4技能が統合しやすいという指摘がかなりあったことである。

### 8. 2. 3 指導要領を実現を妨げるもの

1. 大学入試と指導要領の不一致(26)
2. 英語以前の学力低下・学習意欲の低下(10)
3. クラスサイズ(21)
4. 授業時間数・単位数の不足(14)
5. 教員の指導力・多忙さ(12)
6. ALT・教育機器の不足(7)
7. 実践例の不足(5)

指導要領にある、実践的コミュニケーション能力の育成を目指す上での障害として、大学入試と指導要領の不一致がまずあげられている。逆に言えば、大学入試以外にコミュニケーション能力を必要とする短期的目標が存在しないことも指摘されている。その一方で、「進学をめざす学力のある生徒だからだからこそできる活動もあるはず」「入試のための英語力も、実際に使う活動をしないで身につかない」という指摘もあった。アンケート結果で、受験を意識している学校の教員の方が、コミュニケーション活動に配慮している傾向と一致する回答である。

一方では、高校生の学力低下、学習意欲の低下があげられている。このような状況の下、「英語学科や英語部などでの指導は効果的である」という指摘や、「全員に」という考えを捨て「意欲のある生徒に絞って、集中的な指導を行う」ことを提案する回答があった。しかし、「学力が低いからといって目標を低く設定しすぎているかもしれない」と反省する声もかなりある。学力や意欲が低い場合の目標の設定の仕方やその指導法についての指針が必要であると考える。

また、中学校と同様に、教育環境が問題になっている。クラスサイズ、そして授業時間の不足、これに加えて ALT や教育機器の不足もあげられている。実践的コミュニケーション能力を身につけるためにはそれなりの教育環境の整備が必要という指摘である。中学校に比べて数的に指摘が少ないのは、高校の方が、学校の事情に応じて臨機応変に対応する自由度があり、また実際に学校差が大きく、抱える問題が多様であることを反映している。

また、教員の問題として多忙さがあがっている。新しい指導が求められるならば、それに応じた教員の指導力の育成が必要であるが、多忙さ故に、教材研究や研修に時間がかけられないという実情である。ぜひ良い実践例を提示してほしいという要望も見られる。

### 8. 2. 4 アンケートに答えて

1. 自分の教授法について振り返ることができた。(74)
2. 指導要領についての理解が深まった。(4)
3. 調査結果が行政に有効に活かされることを望む。(11)

これについては、中学校と同様の回答があったが、特に授業の振り返りとしての意義が大きかったことがわかる。

### 8.3. まとめ

変化の激しい英語教育の世界で、全体的に真剣に英語教育に取り組んでいる教師の姿が見られる。ここでは、まとめとして、指導要領にある実践的コミュニケーション能力の育成を目指すために、以下の4点を提案する。

1. 動機づけとして、この能力が正当に評価されるシステムを構築する必要がある。具体的には、入試の内容の改革や資格試験の活用、英語を使用する環境の整備が必要である。
2. 教育環境の整備が必要である。具体的には、授業時間の増加、少人数クラス、指導要領に則した教材の提供、教材研究のための時間の確保、ALT 精度や教育機器の充実などがある。
3. 指導法の研究と普及が必要である。具体的には、様々な生徒の実態に応じた実践例の提示、教員の研修内容の充実と保障がある。
4. 目指すべき具体的な指標が必要である。つまり、中学校・高等学校と独立している指導要領を越えて、小中校大そしてそれ以降も含めた、日本という環境の下での英語教育の段階的目標を具体的に示す必要がある。

この他に、日本における英語教育の推進にあたり、次の3点への注意を促したい。

1. 学習者のニーズの多様性を考慮し、これに対応する必要がある。
2. 英語教育に限らず教育全般に置いて、知識偏重から脱し、思考や発表を重視する姿勢を推進する必要がある。
3. 英語や英語圏を偏重せず、アジアやその他の国や言語も視野に入れる必要がある。

自由記述の結果は、学習指導要領を実行に移すに当たって、現場の教師が直面している、また感じている問題点を指摘したものである。学習指導要領が求められている英語能力の指標であるならば、その完全実施のために、これらの意見も参考にする必要がある。

## 9. 英語 can-do アンケート調査分析報告書から

本章では、調査本体の結果を補うために行われた、生徒が英語で何ができるかを見るための、英語 can-do 調査について、吉田・長沼(2003)を基に報告する。

この調査では、ベネッセ・コーポレーションの英語コミュニケーション・テストを2002年12月前後に受験した学校(2002年11月後半～2003年1月前半)の高校の1、2年生を中心に、全54学年、32校の9,309名を対象として英語 can-do アンケートを行った。また、同時に168名の英語教員にも上記の第1研究グループで実施されたのと同じ意識調査を行った。

### 9.1. 生徒の can-do 調査の結果から

英語 can-do アンケートの調査項目は、大きく国内での活動と国外での活動とに分かれていたため、それぞれの項目群において、ML法 Promax 回転による因子分析を実施した。その結果、国内活動は、英語でのディスカッションやディベートなど「オーラル授業活動」の因子、電子メールや電

話など「授業外活動」の因子、教科書の読解や音読など「教科書的活動」の因子の3因子から、国外活動は、英語圏での学校の授業や日本文化の紹介など「学校内活動」の因子、買い物やホテルでのやりとりなど「学校外活動」の因子の2因子から構成された。因子得点間の相関は以下の通りである(表 9.1.1)。国内の授業外活動の因子と国外活動の2つの因子の相関が高いことから因子構成の妥当性が伺える。(因子抽出と命名は付録3参照)

表 9.1.1.

*can-do* 項目因子得点間相関

		国内 1	国内 2	国内 3	国外 1	国外 2
国内 1	オーラル授業活動	-				
国内 2	授業外活動	0.65	-			
国内 3	教科書的活動	0.75	0.59	-		
国外 1	学校内活動	0.40	0.59	0.35	-	
国外 2	学校外活動	0.45	0.63	0.41	0.62	-

次に英語コミュニケーション能力テストとの相関を見てみると(表 9.1.2)、技能間(Reading(R スコア)・Listening(L スコア)・Writing (W スコア))にあまりばらつきはなく、ほぼトータルスコア(T スコア)と同様の傾向を示したが、全体的に国内活動の因子との相関が高く、中でも、教科書的活動との相関が高いことが分かった。

技能間を比較してみると、国内の授業外活動や国外活動とLスコアの相関が高めであり、逆にRスコアと教科書的活動の相関が高いことが分かった。しかし、もっとも相関が高いのは総じてTスコアとの間であり、自己の能力評価を、総合的な能力として最も予測している結果となっている。

表 9.1.2

英語コミュニケーションテストスコアと *can-do* 項目因子得点間相関

		T スコア	R スコア	L スコア	W スコア
国内 1	オーラル授業活動	0.43	0.38	0.39	0.37
国内 2	授業外活動	0.36	0.30	0.37	0.31
国内 3	教科書的活動	0.58	0.53	0.51	0.49
国外 1	学校内活動	0.25	0.22	0.27	0.17
国外 2	学校外活動	0.26	0.23	0.27	0.21

次に、大学受験の模擬試験である進研模試の偏差値との関連を見たが、授業外活動の因子との相関が低くでていることが分かった。また、国外活動の2つの因子との相関が無相関となっていることから、英語コミュニケーション・テストのようなコミュニケーション能力テストとは性格を異にしたテストであることが伺える。つまり、単なる受験のための勉強では、コミュニケーション能力の育成に限界があることが示唆されると言えるだろう。

表 9.1.3

進研模試偏差値と can-do 項目因子得点間相関

		模試
国内 1	オーラル授業活動	0.42
国内 2	授業外活動	0.24
国内 3	教科書的活動	0.52
国外 1	学校内活動	-0.06
国外 2	学校外活動	-0.06

**9.2 英語教育に対する教師の考え方と教え方**

次に、このような学習者の能力と実際に教えている教師の実践活動や信念との関係を見た。教員に行われた意識調査(本調査と同一アンケート)は、教育理念に関する数項目を除いては、全て学習指導要領に示されている項目に基づいており、現代日本の英語教育の「目標」を描いたものだと言える。

このアンケートの項目は、教育理念・目的、コミュニケーション活動、ライティング活動、リーディング活動、教授方法・内容といった5つのカテゴリーに分かれていたため、それぞれのカテゴリーにおいて、ML法 Promax 回転という手法を使って因子分析を実施し、主な因子を抽出した(この研究の因子の取り方及び因子名は、第1研究グループの方法とは多少違うが、結果としては、内容的にはさほど大きな違いはない)。

教育理念や目的に関しては、中学や高校卒業時に求められる英語力の育成を目的とする「学校教育」因子、国際意識を高め、そこで求められる実践的能力の育成を目的とする「国際社会」因子、英語を好きだという気持ちやコミュニケーションへの積極的な態度を高めることを目的とする「意欲・態度」因子、海外旅行や留学などで求められる実践的なコミュニケーション能力の育成を目的とする「実践的能力」因子の4因子に分かれた。

聞いたり、話したり、といったコミュニケーション活動に関しては、伝えたい内容や自分の考えをまとめさせたり、議論や討論をさせるといったことを重視する「思考力」因子、オーラルにおける基本的な伝達能力に焦点をあてた「伝達能力」因子の2因子に分かれた。

ライティング活動に関しては、読んだ内容や書きたい内容を整理して、構成や展開を考えさせることを重視する「構成・展開」因子、聞いたことをまとめたり、話す準備として書かせたりするようなことを重視する「オーラル関連」因子と、書き直しなどを含めたライティングのプロセスを重視する「プロセス」因子の3因子に分かれた。

リーディング活動に関しては、読んだ内容をまとめさせることを重視する「サマリー」因子、未知語の類推や背景知識の活用、パラグラフ構成の理解などを重視した「スキーマ」因子、文法や語句解説や和訳などを通じた詳細理解を重視した「文法訳読」因子の3因子に分かれた。

教授方法や教授内容に関しては、視野を広げ、国際理解を深めることを目指した「国際理解」因子、ネイティブスピーカーとの対話や視聴覚教材などを通して生の英語に触れさせることを目指した「生の英語」因子、中学校時に習得した基礎的な知識や技能の応用を目指した「ベーシック英語」因子の3因子に分かれた。表 9.2.1 にそれぞれの因子得点間の相関を示す。

表9.2.1 教師意識・態度因子得点間相関

		GOAL1	GOAL2	GOAL3	GOAL4	COM1	COM2
GOAL1	学校教育	-	-	-	-	-	-
GOAL2	国際社会	.454	-	-	-	-	-
GOAL3	意欲・態度	.240	.447	-	-	-	-
GOAL4	実践的能力	.370	.602	.492	-	-	-
COM1	思考力	.116	.221	.131	.154	-	-
COM2	伝達能力	.103	.288	.253	.224	.723	-
WRITE1	構成・展開	.198	.363	.191	.162	.658	.593
WRITE2	オーラル関連	.119	.255	.186	.170	.719	.647
WRITE3	プロセス	.026	.184	.071	.021	.409	.354
READ1	サマリー	.093	.251	.139	.118	.591	.564
READ2	スキーマ	.176	.276	.276	.157	.405	.514
READ3	文法訳読	-.007	.038	.072	.118	-.038	-.004
TEACH1	国際理解	-.022	.287	.183	.169	.258	.309
TEACH2	生の英語	.045	.218	.183	.017	.591	.599
TEACH3	ベーシック英語	-.032	.102	-.008	.133	.224	.338

(GOALは理念や目的を、COMは聞いたり話したりというコミュニケーションを指す)

表 9.2.1 教師意識・態度因子得点間相関 (続き)

	WRITE1	WRITE2	WRITE3	READ1	READ2	READ3	TEACH1	TEACH2	TEACH3
WRITE1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
WRITE2	.672	-	-	-	-	-	-	-	-
WRITE3	.616	.478	-	-	-	-	-	-	-
READ1	.622	.596	.439	-	-	-	-	-	-
READ2	.495	.378	.322	.640	-	-	-	-	-
TEACH1	.436	.289	.296	.384	.349	.193	-	-	-
TEACH2	.448	.426	.236	.452	.458	-.019	.375	-	-
TEACH3	.239	.209	.328	.285	.272	.056	.328	.203	-

(WRITE や READ はそれぞれの技能活動を、TEACH は、教授方法や教授内容を指す)

表 9.2.1 から気がつくのは、目標や理念の因子と各技能における実際の教授活動に関する因子との間に高い相関が見られないことである(GOAL1から4の縦の列の相関係数を参照)。このことは、目標や理念と実践活動が乖離していることを示唆しているものと思われる。それとは逆に、教えている内容や方法に関する因子と各技能における実際の活動に関する因子との間には高い相関が見られた。

具体的に、例えば、ネイティブスピーカーとの対話や視聴覚教材などを通して「生の英語」に触れさせることを目指した因子と、より基本的で、中学校時に習得した基礎的な知識や技能の応用を目指した「ベーシック英語」因子の活用という点から分かることは、生の英語(TEACH2 の横列の



相関係数を参照。ここでは、ライティングのプロセスを重視した因子と文法訳読因子を除いて、ほぼ全ての教授項目において 0.40 以上の相関が見られる)と学習指導要領に記されている教え方との間に比較的高い相関が見られたのに対して、ベーシック英語との間にはそのような相関はほとんど見られなかった(TEACH3 の横列の相関係数を参照。この因子は、教授項目のほとんどの因子で、0.3 以下の低い相関しか見られない)。また、視野を広げ、国際理解を深めることを目指した「国際理解」因子の場合も、読んだ内容や書きたい内容を整理して、構成や展開を考えさせることを重視する「構成・展開」因子との相関を除いては、さほど高い相関は見られなかった(TEACH1 の横列の相関係数を参照。「構成・展開」因子を除いて、0.40 を越える相関は見られない)。

このことから言えることは、国際理解を高めるといった抽象的な態度や、基礎基本を重視したベーシックな英語よりも、生の英語に触れさせることを重視する態度がより学習指導要領に記されている英語教育の実践活動に結びついているということだろう。

この他、特に高い相関を示したのは、コミュニケーション活動に関する2つの因子(COM1 と COM2)であり、思考力と伝達能力の双方を同様に重視していることが分かる。中でも、リーディングの活動の、文法訳読(READ3)は、どの因子との相関も低く、コミュニケーション活動に関する2因子とは、相関が全くないことを示している点は興味深い(READ 3 の横列の相関係数参照。特に、COM1とCOM2との相関は、ほぼゼロであることが分かる)。

また、書き直しなどを含めたライティングのプロセスを重視する「プロセス」因子も、他の教え方に関する因子と比べると、伝えたい内容や自分の考えをまとめさせたり、議論や討論をさせるといったことを重視する「思考力」因子(COM1)と読んだ内容をまとめさせることを重視する「サマリー」因子(READ1)とは 0.40 以上の相関を示しているが、その他の因子との相関は比較的低いことが分かる。本来、プロセスとしてのライティングは、認知的負担を必要とする活動なので、それが、サマリーを作ったり、議論や討論をする指導と結びついている点は、理解できる。その反面、プロセスを重視したライティングが文法訳読と相関がほとんどない点も注目に値する( $r=0.132$ )。

### 9.3 教師の教え方と生徒の can-do に見られる意識

では、このような教師の授業に対する意識や態度と学習者の能力との関係はどうであろうか。教師と学習者の双方のデータが存在する学校での、教師と学習者のそれぞれの因子得点の平均をデータとして、相関分析を行った。データのスクリーニングにあたっては、学習者の側の回答者数が 50 人以下の学校は分析の対象から外し、結果として、20 校のデータが分析に用いられた。因子得点間相関とその検定結果を表 11 に示す。

表 9.3.1 教師意識・態度因子得点と学習者 can-do 因子得点との相関

		国内 1 オーラル	国内 2 授業外	国内 3 教科書	国外 1 学校内	国外 2 学校外
GOAL1	学校教育	.138	.353	.220	.494 <sup>*</sup>	.330
GOAL2	国際社会	.239	.426 <sup>+</sup>	.448 <sup>*</sup>	.274	.152
GOAL3	意欲・態度	-.163	.278	-.076	.244	.001

GOAL4	実践的能力	-.174	.318	-.073	.449 <sup>*</sup>	.038
COM1	思考力	.484 <sup>*</sup>	.515 <sup>*</sup>	.267	.283	.294
COM2	伝達能力	.424 <sup>+</sup>	.418 <sup>+</sup>	.161	.379 <sup>+</sup>	.211
WRITE1	構成・展開	.510 <sup>*</sup>	.697 <sup>*</sup>	.337	.416 <sup>+</sup>	.376
WRITE2	オーラル関連	.311	.374	.191	.352	.364
WRITE3	プロセス	.389 <sup>+</sup>	.485 <sup>*</sup>	.291	.347	.347
READ1	サマリー	.358	.495 <sup>*</sup>	.301	.399 <sup>+</sup>	.359
READ2	スキーマ	.240	.443 <sup>+</sup>	.054	.292	.242
READ3	文法訳読	-.406 <sup>+</sup>	-.254	-.227	.044	-.120
TEACH1	国際理解	.258	.398 <sup>+</sup>	.219	.263	.118
TEACH2	生の英語	.636 <sup>*</sup>	.324	.354	-.081	.288
TEACH3	ベーシック英語	.045	.314	-.099	.438 <sup>+</sup>	.027

\* p < .05

+ p < .10

目標や理念との関係においては、国際社会における英語力を目的としている教師の多い学校において、教科書的活動における英語運用能力が高いことが分かる( $r=0.448$ )。また、有意な傾向を示すにとどまった(有意水準( $p<.10$ ))ものの、授業外活動とも比較的高い相関を示しており( $r=0.426$ )、日常的な場面での英語運用能力も育成されている可能性が高いことも伺える。国外の活動では、英語圏での学校の授業についていけるかどうか、あるいは、英語で日本文化の紹介ができるかどうかなどの「学校内活動」(国外1)における英語運用能力と、学校教育を通して卒業時に求められる英語力(GOAL1)や旅行や留学などで求められる実践的英語力の育成(GOAL2)との相関が比較的高かった。ただし、GOAL1 および GOAL2 が、授業外活動や学校外での活動とは結びついていないところを見ると、学校教育を通して卒業時に求められる英語力も旅行や留学などで求められる実践的英語力の育成も、基本的なコミュニケーション能力を目的とはしながらも、学校という枠組みに収まった能力の育成のみにとどまっている可能性が示唆される。また、意欲や態度の高揚を目的とした場合、それだけでは実際の英語運用能力には結びつかず、表10の因子間相関からは、国際社会や実践的能力を通した、間接的な影響にとどまっていることも考察される。

その一方で、コミュニケーション活動の実践では、思考力を重視した授業態度(COM1)が、オ

ーラル授業活動( $r=0.484$ )や授業外活動における英語力( $r=0.515$ )と結びついていることが分かる。有意な傾向にとどまっているものの、伝達能力に関する授業(COM2)とも結びついており、双方のバランスが重要であることが伺える。ライティングやリーディング活動ではどうかというと、展開や構成に焦点をあてたパラグラフライティング(WRITE1)や、書き直しなどをさせるプロセスライティング(WRITE3)、概要を把握するサマリーリーディング(READ1)などと、授業外活動における英語力との関連が深いことが分かった。また、読解におけるスキーマの利用(READ2)も、有意な傾向にはとどまっているものの関連しているようである。パラグラフライティングやプロセスライティングはオーラルの授業における英語力とも相関が高かったが、上記のような活動を重視する教師の多い学校においては、授業外活動やオーラルの活動などを重視した授業も行っているということを示しているのだろう。文法訳読(READ3)が、オーラル活動における英語力と負の有意傾向をしめしていることも注目に値する。つまり、文法訳読は他の活動とは相関を示していないことを考えると、直接コミュニケーション活動とは結びつかない異なった内容の活動であることが確認された。

教授方法や教授内容の点からは、国際理解を重視する態度(TEACH1)が授業外の活動での英語力に、生の英語(TEACH2)がオーラル活動に、ベーシック英語(TEACH3)が国外の学校内の活動に影響していることが分かる。これらは目標や理念における国際社会や学校教育の影響と同様の傾向を示しており、一貫した結果となっている。生の英語は表 9.2.1 で見たように、各技能における実践活動とも比較的高い相関を示しており、それがそのまま反映した結果となっている。

表9.3.2 教師意識・態度因子得点と英語能力スコアとの相関

		T スコア	R スコア	L スコア	W スコア
GOAL1	学校教育	.165	.144	.201	-.293
GOAL2	国際社会	.373	.392 <sup>+</sup>	.455 <sup>*</sup>	-.190
GOAL3	意欲・態度	-.215	-.189	-.119	-.021
GOAL4	実践的能力	-.090	-.073	-.008	-.013
COMMU1	思考力	.181	.102	.223	-.271
COMMU2	伝達能力	.000	-.021	.103	.005
WRITE1	構成・展開	.227	.201	.316	-.250
WRITE2	オーラル関連	.035	.003	.090	-.069
WRITE3	プロセス	.146	.043	.197	-.075
READ1	サマリー	.178	.106	.260	-.184
READ2	スキーマ	-.044	-.088	.078	-.063
READ3	文法訳読	-.228	-.193	-.197	.032
TEACH1	国際理解	.235	.250	.313	-.271
TEACH2	生の英語	.297	.261	.352	-.267
TEACH3	ベーシック英語	-.195	-.174	-.134	.095

\*  $p < .05$

+  $p < .10$

#### 9.4 まとめ

教師の意識や態度と can-do 得点との学校単位でのクロス調査においては、多くの有意な相関が見られた。can-do 項目は、学習者の英語活動に対する「自信」を反映していると考えられるが、学習者が教室におけるオーラル活動や教室外における英語活動で「できる」と感じていることが、教師や学校の英語教育に対する姿勢とかなりの程度の相関関係があることが分かった。また、国外においては、その自信は、国外の学校で必要とされる英語活動とも関係があることが分かった。しかし、その反面、教科書を中心とした活動と、教師の教え方の間には、国際社会における英語の役割、という理念以外に、実際の教育活動自体との相関は見られなかった。また、国外における学校外の社会的場面での英語活動は教師の理念、教え方のどちらとも相関を示さなかった。

この他にも、今回の研究で明らかになったことに次のような点がある。

## 10. 本報告書のまとめ

以下に、上述の結果をまとめる。

- ① 教員は指導要領の示す英語力の指標を次のような要素からなるとらえている。

### 中学校教員

英語学力に関する理念的側面

知識としての英語

学習者全員が到達しなければならない英語の基礎的レベル(挨拶、簡単な話題について読み書き話す、など)

個人レベルで交流ができるくらいのレベル

国際的に通用する英語伝達能力

目標を達成するための指導法

実践的コミュニケーション活動

相互の意向を考慮した文字言語による活動

教材選定

音声以外の言語形式

正しい言語形式

実際の言語使用場面を設定した活動

内容に留意した聞き取り

付加的指導事項(発音記号、筆記体など)

### 高校教員

英語学力に関する理念的側面

学習者全員の英語到達レベル(中学卒業時までには挨拶、簡単な話題について読み書き話すことができていること、など)

国際的に通用する伝達能力

積極的態度

社会的場面で必要な英語力

読み書きに関する英語能力

目標を達成するための指導法

内容把握を踏まえた上での表現活動

実践的なオーラル活動

読解重視の活動

英語学習態度の育成

英語の言語形式的側面の学習

基本的学習項目の指導

高い完成度を目指したライティング指導

② 学習指導要領の示す英語力の指標の理念的側面と、実際の指導の間の関連は弱い。

理念としての到達目標を理解しながらも、実際の教育活動に移すにあたって、様々な理由でその実施が難しい状況にあるということを示しているものと思われる。授業時間数が少ない、教えなければならない内容が多い、実際に授業で扱うことができる範囲が狭められている、などさまざまな理由が自由記述欄に寄せられていた。しかし、わずかながら、「国際的に通用する英語伝達能力」、「個人レベルでの国際交流」などのために英語を教えるべきだという目標を持っている教師は、教室でも実際に英語を使用出来るぐらいの場面を設定し、同時に、また、正しい言語形式をも重視して指導していると回答している。

③ 年齢、教員経験の両方において、どちらかという若い教員よりも中堅以降の教員の方が学習指導要領に沿った授業を行っている。

中学校・高等学校ともに、教員としての経験を積み、教員研修への参加の機会が多くなり、英語を教えることに対する余裕が出来てくると、よりよい授業を考え、実行に移すことができるようになるだろう。逆に、若い教員、教職経験の浅い教員の場合、経験不足からか、どちらかという、保守的になりがちだという結果が見られた。大学における教職課程の内容を含め、初任者研修等の研修プログラムの内容の更なる充実が求められるだろう。

④ 中学校教員の場合、教員研修は特に理念的側面に大きな影響を与えている。

何らかの形で研修を受けた教員は、指導要領の示した到達目標、特に、国際的に通用する英語力の必要性、個人レベルでの交流の重要性を認識し、更に、「実践的コミュニケーション活動」をより頻繁に行っているとの回答が多いという結果であった。しかし、どのような内容・形態の研修がどのような効果を上げているのかについては別の調査が必要である。

⑤ 中学校教員の場合、受験に対する意識の高さによって理念的側面や指導に影響を与えていない。

ただし、受験に対する意識の高い学校に勤務する教員は、「英語を使うのは海外でのみである」、「英語を知識として身に付けることが重要である」などと考えている傾向があることがわかった。一方、内容の聞き取りに重点を置いて教えているという回答も、やはり受験意識の高い教員に多かった。このことから、たとえば入試にリスニング・テストを含めるなどにより、それが英語力の到達内容などの指針となり、その結果、ある程度教育改善に効果があるということがいえるかもしれない。

⑥ 高校教員の場合、教員研修と受験に対する意識は、理念的側面及び指導に大きな影響を与えている。

何らかの研修を受けたことのある教員は、学習指導要領でうたわれている実践的なオーラル活動を到達目標とする意識が高く、また教育活動にもそれを活かそうとしている傾向が見られた。受験に対する意識の高い高校に勤務する教員は、学習指導要領の示す英語力養成に向けた指導を

より頻繁に行っている傾向があった。ただし、受験意識の高い学校の教員でも、文字言語指導と比べて音声言語指導の実施率は低い結果を示した。

### 9.3 Can-do 調査

最も大切な点は、教師が授業で行う教育活動と生徒が英語を使ってできることとの間に関連があるということである。更に、生徒の英語力に関する結果と教師の理念と教え方の結果の主なものを以下に列挙してみた。

生徒の英語力に関する結果の主なものを以下に列挙した。

- ① 学習指導要領に記されている英語教育の実践活動を促すには、国際理解を高めるといった抽象的な態度や基本を重視した指導よりも、生の英語に触れさせることを重視する指導の方が効果がある。
- ② 学習者が教室内でのオーラル活動や教室外での英語活動で、自信をもってできると感じるためには、教師や学校の英語教育に対する態度と関係がある。
- ③ 生徒が授業内でおこなっている活動は、授業外の活動にも関連する。
- ④ 授業の中でコミュニケーション活動をさせることにより、授業外で使える能力となる。あるいは、少なくとも積極的に取り組む姿勢が生まれると考えられる。
- ⑤ 授業外の英語活動は、授業での音読や辞書の積極的な利用とも相関を示している。
- ⑥ 国内における授業外英語活動を良く行っている生徒ほど、外国でも授業にもついていくことができる。
- ⑦ 国内における授業外英語活動を良く行っている生徒は、海外で買い物、乗り物、ホテル、街に見られる案内や掲示などを見て困らない。
- ⑧ 国内において、生徒が授業外でも英語を実際に使う機会があることが、国外での実際の英語使用にとって大切である。

教師の理念と教え方の結果の主なものを以下に列挙した。

- ① 教師が持っている目標や理念と各技能における実際の教育活動の間には高い相関が見られない。
- ② 国際理解を高めるといった抽象的な態度や、基礎基本を重視したベーシックな英語よりも、生の英語に触れさせることを重視する態度がより学習指導要領に記されている英語教育の実践活動に結びついている。
- ③ 文法訳読は、どの因子との相関も低く、特に、コミュニケーション活動に関する因子とは、相関が全くない。
- ④ 書き直しなどを含めたライティングのプロセスを重視する「プロセス」因子は、伝えたい内容や自分の考えをまとめさせたり、議論や討論をさせるといったことを重視する「思考力」因子と読んだ内容をまとめさせることを重視する「サマリー」因子とは相関を示しているが、その他の因子との相関は比較的低い。

## 10 提言

以下の提言をもって本調査の結びとする。

### ① 学習指導要領の組み換え。

学習指導要領の示す到達目標は、各教員に十分に理解されているとはいえない。より理解しやすくするために、本調査の結果を元に組み替える必要がある。

その際、具体例が指導要領のどの側面の例となっているかが明解であるようにする。一方に指導要領という理想があり、他方に現場の実情がある。理想は理想でなければならぬというのは誠に正論であるが、しかし、実行できない理想は必要ない。本調査は、理想と現状との間の橋渡しが必要であることを示している。公私さまざまな研修が行われ、日々多くの優れた実践も行われている。それらが研究会、学会などで発表されてもいる。それらをすべて指導要領に記載する必要はない。しかし、指導要領のどの側面を実現したものなのかを検証する作業は、指導要領作成者側の責任というべきである。

さらに、中高の指導内容に格差が見られるなどの問題点が指摘されてもおり、一貫教育を考慮した指導要領とすることを考慮する必要もある。

### ② 研修などを通して、教員に指導要領の示す目標を理解する機会を与える。

研修に参加した教員は、指導要領に対する理解が深く、またそれを積極的に授業で生かそうとしている。しかしながら、一方では日々さまざまな仕事に追われている。それは授業だけではない。週末を割いて研修に参加するのも簡単ではない。したがって、今まで以上に多くの教員が多くの機会を得られるようなシステムを作るというのは火急の案件である。

必要とされる教員研修の内容としては、1) 英語を学習する目的、EFLの状況で、英語を教える目的、世界の共通言語としての英語の位置づけの認識、2) コミュニケーションを重視した英語の4技能に関する教授法、4技能をリンクさせた教授法、3) 日本文化に関する知識、4) 授業外活動、5) シラバスの作り方、評価方法 6) 語学教師としての役割、7) 海外の文化への知識・理解、8) 教員自身の英語力の向上、9) 授業研究、10) ALTの活用、などが考えられる。

### ③ 以下の諸点について教員のより深い理解を求める。

- ① 授業外の学習の機会・時間を増やすような授業にする。
- ② 授業内での学習活動は、授業外での言語使用能力に結びつく。
- ③ 実践的コミュニケーション能力には、話すだけではなく読み、書き、聞く能力も含まれる。

①、②。英語を教える授業数の不足に関しては、卒業までの必修単位の減少、週休2日制、他教科との共存、これらの要件から早急に改善するのは難しい。単位制を導入している高校では、生徒のニーズに応じて、多様な英語科目を設置することが可能であり、生徒も自分の進路に合わせて、英語の科目を多く履修することは可能である。しかしながら、多くの中学校、普通科高校では、少ない授業時間の中でできるだけ大きな成果を挙げようと苦心している。したがって、授業だ



けを英語の学習の場であると考えのではなく、授業の外も学習の場であると考え必要がある。例えば、授業外の課題としてジャーナルや、グループでのプロジェクトを与えたり、地域の活動に参加して、その内容を授業で発表したり、電子メールで、海外の生徒とメール交換をしたり、と様々な取り組みが考えられる。そうした授業外での取り組みを生徒が負担と感じずに積極的に取り組めるような方法が必要である。

③ 学習指導要領と入試の関係では、入試では正確さの重視・読み書き中心であり、スピーキングはテスト項目に含まれないため、授業内でのスピーキングの活動に対する生徒の動機づけが付けにくいという意見もあった。しかし、言語習得活動は、4技能が結びついて始めて機能する。スピーキングの活動をおこなえば、リスニングの力は伸びると考えられる。多くの英語を読むことで、書くことのヒントになる。よい英語を読むことが、よい英語を書く手本になる。そうした意味では、学習指導要領に書かれている内容と、受験指導とが極端に離れているとは考えられない。本当の意味での英語の総合力を付ける指導が、受験指導とも平行しておこなわれることが望ましい。

#### 4) 今回の調査の問題点と今後の調査

本調査の目的は、中学・高校段階で求められる英語力に関する指標についての裏付けを行うことであった。戦略構想では、中学・高校の達成目標として、中学校卒業段階で「挨拶や応対等の平易な会話ができる(同程度の読む・書く・聞く)ができる」程度、高等学校卒業段階で、「日常の話題に関する通常の会話(同程度の読む・書く・聞く)ができる」程度を設定している。本調査では、新学習指導要領の目標が、中学高校で教鞭をとる教員からみて、どの程度妥当なのか、実際に指導が可能なのかどうか等を検証した。

固より今回の調査だけでこの目的が十分に達成できたわけではない。解決よりもむしろ問題点が明らかになったというべきかもしれない。それら問題点は本編の随所に指摘したが、今後の調査課題として以下にリストする。

- ① 4技能を統合した指導法の開発と、その効果の検証。
- ② どのような授業内活動が授業外での言語使用につながるのか。
- ③ 高校および大学入学試験問題と学習指導要領の内容との関係。
- ④ 今回のアンケート調査で、「指導している」とされた教育活動が実際にはどのように行われているのか、より詳細に具体的に観察記述する。
- ⑤ 外部テストの妥当性研究。TOEIC、英検、などのテストは学習指導要領の示す到達目標の達成度をどれくらい確かめることができるのか。

本研究グループは、担当課題に最も関係の深い④と⑤を今後の課題とし、さらに調査を行う予定である。

## 付録1

### 今回使用したアンケート

中学校・高等学校英語教員各位

アンケート調査ご協力をお願い

新年、明けましておめでとうございます。

添付のアンケート調査にご協力いただきたく、よろしくお願い申し上げます。

皆さまも既にご存知のことと思いますが、平成14年、文部科学省より「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」が提案されました。これを受け、私ども第1研究グループは、特に、中学、高校における英語教育について具体的なガイドラインを提案することになりました。

その基本資料として、現在中学、高校で教育に携わっておられる先生方が、学習指導要領をどのようにとらえ、実際に活用しておられるか、どのように授業に活かしておられるかを調査することとなりました。あわせて、問題点を指摘していただき、今後のガイドライン作成の資料とさせていただきます。

なお、プライバシー保護のため、結果は本調査の目的以外に使用することはありません。また、各校の成果を評価することが目的ではありませんので、できるだけ率直にお答えください。

ご記入後は、同封の封筒にてご返送ください<sup>1</sup>。お忙しいところまことに恐縮ですが、**2003年2月24日(月)**までにご投函いただければ幸いです。

ご協力に感謝申し上げます。末筆ながら先生方のご健勝をお祈り申し上げます。

平成15年1月

英語教育に関する研究(第一研究グループ)  
代表:上智大学 外国語学部 教授 吉田研作

---

<sup>1</sup> 各教育委員会、あるいは、教科教育研究部会等でまとめてご返送いただける場合は、それぞれの部署でまとめてご返送くださいますよう、よろしくお願いいたします。

また、ウェブ上でご回答いただくことも可能です

(<http://cgi.jrc.sophia.ac.jp/~tfujita/cgi-bin/questionnaire/>)

## アンケートA

1.	回答者年齢(○で囲んでお答えください):	20代 30代 40代 50代 60代																								
2.	英語教員歴(○で囲んでお答えください):	~5年    5~10年    11年~15年 16年~20年    20年以上																								
3.	過去5年間の英語教員研修受講経験(○で囲んでお答えください):	ある    ない																								
4.	3.で「ある」という方は <u>過去5年間</u> に参加した主な研修名と回数:(例えば、文科省、教育委員会、中(高)英研等教科研究会主催のもの、その他、個人として参加したもの)	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 80%; text-align: center;">研修名</th> <th style="width: 20%; text-align: center;">(回数)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td><u>国内:</u></td> <td style="text-align: right;">( )</td> </tr> <tr> <td>_____</td> <td style="text-align: right;">( )</td> </tr> <tr> <td>_____</td> <td style="text-align: right;">( )</td> </tr> <tr> <td>_____</td> <td style="text-align: right;">( )</td> </tr> <tr> <td>_____</td> <td style="text-align: right;">( )</td> </tr> <tr> <td>_____</td> <td style="text-align: right;">( )</td> </tr> <tr> <td><u>海外:</u></td> <td style="text-align: right;">( )</td> </tr> <tr> <td>_____</td> <td style="text-align: right;">( )</td> </tr> <tr> <td>_____</td> <td style="text-align: right;">( )</td> </tr> <tr> <td>_____</td> <td style="text-align: right;">( )</td> </tr> <tr> <td>_____</td> <td style="text-align: right;">( )</td> </tr> </tbody> </table>	研修名	(回数)	<u>国内:</u>	( )	_____	( )	_____	( )	_____	( )	_____	( )	_____	( )	<u>海外:</u>	( )	_____	( )	_____	( )	_____	( )	_____	( )
研修名	(回数)																									
<u>国内:</u>	( )																									
_____	( )																									
_____	( )																									
_____	( )																									
_____	( )																									
_____	( )																									
<u>海外:</u>	( )																									
_____	( )																									
_____	( )																									
_____	( )																									
_____	( )																									
5.	ご勤務先学校名:	_____																								
6.	対象学科(あてはまる場合は○で囲んでお答えください。また、あてはまらない場合は、 <u>その他</u> 、設置されている英語・外国語コースなどをお書き下さい):	普通科    英語科    国際科  その他(_____)																								
7.	所在地(都道府県名):	_____																								
8.	英語担当教員数:	_____人																								
9.	ALT(他、外国人講師)の人数:	<u>ALT</u> 人    (その他 人)																								
10.	生徒数:	_____人																								

11.	クラスの平均生徒数:	_____人						
12.	ご担当経験のある学年(○で囲んでお答えください):	<table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 33%; text-align: center;">中1</td> <td style="width: 33%; text-align: center;">中2</td> <td style="width: 33%; text-align: center;">中3</td> </tr> <tr> <td style="width: 33%; text-align: center;">高1</td> <td style="width: 33%; text-align: center;">高2</td> <td style="width: 33%; text-align: center;">高3</td> </tr> </table>	中1	中2	中3	高1	高2	高3
中1	中2	中3						
高1	高2	高3						
13.	ご担当経験のある授業名:	_____						
		_____						
		_____						
		_____						
14.	上記授業の内、2002年度ご担当のもの:	_____						
		_____						
		_____						
		_____						
15.	学校としての受験勉強に対する意識(○で囲んでお答えください):	<table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 25%; text-align: center;">高い</td> <td style="width: 25%; text-align: center;">比較的高い</td> <td style="width: 25%; text-align: center;">比較的低い</td> <td style="width: 25%; text-align: center;">低い</td> </tr> </table>	高い	比較的高い	比較的低い	低い		
高い	比較的高い	比較的低い	低い					

◆ 中学校教員は、次のアンケートBの中の下記のページにお答えください。

ページ番号: 4-8 および 14

◆ 高等学校教員は、次のアンケートBの中の下記のページにお答えください。

ページ番号: 4-5 および 9-14

## アンケート B

### 英語教育の理念・目的（中学校教員、高等学校教員共通）

以下は英語教育の目的に関する質問です。次の各意見に賛成か反対かを次の5段階から1つ選んで □ に数字でお答えください。

- |   |           |
|---|-----------|
| 1 | 全く賛成できない  |
| 2 | あまり賛成できない |
| 3 | どちらともいえない |
| 4 | ある程度賛成である |
| 5 | 全く賛成である   |

- 1. 実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことをいう。
- 2. 実践的コミュニケーション能力と言った場合、聞き、話す能力だけでなく、読み、書く能力もさす。
- 3. 海外旅行などの海外における社会的場面で英語が話せる観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である。
- 4. 国際社会に生きる日本人として、世界の人々と協調し、積極的に国際交流などを行っていくための資質・能力の基礎を養う観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である。
- 5. 英語を実践的に使うことが出来なければ日本および日本人はこれからの国際社会で取り残されてしまう。
- 6. 英語を実践的に使う能力が必要になるのは、海外に出かけた時だけである。
- 7. これからの国際社会において、日本の立場を明確に表明するために、英語を実践的に活用する能力は必要である。
- 8. 中学校卒業時には、だれでも英語で挨拶をはじめとする簡単な日常会話ができなければならない。
- 9. 中学校卒業時には、だれでも簡単な英語を読んだり書いたりできなければならない。
- 10. 高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で聞いたり話せたりできなければならない。
- 11. 高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で読んだり書いたりできなければならない。

- 12. 日本における英語教育の最終目標は、英語で議論・ディベート・スピーチ・プレゼンテーションなどができることである
- 13. 英語は、実際に使えることよりも、知識として身につけるために指導することが重要である。
- 14. 英語を国際的な場面で実践的に使えるように指導することは重要である。
- 15. 英語を、入試などのテストに合格するために指導することは重要である。
- 16. 生徒が英語を好きになるように指導することは重要である。
- 17. 生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である。
- 18. 英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である。
- 19. 英語を学ぶことにより、生徒が海外旅行やホームステイに困ることなく参加できるような指導をすることは重要である。
- 20. 日本という国が国際的に貢献できることを目的に英語を教えることは重要である。
- 21. 英語を使って英語圏の人とより親密な交流をもつよう指導することは重要である。
- 22. 日本人が学ぶべき英語は、英米のネイティブの英語をモデルとしたものでなければならない。
- 23. 実践的コミュニケーション能力の育成を促進するためには大学入試の変革がまず必要である。
- 24. 英語で実践的にコミュニケーションする力が今以上に向上しない場合、いずれは英語を第 2 公用語にするなどの思い切った手段をとる必要がでてくる。

中学校教員のみ

ご指導の際、下記の項目について、それぞれ、どのくらい重点をおいていらっしゃいますか。それぞれの項目について、次の4段階から1つ選んで □ の中に数字でお答えください。

- |               |
|---------------|
| 1 全く行っていない    |
| 2 ほとんど行っていない  |
| 3 時々行っている     |
| 4 かなり頻繁に行っている |

聞くことの言語活動

- 1. 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取らせる。
- 2. 自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、具体的な内容や大切な部分を聞き取らせる。
- 3. 質問や依頼などを聞いて適切に応じさせる。
- 4. 話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解させる。

話すことの言語活動

- 5. 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音させる。
- 6. 自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話させる。
- 7. 聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ合ったりさせる。
- 8. つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が長くよう話させる。

読むことの言語活動

- 9. 文字や符号を識別し、正しく読ませる。
- 10. 書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読させる。
- 11. 物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読み取らせる。
- 12. 伝言や手紙などから書き手の意向を理解し、適切に応じさせる。

### 書くことの言語活動

- 13. 文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意をして正しく書かせる。
- 14. 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書かせる。
- 15. 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書かせる。
- 16. 伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書かせる。

### ◆ 以下は次の尺度を使用してお答えください

1	全く配慮していない
2	あまり配慮していない
3	配慮している
4	十分配慮している

### 教え方、内容の取扱い方

- 17. あいさつ、自己紹介、道案内など、特有の表現がよく使われる場面を取り上げた言語活動をさせる。
- 18. 家庭生活、学校での学習や活動、地域の行事など生徒の身近な暮らしにかかわる場面を取り上げた言語活動をさせる。
- 19. 自分の意見を言う、発表する、報告するなど、考えを深めたり情報を伝えたりする表現を取り上げた言語活動をさせる。
- 20. 依頼する、約束する、賛成する/反対するなど、相手の行動を促したり自分の意志を示したりする表現を取り上げた言語活動をさせる。
- 21. 礼を言う、ほめる、謝るなど、気持ちを伝える表現を取り上げた言語活動をさせる。
- 22. 言語活動を行う中で「文字及び符号」の指導を行う。
- 23. 言語活動を行う中で「語、連語及び慣用表現」の指導を行う。
- 24. 言語活動を行う中で「文法事項」の指導を行う。



- 25. 実際に英語を使用して互いの気持ちや考えを伝え合うなどのコミュニケーションを図る活動を行わせる。
- 26. コミュニケーションを図る活動においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を生徒自ら考えて言語活動を行わせる。
- 27. 文法事項の取扱いについては、用語や用法の区別などを理解するだけでなく、実際に使わせる。

#### 授業全般について考慮していること

- 28. 生徒の実態や地域の実情に応じて、学年ごとの目標を適切に定め、3学年間を通して英語の目標の実現を図る。
- 29. 学習段階に応じて平易なものから難しいものへと配列する。
- 30. 発音表記が読めるように指導する。
- 31. 筆記体が使えるように指導する。
- 32. 語、連語及び慣用表現の指導に当たっては、運用度の高いものを厳選し、習熟を図る。
- 33. 辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるように指導する。
- 34. 生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用する。
- 35. 生徒の実態や教材の内容に応じてネイティブ・スピーカーなどの協力を得る。
- 36. 学習形態などを工夫し、ペアワーク、グループワークなどを適宜取り入れる。

#### 教材選定に際して考慮していること

- 37. 英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史などに関するものの中から、生徒の心身の発達段階及び興味・関心に即した適切な題材を取り上げる。
- 38. 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つ教材を使う。
- 39. 世界や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つ教材を使う。

高等学校教員のみ

ご指導の際、下記の項目について、それぞれ、どのくらい重点をおいていらっしゃいますか。それぞれの項目について、次の4段階から1つ選んで □ の中に数字でお答えください。なお、特段「日本語で」と記していないものについては英語でのコミュニケーションを意味します。

- |               |
|---------------|
| 1 全く行っていない    |
| 2 ほとんど行っていない  |
| 3 時々行っている     |
| 4 かなり頻繁に行っている |

主に、「聞くこと」と「話すこと」を指導している時

- 1. 英語を聞いて、その情報や話し手の意向(考え、意見、気持ち、感情など)などを理解させる。
- 2. 英語を聞いて、その情報の概要や要点を、サマリーを書くなどして、とらえさせる。
- 3. 英語を聞いて、その情報や話し手の意向について質問したり、感想を言わせる。
- 4. 身近な話題について英語で情報を伝えたり会話をさせる。
- 5. まとまりのある英語を聞いて、必要に応じメモを取るなどしながら、その概要や要点をとらえさせる。
- 6. 自分が考えていることなどについての考えをまとめ、簡単なスピーチ等の発表をさせる。
- 7. 読んだ内容に関して聞き話す活動をさせる。
- 8. 聞き取った内容に対して自分の思いや考えなどを整理して、英語で書いたり話したりさせる。
- 9. 聞き取った内容に対して自分の思いや考えなどを整理して、日本語で書いたり話したりさせる。
- 10. 幅広い話題について話し合ったり(問題点や原因などを考え、意見交換する)、討論したり(賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する)させる。
- 11. 発表や話し合い、討論などの活動に必要な表現やルールを学習し、活用させる。
- 12. リズムやイントネーションなど、英語の音声的な特徴に注意しながら発音を練習させる。
- 13. 伝えようとする情報や考えなどを整理し、ジェスチャー、スピードなどを工夫して効果的に発表させる。

- 14. モデルをもとにするなどして、スキット、ロールプレイなどを創作し、演じさせる。
- 15. 聞いたり読んだりして得た情報をまとめ、発表させる。
- 16. 関心のあることについて相手に質問させたり、相手の質問に答えさせたりする。
- 17. オーラル・コミュニケーション活動に必要となる基本的な文型や文法事項などについて説明し、理解させる。
- 18. オーラル・コミュニケーション活動に必要となる基本的な文型や文法事項などを使った練習をさせる。
- 19. 聞き取った内容に対して簡単な言葉で返答したり、ジェスチャーなどの非言語的手段で答えたりして反応させる。
- 20. 自分や聞き手の置かれた状況を考慮し、伝える目的を考えながら伝えさせる。
- 21. 実際の言語使用場面を反映させた、複数の領域にまたがる総合的な活動を設定して練習を行わせる。  
(たとえば買い物の場面で聞いた話を書きとめ、別の人に音声あるいは文字で伝えたり、新聞で読んだ内容について意見をまとめ、音声あるいは文字で発表するなど。)
- 22. 言語材料の分析や説明は必要最小限にとどめ、実際の場面でどのように使われるかを理解し、実際に使えることに重点を置いた活動をさせる。
- 23. 中学校における指導内容との関連を考慮した上で、音声によるコミュニケーション能力を重視した活動を行わせる。
- 24. 聞くこと及び話すことに加え、読むこと及び書くことを含めた4つの領域の言語活動を総合的、有機的に関連させた練習をさせる。

#### 主に、「書くこと」を教えている時

- 25. 聞いた内容について、概要や要点を書かせる。
- 26. 読んだ内容について、概要や要点を書かせる。
- 27. 聞いた内容について、自分の考えなどを整理して書かせる。
- 28. 読んだ内容について、自分の考えなどを整理して書かせる。
- 29. 聞いたことや話そうとすることと関連づけて書かせる。

- 30.自分が伝えようとする内容を整理して書かせる。
- 31.自分の伝えようとする内容について、整理して、場面や目的に応じて、読み手が理解できるように書かせる。
- 32.話されたり、読まれたりする文を書き取らせる。
- 33.考えや気持ちを伝えるのに必要な語句を教え、活用させる。
- 34.文章の構成や展開に留意しながら書かせる。
- 35. 文法や語法について正しく書くことに留意して書かせる。
- 36.場面やことばの働きを設定して書かせる。(たとえば学級通信用の修学旅行の記事、求人広告を読んで不明な点を問い合わせる手紙、自己紹介を含む履歴書など)
- 37.より豊かな内容で書けるように、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導をする。
- 38.より適切な構成や言語形式で書けるように、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導を

#### 主に、「読むこと」を教えている時

- 39. 読んだ内容について、必要な特定情報を読み取らせる。
- 40. まとまりのある英語を読んで、その内容について、概要や要点を英語でまとめさせる。
- 41. まとまりのある英語を読んで、その内容について、概要や要点を日本語でまとめさせる。
- 42. 読んだ内容について、書き手の意向(考え、意見、気持ち、感情など)を理解し、自分の考え、感想などを英語でまとめさせる。
- 43. 読んだ内容について、書き手の意向(考え、意見、気持ち、感情など)を理解し、自分の考え、感想などを日本語でまとめさせる。
- 44. 読んだ内容について、英語で質問に答えさせる。
- 45. 読んだ内容について、日本語で質問に答えさせる。
- 46. 文章の内容や自分の解釈が聞き手に伝わるように音読させる。
- 47. 未知の語の意味や文法の知識を活用して推測したり、背景となる知識を活用したりしながら読ませる。

- 48. 文章の中でポイントとなる語句や文、段落の構成や展開などに注意して読ませる。
- 49. 目的や状況に応じて、速読や精読など、適切な読み方をさせる。
- 50. 英文和訳をさせる。
- 51. 語句の解説をする。
- 52. 文型・文法の解説をする。
- 53. 教科書以外の読み物を楽しみのために多読させる。

◆ 以下は次の尺度を使用してお答えください

1	全く配慮していない
2	あまり配慮していない
3	配慮している
4	十分配慮している

教え方、内容の扱い方(科目を問わず、教える際に考慮していること)

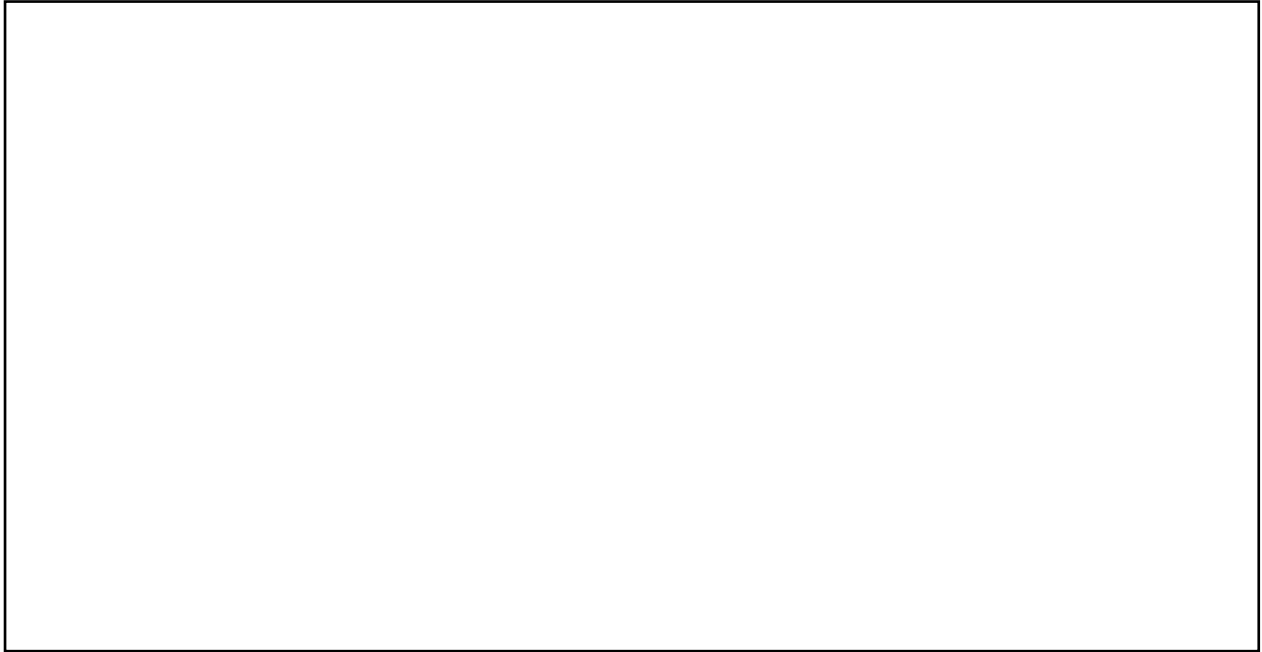
- 54. 生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を整理して教える。
- 55. 生徒の実態に応じて、中学校における基礎的な学習事項を用い、多様な場面での言語使用の経験をさせながらそれらの習熟することを図る。
- 56. 場面や目的に応じて、主体的に英語を聞いたり、話したり、読んだり、書いたりして自発的にコミュニケーションに取り組むように指導する。
- 57. 家庭生活や学校生活の中で生徒の興味・関心の対象となる日常的で身近な話題を取り上げる。
- 58. 学習成果の成果を活用して、教室の内外において積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。  
(たとえば、インターネットや電子メールを利用する、英語の本や新聞をよむ、地域の外国人(英語圏に限らない)と英語でコミュニケーションを図る、英語キャンプ・交流・英語ユースフォーラムに参加する、海外研修旅行、ホームステイに参加する、英語部に参加する、など)
- 59. 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育む。
- 60. 世界や我が国の生活や文化についての理解を深めさせるとともに、言語や文化に対する関心を高めさ

せ、これらを尊重する態度を育む。

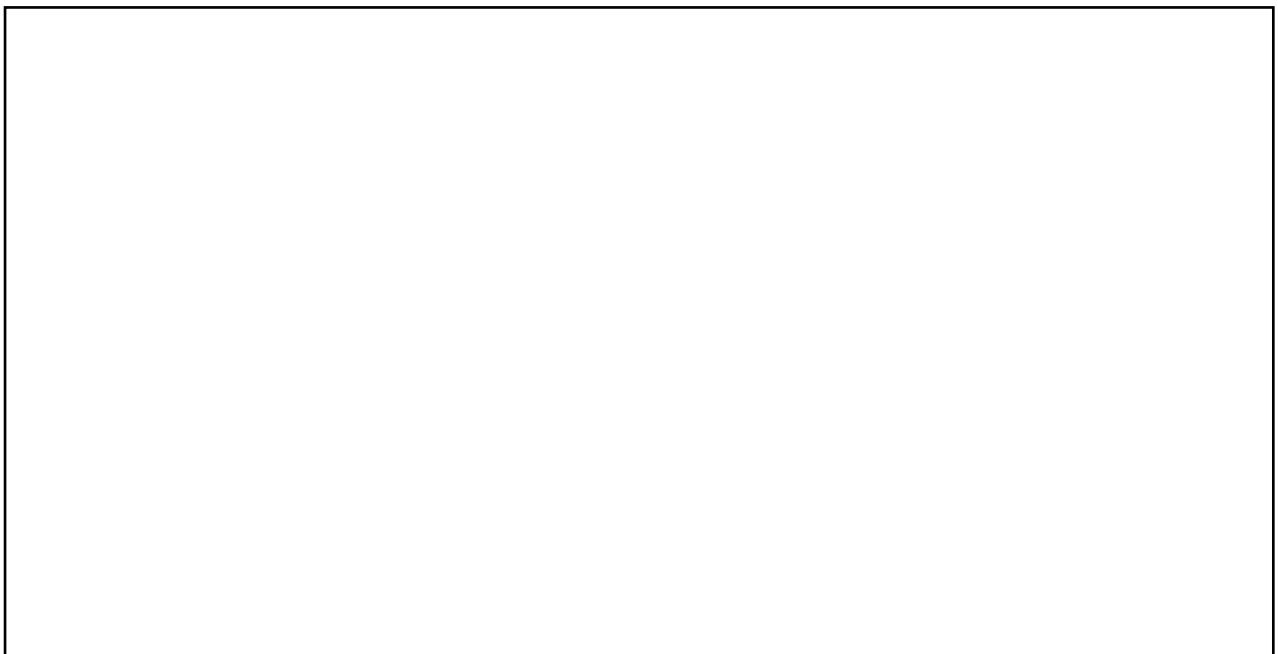
- 61. 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養う。
- 62. 音声指導の補助として、発音表記を用いた指導。
- 63. 辞書などを効果的に利用しながら、自ら外国語を理解し、外国語を使おうとする積極的な態度を育む。
- 64. ティーム・ティーチングやペア・ワーク、グループ・ワークなどを適宜取り入れた指導。
- 65. 視聴覚教材や、LL、コンピュータ、情報通信ネットワークなどを生かした指導。
- 66. ネイティブスピーカーなどの協力を得て行う授業を積極的に取り入れる。

中学校教員、高等学校教員共通

以上、本調査に対するご自分の回答を見て、気がついたことをお書きください。



◆ その他、本調査に対するご意見等ございましたら、ご自由にお書きください。



## 付録2

### 中学校・高等学校段階で求められる英語力の指標に関する研究(中間報告)

研究グループリーダー 吉田研作(上智大学)  
藤田 保(上智短期大学)  
渡部良典(秋田大学)  
森 博英(日本大学)  
鈴木 栄(神奈川県立神奈川総合高等学校)  
長田美佐(埼玉県立川越初雁高等学校)

#### I. はじめに

平成 14 年 7 月、文部科学省は、『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想』を発表した。その中で、日本人に求められる英語力として次のような2つの目標を示した。

##### ① 国民全体に求められる英語力

これは、中学・高校で達成すべき目標を示したもので、具体的には、中学校卒業段階では、挨拶や応対等の平易な会話(同程度の読む・書く・聞く)ができるようにすること(卒業者の平均が英検3級程度)。そして、高等学校卒業段階では、日常の話題に関する通常の会話(同程度の読む・書く・聞く)ができること(高校卒業者の平均が英検準2級～2級程度)、と設定された。

##### ② 社会に活躍する人材等に求められる英語力

これは、大学における英語教育の目標を示したものであり、各大学が、仕事で英語が使える人材を育成することが求められていることを示している。

文部科学省では、上記の目標を達成するために「英語教育に関する研究グループ」を組織し、それぞれのグループで次のような研究を促進することとした。

第1研究グループ: 中学校・高等学校段階で求められる英語力の指標に関する研究

第2研究グループ: 中学校・高等学校における英語教育及び教員の研修プログラムに関する研究

第3研究グループ: 英語教員が備えておくべき英語力の目標値についての研究

第4研究グループ: 大学の英語教育の在り方に関する研究

#### II. 第1研究グループの研究テーマ

我々第1研究グループは、上記のうち「①中学校・高等学校段階で求められる英語力の指標に関する研究」を委嘱され、下記の具体的な項目についての研究を行っており、本報告書は、この研究に基づくものである。

- a. 中学校・高等学校段階で求められる英語力の指標についての研究
- b. 外部試験を指標に関連づけることの妥当性に関する研究
- c. 外部試験結果を入試等で活用すること等の方策に関する研究
- d. 中学校・高等学校を通じて一貫した英語教育の研究



平成 14 年度は、上記 a～d の内、特に a を中心に研究することとし、その課題を次のように設定した。

「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会(以降、改善懇)」、また、「英語教育改革に関する懇談会」等を通して、日本の英語教育の進むべき方向性について色々な考え方が示されてきたが、それらは果たして、日本の英語教育の現状の中で、どこまで実現可能なのか。その具体的な内容、方法等について研究する。

### III. 研究実施計画

本研究は下記の順に実施する。

- ① 中学および高等学校学習指導要領とその解説書、そして、それ以後発表されている改善懇報告評価規準の参考資料等をもう一度検討し、どのような具体的な英語力の目標が考えられるかを検討する。
- ② 各都道府県教育委員会、また、各都道府県英語教育研究会(中高)、私学教育研究会(外国語部会)等が今までに行ってきた中学、高校の英語教育に関する調査結果を分析する。
- ③ 上記を基に、独自の調査項目を作成、全国都道府県からそれぞれ数校の中学、および高校を選び、アンケート調査を行う。
- ④ 調査結果をもとに、中学、高校における英語力の具体的目標を検証し、それを実現するための具体的施策を提案する。

### IV. 研究経過

現在までの研究経過を示す。

- ⑥ まず、現在の日本の中学高校の英語教育の現状把握、また、新学習指導要領(以降学習指導要領とする)の内容を吟味し、それに基づいて全国の教員が学習指導要領に示されている内容をどの程度実現しているかを調査することとした。
- ⑦ 同時に、上記について今までに実施された関連する研究結果の分析を行った。その結果、評論やエッセー的なものが存在することは分かったが、実際のデータを扱ったものが殆どないことが分かった。
- ⑧ 学習指導要領をもとに、教員対象のアンケートを作成し、全国の都道府県教育委員会を通してアンケートを依頼し、中学校教員 395 名、高等学校教員 386 名から回答を回収し、その分析を行った。今回の報告は、このアンケート調査の結果に基づき、学習指導要領が実際に教育現場でどの程度まで実施されているかを知ること、そして、各教員が持っている「英語教育に対する理念・目標」と「実際の教室活動」との関係性を把握することを主な目標としている。
- ⑨ また、吉田が共同研究を行っている民間教育団体を通して、教師(168 名)、生徒(9309 名)に対する CAN-DO 調査(「できる」と思っていることの調査)を実施した。更に、調査に参加した生徒の英語教員に上記のアンケート調査を実施した。この調査結果をもとに、まず、生徒が「教室活動として」出来ると思っ  
ていること、「教室外で」出来ると思っ  
ていること、そして、「海外に出た場合に」出来ると思っ  
ていること、この  
3点の間の関係を調査した。さらに、「教師の英語教育の実態」と「生徒の CAN-DO 得点」との間の関係も  
分析した。(なお、本研究報告書では、既に、ベネッセ・コーポレーションより公表されている結果を参照し  
ている)
- ⑩ 上記の結果に基づき、「英語が使える日本人」の育成のための具体的方策について提案を行う。

なお、本報告書は、中間報告であり、より具体的な報告書は今後発表する。

## 教員アンケートと実施結果

本アンケート調査は大別して 2 つの項目、つまり、「英語教育の目標・理念」に関する項目と英語教師の教え方に関する項目から成る。前者の英語教育の目標・理念に関するアンケート項目は、学習指導要領、英語指導方法等改善の推進に関する懇談会報告、および、21 世紀日本の構想懇談会報告書等を基に作成した。また、教師の教え方に関する項目は、平成 14 年度から実施されている中学校学習指導要領、および、平成 15 年度から実施されている高等学校学習指導要領の内容を基に作成した。

アンケートの実施時期は、平成 15 年 1 月から 2 月の 2 ヶ月間で、中学校、高校それぞれにつき、各都道府県 8 校、政令指定都市各 4 校を無作為抽出し、各都道府県教育委員会を通して各学校 1 名に回答を依頼した結果、全国の中学校英語教師 395 名、高等学校英語教師 386 名の回答を得た。

### A. 英語教育の目的・理念

#### 1. アンケートの内容

本調査にあたって実施したアンケートは以下の通りである。B1 から B24 の各項目について、1 (全く賛成できない) から 5 (全く賛成である) までの 5 段階の選択肢での回答を求めた。尚、「英語教育の目的・理念」に関する質問項目は、中学校、高校共通である。

1	全く賛成できない
2	あまり賛成できない
3	どちらともいえない
4	ある程度賛成である
5	全く賛成である

- B1. 実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことをいう。
- B2. 実践的コミュニケーション能力と言った場合、聞き、話す能力だけでなく、読み、書く能力もさす。
- B3. 海外旅行などの海外における社会的場面で英語が話せる観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である。
- B4. 国際社会に生きる日本人として、世界の人々と協調し、積極的に国際交流などを行っていくための資質・能力の基礎を養う観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である。
- B5. 英語を実践的に使うことが出来なければ日本および日本人はこれからの国際社会で取り残されてしまう。
- B6. 英語を実践的に使う能力が必要になるのは、海外に出かけた時だけである。
- B7. これからの国際社会において、日本の立場を明確に表明するために、英語を実践的に活用する能力は必要である。
- B8. 中学校卒業時には、だれでも英語で挨拶をはじめとする簡単な日常会話ができなければならない。
- B9. 中学校卒業時には、だれでも簡単な英語を読んだり書いたりできなければならない。
- B10. 高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で聞いたり話せたりできなければならない。

い。

- B11. 高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で読んだり書いたりできなければならない。
- B12. 日本における英語教育の最終目標は、英語で議論・ディベート・スピーチ・プレゼンテーションなどができることである。
- B13. 英語は、実際に使えることよりも、知識として身につけるために指導することが重要である。
- B14. 英語を国際的な場面で実践的に使えるように指導することは重要である。
- B15. 英語を、入試などのテストに合格するために指導することは重要である。
- B16. 生徒が英語を好きになるように指導することは重要である。
- B17. 生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である。
- B18. 英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である。
- B19. 英語を学ぶことにより、生徒が海外旅行やホームステイに困ることなく参加できるような指導をすることは重要である。
- B20. 日本という国が国際的に貢献できることを目的に英語を教えることは重要である。
- B21. 英語を使って英語圏の人とより親密な交流をもつよう指導することは重要である。
- B22. 日本人が学ぶべき英語は、英米のネイティブの英語をモデルとしたものでなければならない。
- B23. 実践的コミュニケーション能力の育成を促進するためには大学入試の変革がまず必要である。
- B24. 英語で実践的にコミュニケーションする力が今以上に向上しない場合、いずれは英語を第 2 公用語にするなどの思い切った手段をとる必要がでてくる。

## 2. 中学校教員の「英語教育の目的・理念」に関する回答の結果

### 1) 全体の傾向

表2-1において特に注目すべき点は、「英語を実践的に使う能力が必要になるのは、海外に出かけた時だけである」(B6)の平均値が1.73と最も低いということである。これは、英語を実践的に使う能力は、海外に出かけた時だけではなく、国内でも必要であると考えている教員が多いということを示唆しているのかもしれない。他には、B13「英語は、実際に使えることよりも、知識として身につけるために指導することが重要である」も2.03と低いが、これは、英語は使える道具として指導することが支持されていることを示しているのかもしれない。更に、B24の「英語で実践的にコミュニケーションする力が今以上に向上しない場合、いずれは英語を第2公用語にするなどの思い切った手段をとる必要がでてくる」も他の項目と比べて低い値(2.49)がでていることより、英語力の向上のためにそれほど大きな変化をとらなうことに対しては、賛成意見が少ないといえるようである。

一方、教員からの賛成意見が特に多いものとして、B4「国際社会に生きる日本人として、世界の人々と協調し、積極的に国際交流などを行っていくための資質・能力の基礎を養う観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である」(4.51)、B16「生徒が英語を好きになるように指導することは重要である」(4.74)、B17「生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である」(4.81)、そして、B18「英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である」(4.60)があげられる。最初の項目(B4)は、実践的コミュニケーション能力、次の2つの項目(B16、B17)は、生徒の動機付け、そして最後の項目(B18)は、英語教育を通して生徒の世界観を広げるという人間教育に関する項目であり、それぞれの必要性・重要性を教員が強く認識していると言えるだろう。

表2-1: 中学校学習指導要領の理念・目的に関する教員の意識—5段階の平均と分布

	1 全く賛成できない 2 あまり賛成できない 3 どちらともいえない 4 ある程度賛成できる 5 全く賛成である											
	平均値	標準偏差	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
B1	3.43	1.07	16	4%	85	22%	53	13%	196	50%	45	11%
B2	4.29	0.85	0	0%	24	6%	29	7%	149	38%	193	49%
B3	4.05	0.84	4	1%	16	4%	56	14%	198	50%	121	31%
B4	4.51	0.65	2	1%	3	1%	13	3%	150	38%	227	57%
B5	3.57	0.96	12	3%	41	10%	106	27%	181	46%	55	14%
B6	1.73	0.87	189	48%	148	37%	37	9%	18	5%	3	1%
B7	4.15	0.77	1	0%	11	3%	52	13%	194	49%	137	35%
B8	3.92	0.86	3	1%	23	6%	75	19%	195	49%	99	25%
B9	3.80	0.83	3	1%	24	6%	93	24%	205	52%	70	18%
B10	3.80	0.81	4	1%	19	5%	96	24%	208	53%	68	17%
B11	3.75	0.80	3	1%	22	6%	104	26%	209	53%	57	14%
B12	3.06	1.01	20	5%	106	27%	126	32%	118	30%	25	6%
B13	2.03	0.81	97	25%	216	55%	59	15%	21	5%	2	1%
B14	4.15	0.76	2	1%	10	3%	47	12%	202	51%	134	34%
B15	3.19	0.99	23	6%	74	19%	121	31%	157	40%	20	5%
B16	4.74	0.58	2	1%	4	1%	5	1%	71	18%	313	79%
B17	4.81	0.49	2	1%	1	0%	1	0%	64	16%	327	83%
B18	4.60	0.63	1	0%	3	1%	16	4%	112	28%	263	67%
B19	3.69	0.83	4	1%	25	6%	118	30%	192	49%	56	14%
B20	3.80	0.80	2	1%	15	4%	116	29%	188	48%	74	19%
B21	3.75	0.81	1	0%	24	6%	114	29%	191	48%	65	16%
B22	2.97	0.91	27	7%	80	20%	176	45%	102	26%	10	3%
B23	4.29	0.77	1	0%	6	2%	51	13%	156	39%	181	46%
B24	2.49	1.09	83	21%	118	30%	129	33%	47	12%	18	5%

注: B1～B24 は各アンケート項目

一方、標準偏差を見ると、教員間の回答に大きなばらつきが見られる項目として、B1「実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことをいう」(1.07)、B5「英語を実践的に使うことが出来なければ日本および日本人はこれからの国際社会で取り残されてしまう」(0.96)、B12「日本における英語教育の最終目標は、英語で議論・ディベート・スピーチ・プレゼンテーションなどができることである」(1.01)、B15「英語を、入試などのテストに合格するために指導することは重要である」(0.99)、B24「英語で実践的にコミュニケーションする力が今以上に向上しない場合、いずれは英語を第2公用語にするなどの思い切った手段をとる必要がでてくる」(1.09)などを挙げる事ができる。実践的コミュニケーションをオーラルに限定するか、それとも、文字媒体のコミュニケーションも含めるかに関しては、教員間にばらつきが多い、すなわち、教員間に意見の相違が大きいようである。これらの結果については、中学校の場合、オーラル・コミュニケーションに特に重点が置かれていることが影響しているかもしれない。全体としては、国際社会における重要性を認識している人は多いが(B4)、一方、「英語ができなければ世界から取り残される」と思っている人と「必ずしもそうとは言えない」と思っている人に分かれているようである。これもまた、基礎的なオーラル・コミュニケーションに重点を置いている中学校の教員であることが影響しているのかもしれない。また、英語によるディベートやディスカッションなど、より高度なコミュニケーションの必要性についても意見が分かれている。更に、英語教育の目的がテストや入試にあるかどうかについても意見が分かれている。最後に、21世紀日本の構想懇談会が提案した、英語の第2公用語論に対する意見も

個人差が大きいことが分かる。

これらの結果をより具体的に見るために、選択肢の1(全く賛成できない)から5(全く賛成である)のどこに意見が集中しているかをやや詳細に検討する。上記の B1、つまり、実践的コミュニケーションがオーラルのみを指すものかどうかに関しては、「あまり賛成できない」という回答者と「ある程度賛成できる」という回答者に分かれていることが分かる。また、B12 のディベートやディスカッション能力の重要性については、「あまり賛成できない」「どちらとも言えない」「ある程度賛成できる」という教員が、ほぼ同じぐらいの割合いることが分かる。また、B24の第2公用語論については、「全く賛成できない」「あまり賛成できない」、「どちらともいえない」という回答数が比較的近いことが分かる。

次に、「英語教育の目的・理念」を「年齢」、「教員歴」、「教員研修」、「受験意識」、それぞれとの関係で考察する。

## 2) 中学校教員の「年齢」と「英語教育の目的・理念」(以降、「との関係」はすべて削除してあります)

表2-2は表2-1 の回答を年齢別に細分化したものである。年齢別に各項目の平均値を見る限り、殆ど差がないことが分かる。同じような傾向は、標準偏差にもみられ、個々人の考え方の違いは、どの年齢層にも同じような傾向が見られ、ある特定の年齢に集中しているということはない。ただし、そのなかでも特記すべき点は、差は小さいものの、年齢の低い教員ほど B3「海外旅行などの海外における社会的場面で英語が話せる観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である」に賛成している人の割合が高く、年齢の高い教員は、B5「英語を実践的に使うことが出来なければ日本および日本人はこれからの国際社会で取り残されてしまう」、B12「日本における英語教育の最終目標は、英語で議論・ディベート・スピーチ・プレゼンテーションなどができることである」、B21「英語を使って英語圏の人とより親密な交流をもつよう指導することは重要である」に賛成と答えた割合が多いことなどが挙げられよう。

表2-2: 中学校教員の「英語教育の目的・理念」と年齢との関係

	20代(42名)		30代(169名)		40代(143名)		50代(38名)		全体(394名)*60代2名含む	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
B1	3.48	1.04	3.47	1.05	3.50	1.06	2.90	1.11	3.43	1.07
B2	4.33	0.93	4.27	0.88	4.29	0.82	4.37	0.77	4.29	0.85
B3	4.21	0.81	4.15	0.81	3.94	0.87	3.85	0.82	4.05	0.84
B4	4.57	0.55	4.50	0.67	4.51	0.66	4.49	0.64	4.51	0.65
B5	3.38	1.01	3.47	0.99	3.68	0.93	3.78	0.79	3.57	0.96
B6	1.81	0.97	1.74	0.88	1.68	0.85	1.76	0.77	1.73	0.87
B7	4.12	0.71	4.08	0.79	4.23	0.78	4.22	0.69	4.15	0.77
B8	4.05	0.91	3.91	0.85	3.87	0.85	3.98	0.88	3.92	0.86
B9	3.98	0.75	3.75	0.85	3.77	0.85	3.88	0.75	3.80	0.83
B10	3.79	0.87	3.76	0.81	3.80	0.83	3.98	0.69	3.80	0.81
B11	3.79	0.87	3.67	0.79	3.79	0.82	3.85	0.65	3.75	0.80
B12	2.86	1.18	3.07	1.00	3.01	0.97	3.32	0.99	3.06	1.01
B13	1.90	0.88	2.05	0.87	1.99	0.71	2.17	0.77	2.03	0.81
B14	4.19	0.74	4.20	0.75	4.12	0.79	4.05	0.74	4.15	0.76
B15	3.19	0.99	3.12	1.04	3.33	0.90	3.00	1.07	3.19	0.99
B16	4.67	0.69	4.73	0.58	4.79	0.50	4.71	0.72	4.74	0.58
B17	4.83	0.54	4.80	0.48	4.82	0.41	4.76	0.70	4.81	0.49

B18	4.71	0.46	4.62	0.63	4.56	0.69	4.56	0.59	4.60	0.63
B19	3.69	0.75	3.72	0.80	3.65	0.87	3.63	0.89	3.69	0.83
B20	3.55	0.74	3.83	0.82	3.87	0.79	3.71	0.78	3.80	0.80
B21	3.55	0.92	3.72	0.77	3.79	0.81	3.90	0.86	3.75	0.81
B22	2.86	0.98	2.98	0.89	2.99	0.90	2.98	1.04	2.97	0.91
B23	4.10	0.85	4.27	0.77	4.37	0.73	4.32	0.79	4.29	0.77
B24	2.69	1.07	2.50	1.05	2.42	1.12	2.49	1.19	2.49	1.09

### 3) 中学校教員の「教員歴」と「英語教育の目的・理念」

表2-3は表2-1の回答を教員歴別に細分化したものである。「教員歴」も「年齢」と類似の傾向がみられ、年数の違いによる平均値の大きな違いはみられない。標準偏差においても同様である。

表2-3: 中学校教員の「教員歴」と「英語教育の目的・理念」との関係

	5年以下(36名)		6-10年(96名)		11-15年(94名)		16-20年(84名)		20年以上(84名)		平均値(394名)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
B1	3.56	1.14	3.53	1.07	3.54	0.94	3.48	1.11	3.17	0.94	3.43	1.05
B2	4.33	0.77	4.19	0.85	4.33	0.92	4.31	0.92	4.33	0.80	4.29	0.86
B3	4.25	0.84	4.23	0.84	4.03	0.77	3.89	0.82	3.94	0.82	4.05	0.88
B4	4.50	0.59	4.56	0.65	4.51	0.77	4.42	0.66	4.55	0.60	4.51	0.70
B5	3.31	0.81	3.49	0.96	3.56	1.09	3.49	0.94	3.86	1.01	3.57	0.95
B6	1.89	0.73	1.65	0.87	1.80	0.93	1.79	0.79	1.61	0.98	1.73	0.88
B7	4.11	0.67	4.11	0.77	4.11	0.89	4.06	0.72	4.35	0.75	4.15	0.86
B8	4.03	0.88	4.05	0.86	3.88	0.93	3.79	0.84	3.89	0.86	3.92	0.85
B9	3.89	0.76	3.89	0.83	3.72	0.79	3.70	0.82	3.82	0.85	3.80	0.92
B10	3.61	0.79	3.80	0.81	3.80	0.89	3.76	0.84	3.92	0.78	3.80	0.82
B11	3.58	0.73	3.73	0.80	3.70	0.86	3.74	0.80	3.89	0.78	3.75	0.84
B12	2.67	0.95	3.18	1.01	3.10	1.22	2.99	0.96	3.10	1.06	3.06	0.98
B13	1.94	0.74	2.02	0.81	2.03	0.92	1.95	0.79	2.13	0.94	2.03	0.73
B14	4.19	0.83	4.30	0.76	4.15	0.74	4.14	0.78	3.99	0.70	4.15	0.75
B15	3.28	0.95	3.10	0.99	3.11	1.06	3.26	1.01	3.29	1.05	3.19	0.95
B16	4.67	0.65	4.78	0.58	4.72	0.67	4.77	0.56	4.73	0.56	4.74	0.50
B17	4.86	0.56	4.84	0.49	4.80	0.54	4.76	0.37	4.79	0.56	4.81	0.46
B18	4.78	0.66	4.70	0.63	4.52	0.40	4.54	0.48	4.57	0.77	4.60	0.65
B19	3.89	0.89	3.67	0.83	3.71	0.81	3.51	0.86	3.75	0.80	3.69	0.78
B20	3.78	0.80	3.83	0.80	3.89	0.80	3.67	0.80	3.80	0.76	3.80	0.83
B21	3.53	0.75	3.79	0.81	3.71	1.00	3.68	0.76	3.88	0.77	3.75	0.87
B22	2.94	0.97	2.90	0.91	3.03	1.04	2.88	0.86	3.08	0.91	2.97	0.84
B23	4.17	0.77	4.26	0.77	4.28	0.83	4.40	0.74	4.29	0.81	4.29	0.71
B24	2.64	1.07	2.49	1.09	2.50	1.08	2.46	1.03	2.44	1.14	2.49	1.16

#### 4) 中学校教員の「教員研修経験」と「英語教育の目的・理念」

表2-4: 中学校教員の「教員研修経験」と「英語教育の目的・理念」との関係

	教員研修参加歴なし(147名)		教員研修参加歴あり(245名)		全体の平均(392名)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
B1	3.51	1.02	3.37	1.10	3.43	1.07
B2	4.24	0.82	4.33	0.85	4.29	0.85
B3	4.08	0.81	4.04	0.86	4.05	0.84
B4	4.41	0.69	4.57	0.62	4.51	0.65
B5	3.50	0.86	3.61	1.01	3.57	0.96
B6	1.86	0.88	1.66	0.85	1.73	0.87
B7	4.07	0.78	4.19	0.76	4.15	0.77
B8	3.89	0.87	3.94	0.85	3.92	0.86
B9	3.73	0.84	3.84	0.82	3.80	0.83
B10	3.70	0.82	3.87	0.81	3.80	0.81
B11	3.61	0.79	3.83	0.79	3.75	0.80
B12	3.01	0.98	3.10	1.02	3.06	1.01
B13	2.03	0.82	2.02	0.81	2.03	0.81
B14	4.12	0.74	4.18	0.78	4.15	0.76
B15	3.24	0.94	3.17	1.02	3.19	0.99
B16	4.68	0.62	4.79	0.55	4.74	0.58
B17	4.78	0.43	4.82	0.52	4.81	0.49
B18	4.56	0.57	4.62	0.66	4.60	0.63
B19	3.58	0.83	3.76	0.83	3.69	0.83
B20	3.69	0.80	3.87	0.80	3.80	0.80
B21	3.70	0.83	3.77	0.80	3.75	0.81
B22	2.93	0.95	2.98	0.90	2.97	0.91
B23	4.33	0.69	4.28	0.81	4.29	0.77
B24	2.44	1.10	2.53	1.08	2.49	1.09

表2-4は中学校教員の「教員研修経験」と「英語教育の目的・理念」との関係を示したものであるが、過去5年以内の教員研修経験という分類から見ると、「教員研修を受けたことがある」と答えた教員の回答の方が値が高くなっている項目が18項目にもものぼる。「教員研修を受けたことがない」と答えた教員の回答の方が値が高くなっている項目は、B1「実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことをいう」、B3「海外旅行などの海外における社会的場面で英語が話せる観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である」、B6「英語を実践的に使う能力が必要になるのは、海外に出かけた時だけである」、B13「英語は、実際に使えることよりも、知識として身につけるために指導することが重要である」、B15「英語を、入試などのテストに合格するために指導することは重要である」、B23「実践的コミュニケーション能力の育成を促進するためには大学入試の変革がまず必要である」の6項目であり、研修を受けていない人ほど、実践的コミュニケーションがオーラルのみである(B1とB3)、実践的な英語の必要性は、海外に出た時である(B3とB6)、そして、英語は、知識と

して、テストは受験に必要である(B13、B15、B23)、とと思っている傾向があるようである。

## 5) 中学校教員の「受験意識」と「英語教育の目的・理念」

表2-5: 中学校教員の「受験意識」と「英語教育の目的・理念」との関係

	高い(22名)		比較的高い(209名)		比較的低い(132名)		低い(20名)		平均値(383名)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
B1	3.50	1.01	3.40	1.11	3.45	1.05	3.65	0.99	3.43	1.07
B2	4.27	1.08	4.26	0.85	4.33	0.81	4.40	0.82	4.29	0.85
B3	3.91	1.02	4.02	0.88	4.14	0.69	4.10	1.07	4.05	0.84
B4	4.68	0.48	4.47	0.67	4.52	0.66	4.70	0.57	4.51	0.65
B5	3.50	0.91	3.46	1.00	3.70	0.89	3.95	0.89	3.57	0.96
B6	1.73	0.70	1.67	0.85	1.75	0.82	2.20	1.32	1.73	0.87
B7	4.32	0.65	4.09	0.82	4.23	0.72	4.20	0.70	4.15	0.77
B8	3.95	1.00	3.95	0.84	3.93	0.85	3.80	1.06	3.92	0.86
B9	3.77	0.97	3.82	0.83	3.80	0.83	3.85	0.67	3.80	0.83
B10	3.95	1.00	3.76	0.83	3.89	0.75	3.80	0.95	3.80	0.81
B11	3.86	0.99	3.70	0.81	3.82	0.78	3.80	0.62	3.75	0.80
B12	2.95	1.17	3.09	1.03	3.06	0.97	3.05	1.10	3.06	1.01
B13	1.91	0.75	2.04	0.81	1.96	0.77	2.35	1.09	2.03	0.81
B14	4.14	0.83	4.14	0.82	4.23	0.65	4.05	0.83	4.15	0.76
B15	3.09	0.97	3.24	1.01	3.07	1.00	3.70	0.73	3.19	0.99
B16	4.77	0.43	4.77	0.52	4.74	0.63	4.55	0.83	4.74	0.58
B17	4.86	0.35	4.79	0.48	4.83	0.48	4.65	0.75	4.81	0.49
B18	4.59	0.67	4.62	0.60	4.61	0.67	4.55	0.60	4.60	0.63
B19	3.59	0.96	3.67	0.87	3.73	0.72	3.60	0.94	3.69	0.83
B20	4.00	0.69	3.76	0.79	3.87	0.80	3.90	0.97	3.80	0.80
B21	3.59	0.73	3.75	0.81	3.80	0.83	3.75	0.85	3.75	0.81
B22	3.00	1.02	2.94	0.94	2.99	0.88	3.05	0.83	2.97	0.91
B23	4.32	0.72	4.30	0.76	4.31	0.79	4.15	0.81	4.29	0.77
B24	2.41	0.85	2.43	1.09	2.60	1.09	2.50	1.24	2.49	1.09

表 2-5 において、B5「英語を実践的に使うことが出来なければ日本および日本人はこれからの国際社会で取り残されてしまう」という項目と B6「英語を実践的に使う能力が必要になるのは、海外に出かけた時だけである」という2つの項目で、受験意識の「低い」学校の教師の平均値が最も高くなっている。標準偏差の示す通り、教員の回答にはかなりのばらつきがあるものの、海外での英語使用の重要性・必要性を高くみている可能性がうかがえる。また、B13「英語は、実際に使えることよりも、知識として身につけるために指導することが重要である」、B15「英語を、入試などのテストに合格するために指導することは重要である」でも、受験意識の「低い」学校の英語教師の回答は数値が高くなっている。他方、受験意識の B16「高い」学校の英語教師の回答は、「生徒が英語を好きになるように指導することは重要である」、B17「生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う



気持ちを育てるような指導をすることは重要である」、B23「実践的コミュニケーション能力の育成を促進するためには大学入試の変革がまず必要である」でその平均値が高くなっている。このような回答は、それぞれの教育環境で追い求めている英語教育の姿を示しているともいえるかもしれない。

### 3. 高等学校教員の「英語教育の目的・理念」に関する回答の結果

#### 1) 全体の傾向

では、次に、高等学校の英語教員の目的・理念の調査結果を見てみることにするが、今回のアンケート実施時期は、高等学校学習指導要領の移行期間に当たり、こうした時期にあることが、すでに新学習指導要領が完全実施されている中学校教員との意識の違いに表れている可能性があることを、ここで予め述べておく。

全体の傾向として、低い値が出ているのは、B6「英語を実践的に使う能力が必要になるのは、海外に出かけた時だけである」(1.75)、B24「英語で実践的にコミュニケーションする力が今以上に向上しない場合、いずれは英語を第2公用語にするなどの思い切った手段をとる必要がでてくる」(2.19)、B13「英語は、実際に使えることよりも、知識として身につけるために指導することが重要である」(2.22)で、中学と同じ項目であるのは興味深い点である。逆に、高い値が出ているのは、B16「生徒が英語を好きになるように指導することは重要である」(4.64)、B17「生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である」(4.68)、そして、B18「英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である」(4.69)で、生徒の英語力育成により直接的に必要とされる動機付けや人間教育的理念に関わる項目である。また、国際社会における必要性などの、より大きな視点に立ったものは、顕著に高い評価にはなっていないのは、中学校の教師の回答傾向とはことなる点でもある。さらに、10項目において、標準偏差が.95以上の値を示していること(中学校の場合は、5項目)も中学校教員の回答とは違う特徴で、高校教師間の回答には、より大きなばらつきがあるようである。

表3-1: 高等学校学習指導要領の理念・目的に関する教員の意識－5段階の平均と分布

			1 全く賛成できない		2 あまり賛成できない		3 どちらともいえない		4 ある程度賛成できる		5 全く賛成である	
	平均値	標準偏差	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
B1	3.27	1.15	28	7.3%	90	23.3%	58	15.0%	165	42.7%	45	11.7%
B2	4.45	0.82	3	0.8%	15	3.9%	22	5.7%	112	29.0%	234	60.6%
B3	3.77	0.98	2	0.5%	54	14.0%	66	17.1%	170	44.0%	94	24.4%
B4	4.37	0.73	0	0.0%	8	2.1%	32	8.3%	151	39.1%	195	50.5%
B5	3.55	1.00	12	3.1%	42	10.9%	109	28.2%	161	41.7%	62	16.1%
B6	1.75	0.84	173	44.8%	161	41.7%	31	8.0%	20	5.2%	1	0.3%
B7	4.24	0.82	2	0.5%	13	3.4%	39	10.1%	164	42.5%	168	43.5%
B8	3.71	0.99	14	3.6%	28	7.3%	79	20.5%	187	48.4%	78	20.2%
B9	3.68	0.97	13	3.4%	27	7.0%	92	23.8%	181	46.9%	73	18.9%
B10	3.71	0.95	13	3.4%	28	7.3%	80	20.7%	198	51.3%	67	17.4%
B11	3.65	0.94	12	3.1%	27	7.0%	101	26.2%	182	47.2%	64	16.6%
B12	3.09	1.04	24	6.2%	81	21.0%	132	34.2%	122	31.6%	27	7.0%
B13	2.22	0.81	63	16.3%	203	52.6%	96	24.9%	21	5.4%	3	0.8%

B14	4.08	0.82	3	0.8%	16	4.1%	49	12.7%	194	50.3%	124	32.1%
B15	3.37	0.99	18	4.7%	59	15.3%	103	26.7%	174	45.1%	32	8.3%
B16	4.64	0.56	0	0.0%	1	0.3%	14	3.6%	107	27.7%	264	68.4%
B17	4.68	0.54	1	0.3%	0	0.0%	9	2.3%	98	25.4%	278	72.0%
B18	4.69	0.57	2	0.5%	0	0.0%	7	1.8%	98	25.4%	279	72.3%
B19	3.72	0.87	6	1.6%	25	6.5%	101	26.2%	189	49.0%	65	16.8%
B20	3.80	0.92	8	2.1%	21	5.4%	94	24.4%	175	45.3%	88	22.8%
B21	3.77	0.88	5	1.3%	22	5.7%	100	25.9%	183	47.4%	76	19.7%
B22	2.89	0.97	31	8.0%	96	24.9%	152	39.4%	97	25.1%	10	2.6%
B23	4.06	0.84	2	0.5%	12	3.1%	75	19.4%	168	43.5%	129	33.4%
B24	2.19	1.03	114	29.5%	126	32.6%	107	27.7%	28	7.3%	11	2.8%

## 2) 高等学校教員の「年齢」と「英語教育の目的・理念」

全体的には目立った違いは認められないが、B1「実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことをいう」、B5「英語を実践的に使うことが出来なければ日本および日本人はこれからの国際社会で取り残されてしまう」、B12「日本における英語教育の最終目標は、英語で議論・ディベート・スピーチ・プレゼンテーションなどができることである」、そして B22「日本人が学ぶべき英語は、英米のネイティブの英語をモデルとしたものでなければならない」で、20 代教員の平均値がやや低いようである。標準偏差は比較的大きく、高校教員の回答傾向として、個人差が比較的大きいことが分かる。

表3-2: 高等学校教員の「英語教育の目的・理念」と年齢との関係

	20代(49名)		30代(150名)		40代(129名)		50代(57名)		全体の平均(385名)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
B1	3.06	1.16	3.33	1.11	3.27	1.17	3.40	1.22	3.27	1.15
B2	4.57	0.58	4.40	0.82	4.46	0.91	4.44	0.87	4.45	0.82
B3	3.69	1.08	3.77	1.02	3.84	0.91	3.72	1.00	3.77	0.98
B4	4.29	0.82	4.41	0.74	4.39	0.65	4.37	0.77	4.37	0.73
B5	3.27	1.00	3.68	1.00	3.59	0.97	3.47	0.95	3.55	1.00
B6	1.69	0.65	1.74	0.85	1.76	0.86	1.77	0.87	1.75	0.84
B7	4.04	0.91	4.26	0.81	4.33	0.77	4.23	0.78	4.24	0.82
B8	3.78	0.94	3.65	1.02	3.82	0.97	3.77	0.93	3.71	0.99
B9	3.78	0.82	3.63	0.92	3.73	1.01	3.81	1.08	3.68	0.97
B10	3.57	1.00	3.67	0.91	3.77	0.96	3.84	0.98	3.71	0.95
B11	3.67	0.88	3.61	0.90	3.68	0.97	3.77	1.02	3.65	0.94
B12	2.86	0.96	3.23	1.01	3.03	1.02	3.28	1.06	3.09	1.04
B13	2.20	0.76	2.17	0.77	2.26	0.85	2.26	0.86	2.22	0.81
B14	3.84	0.96	4.10	0.79	4.17	0.77	4.07	0.86	4.08	0.82
B15	3.37	0.97	3.31	1.01	3.44	0.99	3.42	0.94	3.37	0.99
B16	4.61	0.61	4.66	0.54	4.66	0.59	4.58	0.53	4.64	0.56

B17	4.67	0.69	4.70	0.54	4.71	0.49	4.61	0.53	4.68	0.54
B18	4.76	0.52	4.69	0.51	4.67	0.59	4.67	0.66	4.69	0.57
B19	3.53	0.92	3.77	0.85	3.79	0.86	3.72	0.82	3.72	0.87
B20	3.80	0.82	3.77	0.89	3.85	0.94	3.82	1.02	3.80	0.92
B21	3.67	0.92	3.73	0.85	3.88	0.84	3.79	0.94	3.77	0.88
B22	2.51	1.00	2.90	0.98	2.93	0.88	3.11	0.96	2.89	0.97
B23	3.90	0.77	4.07	0.84	4.13	0.80	4.00	0.93	4.06	0.84
B24	2.10	1.07	2.31	1.08	2.07	0.91	2.35	1.14	2.19	1.03

### 3) 高等学校教員の「教員歴」と「英語教育の目的・理念」

表3-3は表1の回答を教員歴別に分類したものであるが、平均値、標準偏差、共に、教育歴によって分けられたグループ間に大きな違いは見られない。

表3-3: 高等学校教員の「教員歴」と「英語教育の目的・理念」との関係

	5年以下(48名)		6-10年(78名)		11-15年(72名)		16-20年(84名)		20年以上(104名)		平均値(386名)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
B1	3.17	1.15	3.27	1.02	3.32	1.20	3.29	1.26	3.32	1.17	3.27	1.15
B2	4.46	0.71	4.41	0.83	4.33	0.90	4.58	0.71	4.44	0.91	4.45	0.82
B3	3.71	1.05	3.81	0.95	3.76	1.08	3.86	0.93	3.73	0.97	3.77	0.98
B4	4.27	0.84	4.36	0.74	4.51	0.67	4.39	0.69	4.35	0.72	4.37	0.73
B5	3.23	0.95	3.58	0.97	3.65	0.97	3.81	1.05	3.46	0.93	3.55	1.00
B6	1.79	0.68	1.72	0.84	1.75	0.82	1.64	0.85	1.82	0.90	1.75	0.84
B7	4.02	0.93	4.13	0.78	4.42	0.76	4.44	0.80	4.18	0.77	4.24	0.82
B8	3.67	0.93	3.63	1.08	3.81	0.91	3.79	1.02	3.79	0.94	3.71	0.99
B9	3.58	0.82	3.67	1.00	3.75	0.87	3.73	1.06	3.76	0.99	3.68	0.97
B10	3.48	0.92	3.64	0.98	3.85	0.83	3.69	1.01	3.83	0.95	3.71	0.95
B11	3.63	0.79	3.56	0.96	3.75	0.87	3.62	1.00	3.76	0.98	3.65	0.94
B12	2.90	0.99	3.22	0.93	3.19	1.03	3.11	1.10	3.12	1.03	3.09	1.04
B13	2.17	0.78	2.19	0.70	2.18	0.78	2.23	0.91	2.28	0.84	2.22	0.81
B14	3.98	0.91	3.95	0.84	4.19	0.78	4.30	0.71	4.00	0.86	4.08	0.82
B15	3.35	0.93	3.15	0.94	3.39	1.06	3.48	1.10	3.44	0.91	3.37	0.99
B16	4.65	0.60	4.68	0.50	4.67	0.56	4.62	0.64	4.62	0.55	4.64	0.56
B17	4.69	0.72	4.73	0.47	4.67	0.56	4.73	0.52	4.64	0.50	4.68	0.54
B18	4.81	0.45	4.62	0.54	4.75	0.50	4.73	0.50	4.62	0.69	4.69	0.57
B19	3.63	0.84	3.77	0.84	3.67	0.90	3.74	1.00	3.79	0.78	3.72	0.87
B20	3.81	0.82	3.74	0.86	3.83	0.90	3.87	0.99	3.81	0.97	3.80	0.92
B21	3.63	0.94	3.72	0.77	3.82	0.88	3.77	0.95	3.89	0.84	3.77	0.88
B22	2.67	1.00	2.78	1.03	2.94	0.92	2.82	0.93	3.11	0.90	2.89	0.97

B23	3.81	0.79	3.99	0.83	4.18	0.84	4.18	0.84	4.06	0.83	4.06	0.84
B24	2.27	1.09	2.19	1.06	2.35	1.10	2.10	0.91	2.20	1.06	2.19	1.03

#### 4) 高等学校教員の「教員研修経験」と「英語教育の目的・理念」

表3-4は高等学校教員の「教員研修経験」と「英語教育の目的・理念」との関係を示したものであるが、「何らかの形で教員研修を受けたことがある」と答えた教員は、「受けたことがない」と答えた教員よりも、全体的に値が高い傾向がある。ただし、B13「英語は、実際に使えることよりも、知識として身につけるために指導することが重要である」と B22「日本人が学ぶべき英語は、英米のネイティブの英語をモデルとしたものでなければならない」の2項目では、「研修を受けたことがない」教員の値が高い傾向にある。

表3-4: 高等学校教員の「教員研修経験」と「英語教育の目的・理念」との関係

	教員研修参加歴なし(170名)		教員研修参加歴あり(211名)		全体の平均(381名)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
B1	3.22	1.15	3.33	1.17	3.27	1.15
B2	4.41	0.86	4.48	0.81	4.45	0.82
B3	3.75	0.97	3.81	1.00	3.77	0.98
B4	4.28	0.78	4.47	0.66	4.37	0.73
B5	3.56	1.01	3.57	0.97	3.55	1.00
B6	1.73	0.79	1.76	0.87	1.75	0.84
B7	4.16	0.88	4.33	0.75	4.24	0.82
B8	3.63	1.00	3.85	0.94	3.71	0.99
B9	3.65	0.99	3.78	0.92	3.68	0.97
B10	3.64	0.96	3.79	0.93	3.71	0.95
B11	3.62	0.93	3.71	0.93	3.65	0.94
B12	3.00	1.04	3.22	1.00	3.09	1.04
B13	2.36	0.82	2.09	0.78	2.22	0.81
B14	4.03	0.87	4.13	0.79	4.08	0.82
B15	3.34	1.00	3.40	1.00	3.37	0.99
B16	4.56	0.56	4.70	0.56	4.64	0.56
B17	4.57	0.61	4.79	0.45	4.68	0.54
B18	4.63	0.58	4.73	0.54	4.69	0.57
B19	3.66	0.90	3.80	0.85	3.72	0.87
B20	3.74	0.96	3.89	0.88	3.80	0.92
B21	3.78	0.86	3.80	0.87	3.77	0.88
B22	2.94	0.95	2.85	0.97	2.89	0.97
B23	3.95	0.89	4.17	0.78	4.06	0.84
B24	2.19	1.03	2.23	1.04	2.19	1.03

## 5) 高等学校教員の「受験意識」と「英語教育の目的・理念」

表3-5は高等学校教員の「受験教育に対する意識の高さ」と「英語教育の目的・理念」との関係を示したものである。ここで、「受験意識が高い」と回答した高等学校の教員は、目的と理念に関する項目に関してもほとんどの項目について、高い値を示している。ただし、B1「実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことをいう」、B6「英語を実践的に使う能力が必要になるのは、海外に出かけた時だけである」、そして、B13「英語は、実際に使えることよりも、知識として身につけるために指導することが重要である」の3項目に関しては、「受験意識が低い」と回答した学校の教員の値が目だって高いことが分かる。一方、B16「生徒が英語を好きになるように指導することは重要である」、B17「生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である」、B18「英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である」については、受験意識の高低による違いはほとんどみられない。

表3-5: 高等学校教員の「受験意識」と「英語教育の目的・理念」との関係

	高い(68名)		比較的高い(84名)		比較的低い(107名)		低い(125名)		平均値(384名)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
B1	2.91	1.21	3.12	1.20	3.44	1.08	3.46	1.13	3.27	1.15
B2	4.79	0.53	4.48	0.83	4.47	0.80	4.23	0.93	4.45	0.82
B3	3.82	1.05	3.74	1.02	3.96	0.93	3.62	0.96	3.77	0.98
B4	4.75	0.44	4.44	0.68	4.35	0.72	4.17	0.81	4.37	0.73
B5	3.85	0.92	3.51	1.00	3.62	1.00	3.40	0.98	3.55	1.00
B6	1.47	0.78	1.64	0.83	1.79	0.75	1.92	0.89	1.75	0.84
B7	4.51	0.61	4.29	0.87	4.27	0.80	4.06	0.84	4.24	0.82
B8	3.91	0.99	3.75	0.98	3.88	0.95	3.54	0.98	3.71	0.99
B9	3.82	1.04	3.79	0.91	3.77	0.93	3.54	0.98	3.68	0.97
B10	4.04	0.85	3.74	0.95	3.75	0.94	3.50	0.96	3.71	0.95
B11	4.00	0.86	3.70	0.90	3.67	0.92	3.46	0.97	3.65	0.94
B12	3.40	1.07	3.04	1.02	3.19	0.97	2.97	1.00	3.09	1.04
B13	1.99	0.78	2.21	0.76	2.25	0.84	2.31	0.82	2.22	0.81
B14	4.44	0.66	4.05	0.97	4.07	0.72	3.96	0.83	4.08	0.82
B15	3.65	0.97	3.38	1.07	3.40	0.95	3.18	0.96	3.37	0.99
B16	4.66	0.56	4.69	0.56	4.60	0.56	4.64	0.57	4.64	0.56
B17	4.71	0.55	4.67	0.65	4.66	0.51	4.72	0.49	4.68	0.54
B18	4.66	0.80	4.68	0.49	4.70	0.48	4.70	0.51	4.69	0.57
B19	3.91	1.03	3.71	0.95	3.73	0.81	3.65	0.74	3.72	0.87
B20	4.24	0.74	3.74	0.93	3.73	0.85	3.70	0.99	3.80	0.92
B21	4.07	0.83	3.77	0.92	3.84	0.77	3.59	0.90	3.77	0.88
B22	3.09	0.91	2.82	0.97	2.98	0.94	2.75	0.97	2.89	0.97
B23	4.26	0.77	4.11	0.85	4.00	0.88	3.98	0.82	4.06	0.84
B24	2.32	1.06	2.18	1.10	2.35	1.05	2.06	0.97	2.19	1.03

## B. 英語教員の教え方

### 4. 中学校教員の教え方に関するアンケートの内容

中学英語教員が、実際にどのように英語を教えているかを調べるため、学習指導要領の内容を基に、次のアンケートを作成し、実施した。項目は大きく「教育内容」と「教育方法」に分かれる。前者は読み書き聞き話す、いわゆる4技能をどのように教えているかに関する項目であり、1(全く行っていない)、2(ほとんど行っていない)、3(時々行っている)、4(かなり頻繁に行っている)の4つの選択肢から選ぶよう依頼した。後者は「教育方法」、「教材選択」、「授業全般で配慮していること」に関する項目であり、1(全く配慮していない)、2(あまり配慮していない)、3(配慮している)、4(十分配慮している)の4つの選択肢から選んで答えるというものである。以下にアンケートの内容を示す。

下記の項目について、中学校の英語教員に、次の4段階評価で答えてもらった。

- |   |             |
|---|-------------|
| 1 | 全く行っていない    |
| 2 | ほとんど行っていない  |
| 3 | 時々行っている     |
| 4 | かなり頻繁に行っている |

#### 聞くことの言語活動

- J1. 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取らせる。
- J2. 自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、具体的な内容や大切な部分を聞き取らせる。
- J3. 質問や依頼などを聞いて適切に応じさせる。
- J4. 話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解させる。

#### 話すことの言語活動

- J5. 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音させる。
- J6. 自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話させる。
- J7. 聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ合ったりさせる。
- J8. つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が続くよう話させる。

#### 読むことの言語活動

- J9. 文字や符号を識別し、正しく読ませる。
- J10. 書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読させる。
- J11. 物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読み取らせる。
- J12. 伝言や手紙などから書き手の意向を理解し、適切に応じさせる。

#### 書くことの言語活動

- J13. 文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意をして正しく書かせる。
- J14. 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書かせる。
- J15. 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書かせる。
- J16. 伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書かせる。

次の各項目については、下記の4段階評価で答えてもらった。

- |   |            |
|---|------------|
| 1 | 全く配慮していない  |
| 2 | あまり配慮していない |
| 3 | 配慮している     |
| 4 | 十分配慮している   |

### 教え方、内容の取扱い方

- J17. あいさつ、自己紹介、道案内など、特有の表現がよく使われる場面を取り上げた言語活動をさせる。
- J18. 家庭生活、学校での学習や活動、地域の行事など生徒の身近な暮らしにかかわる場面を取り上げた言語活動をさせる。
- J19. 自分の意見を言う、発表する、報告するなど、考えを深めたり情報を伝えたりする表現を取り上げた言語活動をさせる。
- J20. 依頼する、約束する、賛成する/反対するなど、相手の行動を促したり自分の意志を示したりする表現を取り上げた言語活動をさせる。
- J21. 礼を言う、ほめる、謝るなど、気持ちを伝える表現を取り上げた言語活動をさせる。
- J22. 言語活動を行う中で「文字及び符号」の指導を行う。
- J23. 言語活動を行う中で「語、連語及び慣用表現」の指導を行う。
- J24. 言語活動を行う中で「文法事項」の指導を行う。
- J25. 実際に英語を使用して互いの気持ちや考えを伝え合うなどのコミュニケーションを図る活動を行わせる。
- J26. コミュニケーションを図る活動においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を生徒自ら考えて言語活動を行わせる。
- J27. 文法事項の取扱いについては、用語や用法の区別などを理解するだけでなく、実際に使わせる。

### 授業全般について考慮していること

- J28. 生徒の実態や地域の実情に応じて、学年ごとの目標を適切に定め、3学年間を通して英語の目標の実現を図る。
- J29. 学習段階に応じて平易なものから難しいものへと配列する。
- J30. 発音表記が読めるように指導する。
- J31. 筆記体が使えるように指導する。
- J32. 語、連語及び慣用表現の指導に当たっては、運用度の高いものを厳選し、習熟を図る。
- J33. 辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるように指導する。
- J34. 生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用する。
- J35. 生徒の実態や教材の内容に応じてネイティブ・スピーカーなどの協力を得る。
- J36. 学習形態などを工夫し、ペアワーク、グループワークなどを適宜取り入れる。

### 教材選定に際して考慮していること

- J37. 英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史などに関するものの中から、生徒の心身の発達段階及び興味・関心に即した適切な題材を取り上げる。
- J38. 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つ教材を使う。

J39. 世界や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つ教材を使う。

#### 4. 中学校教員の「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」に関する回答の結果

##### 1) 全体の傾向

表4-1の「聞くこと」の言語活動の項目は、J4「話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解させる」(2.86)がわずかに低くなっている以外は、比較的高い値(3.30以上)となっている。逆に、「話すこと」の言語活動では、J5「強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音させる」(3.45)という音声の形式的側面の指導を除いて、J6「自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話させる」(2.99)、J7「聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ合ったりさせる」(2.55)、そして、J8「つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が長く話させる」(2.55)というような、内容やコミュニケーション自体を重視した言語活動に関する項目の値が低くなっている。

「読むこと」の言語活動では、J12「伝言や手紙などから書き手の意向を理解し、適切に応じさせる」(2.82)以外は全て3.30以上という高い値となっている。「書くこと」の言語活動では、J13「文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意をして正しく書かせる」(3.42)という言語形式重視の言語活動が最も高く、そのほかのJ14「聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書かせる」(2.72)、J15「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書かせる」(2.91)、そして、J16「伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書かせる」(2.69)という、より内容やコミュニケーションを重視した言語活動が低い値を示し、「話すこと」の言語活動の結果と類似している。

「総合的なコミュニケーション活動」に関しては、特にJ17「あいさつ、自己紹介、道案内など、特有の表現がよく使われる場面を取り上げた言語活動をさせる」(3.41)、J23「言語活動を行う中で「語、連語及び慣用表現」の指導を行う」(3.20)、J24「言語活動を行う中で「文法事項」の指導を行う」(3.24)、J27「文法事項の取扱いについては、用語や用法の区別などを理解するだけではなく、実際に使わせる」(3.33)の4項目についての値が、他と比べて高くなっている。ここでも、コミュニケーション活動に必要な「言語形式」を重視した指導がよく行われていることが分かる。そして、その他の「コミュニケーション自体」を重視した言語活動の値が低いことから、言語形式の方が実際のコミュニケーション活動よりも重視されているということが言えるだろう。

「授業全体で考慮していること」については、特にJ29「学習段階に応じて平易なものから難しいものへと配列する」(3.32)、J35「生徒の実態や教材の内容に応じてネイティブ・スピーカーなどの協力を得る」(3.43)、J36「学習形態などを工夫し、ペアワーク、グループワークなどを適宜取り入れる」(3.59)が高い値を示している。一方、J30「発音表記が読めるように指導する」(2.18)とJ31「筆記体が使えるように指導する」(1.78)はかなり低い値を示している。この結果は、発音記号や筆記体が、必修事項ではないためではなかろうかと考えられる。

最後に、「教材選定に際しての考慮していること」では、どの項目もさほど大きく考慮されているとはいえないことが分かる。

表4-1 中学校教員の「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」に関する回答の結果

		全般的な傾向									
		1全く行っていない		2ほとんど行っていない		3時々行っている		4かなり頻繁に行っている			
		平均値	標準偏差	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
聞くことの言語活動	J1	3.31	0.66	6	2%	27	7%	202	51%	160	41%
	J2	3.38	0.60	0	0%	25	6%	196	50%	174	44%



	J3	3.36	0.58	0	0%	21	5%	212	54%	162	41%
	J4	2.86	0.68	6	2%	106	27%	221	56%	62	16%
話すことの言語活動	J5	3.45	0.63	4	1%	18	5%	170	43%	203	51%
	J6	2.99	0.65	3	1%	74	19%	240	61%	78	20%
	J7	2.55	0.76	28	7%	160	41%	170	43%	37	9%
	J8	2.55	0.77	26	7%	166	42%	161	41%	42	11%
読むことの言語活動	J9	3.52	0.65	5	1%	19	5%	137	35%	234	59%
	J10	3.34	0.73	4	1%	48	12%	153	39%	190	48%
	J11	3.41	0.62	0	0%	28	7%	177	45%	190	48%
	J12	2.82	0.75	13	3%	116	29%	197	50%	69	17%
書くことの言語活動	J13	3.42	0.69	7	2%	24	6%	160	41%	204	52%
	J14	2.72	0.76	21	5%	123	31%	198	50%	53	13%
	J15	2.91	0.62	5	1%	80	20%	257	65%	53	13%
	J16	2.69	0.68	15	4%	128	32%	217	55%	35	9%

表4-1 中学校教員の「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」に関する回答の結果

		全般的な傾向		1全く配慮していない				2あまり配慮していない				3配慮している				4十分配慮している			
		平均値	標準偏差	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
「教え方、内容の取扱い方」	J17	3.41	0.56	1	0%	11	3%	208	53%	175	44%								
	J18	3.11	0.66	3	1%	58	15%	226	57%	108	27%								
	J19	2.83	0.68	4	1%	119	30%	213	54%	59	15%								
	J20	2.83	0.69	7	2%	110	28%	220	56%	58	15%								
	J21	3.02	0.70	4	1%	81	21%	215	54%	95	24%								
	J22	2.75	0.78	18	5%	127	32%	185	47%	65	16%								
	J23	3.20	0.65	4	1%	39	10%	225	57%	127	32%								
	J24	3.24	0.64	2	1%	40	10%	215	54%	138	35%								
	J25	3.18	0.70	3	1%	57	14%	200	51%	135	34%								
	J26	2.89	0.71	8	2%	99	25%	215	54%	73	18%								
授業全般について考慮していること	J27	3.33	0.62	2	1%	25	6%	209	53%	159	40%								
	J28	3.05	0.63	3	1%	59	15%	247	63%	86	22%								
	J29	3.32	0.60	1	0%	26	7%	214	54%	154	39%								
	J30	2.18	0.80	71	18%	207	52%	91	23%	26	7%								
	J31	1.78	0.77	160	41%	175	44%	48	12%	12	3%								
	J32	3.05	0.59	4	1%	48	12%	268	68%	75	19%								
	J33	2.77	0.78	17	4%	127	32%	182	46%	69	17%								
	J34	2.28	0.77	54	14%	201	51%	117	30%	23	6%								
	J35	3.43	0.64	2	1%	26	7%	166	42%	201	51%								
	J36	3.59	0.55	1	0%	10	3%	137	35%	247	63%								

教材選定について考慮していること	J37	3.06	0.67	3	1%	67	17%	228	58%	97	25%
	J38	2.79	0.73	9	2%	127	32%	197	50%	62	16%
	J39	2.98	0.62	3	1%	71	18%	252	64%	69	17%

## 2) 中学校教員の年齢と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

表4-2: 中学校教員の年齢と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

		20代(42名)		30代(169名)		40代(143名)		50代(38名)		全体(394名)*60代2名含む	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
聞くことの 言語活動	J1	3.1	0.74	3.3	0.66	3.3	0.64	3.4	0.67	3.31	0.66
	J2	3.4	0.62	3.4	0.61	3.4	0.60	3.3	0.57	3.38	0.60
	J3	3.4	0.59	3.3	0.60	3.4	0.57	3.3	0.52	3.36	0.58
	J4	2.9	0.85	2.8	0.67	2.9	0.66	3.0	0.65	2.86	0.68
話すことの 言語活動	J5	3.4	0.73	3.5	0.62	3.4	0.62	3.4	0.63	3.45	0.63
	J6	3.1	0.60	2.9	0.63	3.0	0.68	3.0	0.63	2.99	0.65
	J7	2.5	0.86	2.4	0.75	2.7	0.75	2.7	0.67	2.55	0.76
	J8	2.7	0.85	2.5	0.75	2.6	0.77	2.6	0.78	2.55	0.77
読むことの 言語活動	J9	3.4	0.73	3.5	0.69	3.6	0.58	3.7	0.61	3.52	0.65
	J10	3.0	0.76	3.4	0.74	3.4	0.73	3.5	0.60	3.34	0.73
	J11	3.4	0.66	3.4	0.62	3.4	0.61	3.4	0.63	3.41	0.62
	J12	2.7	0.73	2.8	0.79	2.8	0.72	2.9	0.77	2.82	0.75
書くことの 言語活動	J13	3.5	0.59	3.4	0.70	3.4	0.71	3.5	0.64	3.42	0.69
	J14	2.6	0.62	2.7	0.76	2.7	0.80	2.9	0.75	2.72	0.76
	J15	3.0	0.66	2.9	0.59	3.0	0.61	2.9	0.69	2.91	0.62
	J16	2.8	0.58	2.6	0.69	2.7	0.70	2.9	0.69	2.69	0.68
「教え方、内容の取 扱い方」	J17	3.4	0.62	3.4	0.55	3.4	0.57	3.5	0.53	3.41	0.56
	J18	3.1	0.75	3.1	0.68	3.2	0.64	3.1	0.63	3.11	0.66
	J19	2.8	0.72	2.9	0.67	2.8	0.67	2.8	0.71	2.83	0.68
	J20	2.9	0.68	2.9	0.71	2.8	0.68	2.9	0.62	2.83	0.69
	J21	3.0	0.64	3.0	0.72	3.0	0.71	3.2	0.59	3.02	0.70
	J22	2.6	0.66	2.7	0.80	2.8	0.77	2.9	0.82	2.75	0.78
	J23	3.2	0.73	3.2	0.67	3.3	0.65	3.2	0.46	3.20	0.65
	J24	3.1	0.61	3.3	0.66	3.3	0.65	3.1	0.61	3.24	0.64
	J25	3.1	0.63	3.2	0.69	3.2	0.74	3.2	0.64	3.18	0.70
	J26	2.7	0.77	2.9	0.68	2.9	0.73	2.9	0.72	2.89	0.71
	J27	3.5	0.59	3.3	0.59	3.3	0.67	3.2	0.56	3.33	0.62
授業全般に ついて考慮している こと	J28	3	0.58	3	0.65	3	0.6	3.2	0.68	3.05	0.63
	J29	3.2	0.62	3.3	0.63	3.4	0.58	3.4	0.58	3.32	0.60
	J30	1.9	0.73	2.1	0.78	2.2	0.77	2.6	0.92	1.18	0.80

	J31	1.5	0.63	1.8	0.79	1.8	0.8	1.8	0.641.78	0.77
	J32	3.0	0.54	3.0	0.62	3.0	0.58	3.1	0.63.05	0.59
	J33	2.6	0.85	2.8	0.77	2.8	0.77	2.7	0.852.77	0.78
	J34	2.3	0.84	2.2	0.76	2.3	0.77	2.3	0.732.28	0.77
	J35	3.5	0.71	3.4	0.62	3.4	0.64	3.5	0.643.43	0.64
	J36	3.7	0.60	3.6	0.52	3.6	0.58	3.5	0.553.59	0.55
教材選定に	J37	3.0	0.70	3.0	0.65	3.0	0.66	3.3	0.683.06	0.67
ついて考慮している	J38	2.7	0.72	2.7	0.69	2.8	0.71	3.0	0.882.79	0.73
こと	J39	2.9	0.79	2.9	0.6	3.0	0.56	3.1	0.712.98	0.62

表 4-2 の示すところ、年齢による大きな違いは見られない。ただし、「読むこと」の言語活動の、J10「書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読させる」、授業全体について考慮していることのJ30「発音表記が読めるように指導する」で、20代の教員の回答が他の年代と比べて多少低い値を示している。全般としては年齢の違いによる教え方の違いは見られなといえる。

### 3) 中学校教員の「教員歴」と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

表4-3から、教育経験の違いによる教え方の違いはほとんどないことが分かる。ただし、J34「生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用する」(2.06)は、教職経験 5年未満の教員が他と比べて、低い値をしめしている。

表4-3: 中学校教員歴と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

		5年以下(36名)		6-10年(96名)		11-15年(94名)		16-20年(84名)		20年以上(84名)		平均値(394名)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
	J1	3.25	0.65	3.23	0.66	3.40	0.67	3.19	0.72	3.42	0.56	3.31	0.66
聞くことの	J2	3.33	0.68	3.36	0.62	3.45	0.59	3.36	0.63	3.36	0.55	3.38	0.60
言語活動	J3	3.33	0.63	3.32	0.63	3.45	0.55	3.33	0.55	3.33	0.59	3.36	0.58
	J4	2.81	0.77	2.85	0.67	2.86	0.68	2.86	0.70	2.88	0.67	2.86	0.68
	J5	3.39	0.64	3.39	0.60	3.55	0.63	3.44	0.72	3.43	0.57	3.45	0.63
話すことの	J6	2.97	0.61	3.01	0.65	2.94	0.61	3.02	0.71	3.02	0.66	2.99	0.65
言語活動	J7	2.42	0.91	2.46	0.71	2.52	0.74	2.6	0.82	2.69	0.732.55	0.76	
	J8	2.53	0.84	2.63	0.66	2.54	0.8	2.6	0.88	2.46	0.742.55	0.77	
	J9	3.53	0.51	3.41	0.74	3.48	0.67	3.57	0.59	3.63	0.583.52	0.65	
読むことの言	J10	3.14	0.75	3.31	0.77	3.48	0.63	3.27	0.77	3.37	0.713.34	0.73	
語活動	J11	3.39	0.64	3.43	0.62	3.49	0.6	3.35	0.61	3.38	0.663.41	0.62	
	J12	2.78	0.77	2.72	0.79	2.94	0.74	2.77	0.77	2.86	0.712.82	0.75	
	J13	3.53	0.56	3.32	0.73	3.39	0.66	3.49	0.7	3.45	0.673.42	0.69	
書くことの言	J14	2.58	0.82	2.76	0.74	2.68	0.74	2.71	0.75	2.77	0.82.72	0.76	
語活動	J15	2.78	0.74	2.93	0.55	2.87	0.69	2.96	0.57	2.93	0.62.91	0.62	
	J16	2.72	0.64	2.69	0.67	2.64	0.73	2.65	0.67	2.77	0.72.69	0.68	

	J17	3.33	0.65	3.46	0.54	3.49	0.56	3.38	0.62	3.33	0.553.41	0.56
	J18	3.06	0.79	3.13	0.7	3.21	0.61	3.04	0.63	3.08	0.683.11	0.66
	J19	2.78	0.7	2.9	0.7	2.87	0.68	2.75	0.69	2.81	0.672.83	0.68
	J20	2.86	0.73	2.91	0.7	2.82	0.73	2.79	0.66	2.8	0.642.83	0.69
「教え方、内容の取扱い方」	J21	2.97	0.73	3.01	0.71	3.02	0.72	3.05	0.67	3	0.693.02	0.70
	J22	2.67	0.72	2.65	0.82	2.72	0.78	2.8	0.8	2.89	0.742.75	0.78
	J23	3.19	0.72	3.1	0.66	3.27	0.68	3.18	0.7	3.27	0.53.20	0.65
	J24	3.14	0.62	3.28	0.64	3.24	0.65	3.21	0.68	3.25	0.63.24	0.64
	J25	3.08	0.69	3.25	0.68	3.19	0.7	3.17	0.74	3.15	0.753.18	0.70
	J26	2.83	0.86	2.92	0.71	2.96	0.64	2.88	0.67	2.83	0.792.89	0.71
	J27	3.44	0.63	3.4	0.57	3.33	0.59	3.35	0.57	3.19	0.73.33	0.62
	J28	2.92	0.63	3.04	0.62	3.05	0.66	3.07	0.64	3.11	0.63.05	0.63
	J29	3.19	0.54	3.28	0.61	3.31	0.63	3.35	0.61	3.4	0.543.32	0.60
	J30	2.06	0.84	2.04	0.78	2.18	0.74	2.2	0.85	2.36	0.792.18	0.80
授業全般について考慮していること	J31	1.47	0.55	1.83	0.78	1.79	0.77	1.73	0.83	1.86	0.731.78	0.77
	J32	3	0.59	3.08	0.53	2.98	0.64	3.01	0.59	3.13	0.63.05	0.59
	J33	2.72	0.91	2.82	0.75	2.76	0.74	2.83	0.79	2.67	0.832.77	0.78
	J34	2.06	0.94	2.45	0.79	2.19	0.69	2.25	0.8	2.3	0.762.28	0.77
	J35	3.53	0.77	3.46	0.61	3.43	0.63	3.46	0.61	3.35	0.673.43	0.64
	J36	3.61	0.64	3.67	0.53	3.59	0.52	3.65	0.5	3.46	0.633.59	0.55
教材選定について考慮していること	J37	3	0.7	3.15	0.72	3	0.59	3.11	0.6	3.01	0.723.06	0.67
	J38	2.72	0.74	2.78	0.74	2.7	0.66	2.83	0.71	2.88	0.82.79	0.73
	J39	2.92	0.75	2.95	0.65	2.96	0.54	3.01	0.57	3.04	0.672.98	0.62

#### 4) 中学校教員の「研修参加経験」と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」

表4-4は、過去5年間に「何らかの教員研修に参加したことのある教員」と、「参加したことのない教員」の回答を比較したものであり、両者の違いは明らかである。J17「あいさつ、自己紹介、道案内など、特有の表現がよく使われる場面を取り上げた言語活動をさせる」を除いた全ての項目について、「研修を受けた教員」が「受けていない教員」よりも高い値を示している。教員研修が英語の教え方に与える影響の大きさがうかがわれる。

表 4-4: 中学校教員の研修参加経験と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

		教員研修参加歴なし(147名)		教員研修参加歴あり(245名)		全体の平均(392名)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
聞くことの言語活動	J1	3.25	0.71	3.34	0.64	3.31	0.66
	J2	3.34	0.61	3.40	0.59	3.38	0.60
	J3	3.24	0.56	3.43	0.58	3.36	0.58
	J4	2.75	0.67	2.93	0.68	2.86	0.68
話すことの言語活動	J5	3.35	0.69	3.51	0.59	3.45	0.63

	J6	2.93	0.68	3.03	0.63	2.99	0.65
	J7	2.51	0.74	2.58	0.77	2.55	0.76
	J8	2.40	0.73	2.64	0.78	2.55	0.77
読むことの言語活動	J9	3.45	0.70	3.56	0.62	3.52	0.65
	J10	3.26	0.78	3.39	0.69	3.34	0.73
	J11	3.35	0.66	3.44	0.60	3.41	0.62
	J12	2.68	0.69	2.89	0.78	2.82	0.75
	J13	3.39	0.75	3.44	0.65	3.42	0.69
書くことの言語活動	J14	2.64	0.76	2.76	0.76	2.72	0.76
	J15	2.76	0.64	2.99	0.59	2.91	0.62
	J16	2.61	0.69	2.74	0.68	2.69	0.68
	J17	3.44	0.54	3.40	0.58	3.41	0.56
「教え方、内容の取扱い方」	J18	3.01	0.69	3.17	0.64	3.11	0.66
	J19	2.65	0.67	2.94	0.67	2.83	0.68
	J20	2.67	0.67	2.93	0.68	2.83	0.69
	J21	2.93	0.66	3.07	0.72	3.02	0.70
	J22	2.65	0.75	2.82	0.79	2.75	0.78
	J23	3.14	0.61	3.24	0.67	3.20	0.65
	J24	3.22	0.65	3.25	0.65	3.24	0.64
	J25	3.08	0.67	3.24	0.71	3.18	0.70
	J26	2.85	0.72	2.92	0.71	2.89	0.71
	J27	3.33	0.60	3.33	0.63	3.33	0.62
	J28	3.01	0.67	3.08	0.61	3.05	0.63
授業全般について考慮していること	J29	3.27	0.60	3.36	0.61	3.32	0.60
	J30	2.18	0.81	2.19	0.80	2.18	0.80
	J31	1.73	0.79	1.80	0.77	1.78	0.77
	J32	2.98	0.61	3.09	0.58	3.05	0.59
	J33	2.76	0.79	2.77	0.79	2.77	0.78
	J34	2.12	0.73	2.37	0.78	2.28	0.77
	J35	3.37	0.66	3.47	0.62	3.43	0.64
	J36	3.53	0.54	3.64	0.56	3.59	0.55
	J37	3.03	0.71	3.07	0.64	3.06	0.67
教材選定について考慮していること	J38	2.72	0.77	2.84	0.70	2.79	0.73
	J39	2.94	0.65	3.01	0.60	2.98	0.62

##### 5) 中学校教員の「受験意識」と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」

表4-5は中学校教員の「受験に対する意識の高さ」と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係を示したものである。受験意識と教え方の関係では、受験意識が「高い」と回答した学校で教えている教員が全39項目中27項目について最も高い値を示している。また、「比較的高い」と答えている教員と

合わせると、35 項目において、受験を意識している学校の教員がそうでない学校の教員より高い値を示している。

表 4-5: 中学校教員の「受験意識」と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

		高い(22名)		比較的高い(209名)		比較的低い(132名)		低い(20名)		平均値(383名)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
	J1	3.45	0.74	3.29	0.65	3.33	0.65	3.10	0.91	3.31	0.66
聞くことの	J2	3.68	0.57	3.40	0.59	3.30	0.59	3.45	0.69	3.38	0.60
	J3	3.55	0.67	3.36	0.59	3.36	0.53	3.15	0.67	3.36	0.58
言語活動	J4	3.23	0.75	2.89	0.62	2.82	0.71	2.55	0.76	2.86	0.68
	J5	3.32	0.78	3.45	0.60	3.50	0.57	3.25	0.91	3.45	0.63
話すことの	J6	3.09	0.68	3.01	0.60	2.98	0.65	2.90	0.97	2.99	0.65
	J7	2.55	0.96	2.64	0.71	2.44	0.74	2.30	0.98	2.55	0.76
言語活動	J8	2.50	1.01	2.60	0.77	2.54	0.76	2.35	0.67	2.55	0.77
	J9	3.77	0.43	3.47	0.69	3.55	0.58	3.50	0.83	3.52	0.65
読むことの	J10	3.45	0.60	3.43	0.68	3.20	0.79	3.30	0.86	3.34	0.73
	J11	3.41	0.67	3.49	0.61	3.35	0.59	3.35	0.67	3.41	0.62
言語活動	J12	2.91	0.92	2.87	0.78	2.73	0.65	2.80	0.83	2.82	0.75
	J13	3.41	0.85	3.41	0.66	3.47	0.68	3.25	0.91	3.42	0.69
書くことの	J14	2.77	0.87	2.71	0.72	2.77	0.81	2.55	0.83	2.72	0.76
	J15	3.00	0.44	2.93	0.58	2.86	0.70	2.95	0.60	2.91	0.62
活動	J16	2.73	0.70	2.68	0.67	2.71	0.70	2.60	0.75	2.69	0.68
	J17	3.32	0.57	3.43	0.55	3.42	0.54	3.35	0.81	3.41	0.56
	J18	3.27	0.55	3.11	0.64	3.11	0.71	3.05	0.76	3.11	0.66
	J19	2.91	0.81	2.84	0.63	2.82	0.71	2.80	0.95	2.83	0.68
	J20	2.86	0.77	2.89	0.61	2.77	0.77	2.85	0.81	2.83	0.69
	J21	3.14	0.64	2.97	0.70	3.05	0.67	3.05	0.89	3.02	0.70
「教え方、内容 の取扱い方」	J22	2.82	0.85	2.72	0.79	2.75	0.75	3.00	0.86	2.75	0.78
	J23	3.41	0.67	3.21	0.67	3.18	0.60	3.00	0.73	3.20	0.65
	J24	3.36	0.73	3.23	0.66	3.22	0.61	3.20	0.70	3.24	0.64
	J25	3.36	0.73	3.17	0.68	3.17	0.67	3.05	1.00	3.18	0.70
	J26	3.05	0.72	2.86	0.68	2.97	0.74	2.70	0.86	2.89	0.71
	J27	3.55	0.51	3.35	0.59	3.27	0.60	3.30	0.98	3.33	0.62
	J28	3.32	0.78	3.09	0.62	3.01	0.62	2.75	0.64	3.05	0.63
	J29	3.50	0.60	3.36	0.62	3.25	0.58	3.20	0.62	3.32	0.60
授業全般につい て考慮している こと	J30	2.50	0.96	2.15	0.77	2.18	0.76	2.05	1.10	2.18	0.80
	J31	1.68	0.65	1.77	0.78	1.80	0.79	1.60	0.50	1.78	0.77
	J32	3.14	0.77	3.11	0.55	3.01	0.56	2.75	0.85	3.05	0.59
	J33	2.73	0.88	2.72	0.77	2.85	0.77	2.65	1.04	2.77	0.78

J34	2.09	0.87	2.35	0.77	2.26	0.73	2.00	0.92	2.28	0.77	
J35	3.45	0.60	3.47	0.61	3.43	0.66	3.25	0.72	3.43	0.64	
J36	3.68	0.48	3.64	0.51	3.57	0.56	3.30	0.92	3.59	0.55	
教材選定について 考慮していること	J37	3.50	0.60	3.08	0.61	3.02	0.71	2.80	0.70	3.06	0.67
J38	2.77	0.92	2.83	0.70	2.74	0.72	2.75	0.79	2.79	0.73	
J39	3.18	0.59	3.01	0.59	2.92	0.66	2.85	0.75	2.98	0.62	

## 5. 高等学校教員の教え方に関するアンケートの内容

高等学校英語教員が、実際にどのように英語を教えているかを調べるため、学習指導要領の内容を基に、次のアンケートを作成、実施した。中学校教員向けアンケートと同様、項目は大きく「教育内容」と「教育方法」に分かれる。前者は読み書き聞き話す、いわゆる4技能をどのように教えているかに関する項目であり、1(全く行っていない)、2(ほとんど行っていない)、3(時々行っている)、4(かなり頻繁に行っている)の4つの選択肢から選ぶよう依頼した。後者は「教育方法」、「教材選択」、「授業全般で配慮していること」に関する項目であり、1(全く配慮していない)、2(あまり配慮していない)、3(配慮している)、4(十分配慮している)の4つの選択肢から選んで答えるというものである。以下にアンケートの内容を示す。

なお、高等学校においては、学習指導要領移行期にあることに加え、「オーラル・コミュニケーション」や「リーディング」、「ライティング」など、科目により言語活動として取り扱う領域に差異があり、回答された教員の担当する科目により回答の仕方が異なる可能性があるため、特に領域間の活動状況の比較をする時など留意が必要であることを予め述べておく。

下記の項目について、高等学校の英語教員に、次の4段階評価で答えてもらった。

- |   |             |
|---|-------------|
| 1 | 全く行っていない    |
| 2 | ほとんど行っていない  |
| 3 | 時々行っている     |
| 4 | かなり頻繁に行っている |

### 主に、「聞くこと」と「話すこと」を指導している時

- H1. 英語を聞いて、その情報や話し手の意向(考え、意見、気持ち、感情など)などを理解させる。
- H2. 英語を聞いて、その情報の概要や要点を、サマリーを書くなどして、とらえさせる。
- H3. 英語を聞いて、その情報や話し手の意向について質問したり、感想を言わせる。
- H4. 身近な話題について英語で情報を伝えたり会話をさせる。
- H5. まとまりのある英語を聞いて、必要に応じメモを取るなどしながら、その概要や要点をとらえさせる。
- H6. 自分が考えていることなどについての考えをまとめ、簡単なスピーチ等の発表をさせる。
- H7. 読んだ内容に関して聞き話す活動をさせる。
- H8. 聞き取った内容に対して自分の思いや考えなどを整理して、英語で書いたり話したりさせる。
- H9. 聞き取った内容に対して自分の思いや考えなどを整理して、日本語で書いたり話したりさせる。
- H10. 幅広い話題について話し合ったり(問題点や原因などを考え、意見交換する)、討論したり(賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する)させる。
- H11. 発表や話し合い、討論などの活動に必要な表現やルールを学習し、活用させる。

- H12.リズムやイントネーションなど、英語の音声的な特徴に注意しながら発音を練習させる。
- H13.伝えようとする情報や考えなどを整理し、ジェスチャー、スピードなどを工夫して効果的に発表させる。
- H14.モデルをもとにするなどして、スキット、ロールプレイなどを創作し、演じさせる。
- H15.聞いたり読んだりして得た情報をまとめ、発表させる。
- H16.関心のあることについて相手に質問させたり、相手の質問に答えさせたりする。
- H17.オーラル・コミュニケーション活動に必要な基本的な文型や文法事項などについて説明し、理解させる。
- H18.オーラル・コミュニケーション活動に必要な基本的な文型や文法事項などを使った練習をさせる。
- H19.聞き取った内容に対して簡単な言葉で返答したり、ジェスチャーなどの非言語的手段で答えたりして反応させる。
- H20.自分や聞き手の置かれた状況を考慮し、伝える目的を考えながら伝えさせる。
- H21.実際の言語使用場面を反映させた、複数の領域にまたがる総合的な活動を設定して練習を行わせる。  
(たとえば買い物の場面で聞いた話を書きとめ、別の人に音声あるいは文字で伝えたり、新聞で読んだ内容について意見をまとめ、音声あるいは文字で発表するなど。)
- H22.言語材料の分析や説明は必要最小限にとどめ、実際の場面でのどのように使われるかを理解し、実際に使えることに重点を置いた活動をさせる。
- H23.中学校における指導内容との関連を考慮した上で、音声によるコミュニケーション能力を重視した活動を行わせる。
- H24.聞くこと及び話すことに加え、読むこと及び書くことを含めた4つの領域の言語活動を総合的、有機的に関連させた練習をさせる。

#### 主に、「書くこと」を教えている時

- H25.聞いた内容について、概要や要点を書かせる。
- H26.読んだ内容について、概要や要点を書かせる。
- H27.聞いた内容について、自分の考えなどを整理して書かせる。
- H28.読んだ内容について、自分の考えなどを整理して書かせる。
- H29.聞いたことや話そうとすることと関連づけて書かせる。
- H30.自分が伝えようとする内容を整理して書かせる。
- H31.自分の伝えようとする内容について、整理して、場面や目的に応じて、読み手が理解できるように書かせる。
- H32.話されたり、読まれたりする文を書き取らせる。
- H33.考えや気持ちを伝えるのに必要な語句を教え、活用させる。
- H34.文章の構成や展開に留意しながら書かせる。
- H35.文法や語法について正しく書くことに留意して書かせる。
- H36.場面やことばの働きを設定して書かせる。(たとえば学級通信用の修学旅行の記事、求人広告を読んで不明な点を問い合わせる手紙、自己紹介を含む履歴書など)
- H37.より豊かな内容で書けるように、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導をする。
- H38.より適切な構成や言語形式で書けるように、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導をする。

#### 主に、「読むこと」を教えている時

- H39.読んだ内容について、必要な特定情報を読み取らせる。
- H40.まとまりのある英語を読んで、その内容について、概要や要点を英語でまとめさせる。
- H41.まとまりのある英語を読んで、その内容について、概要や要点を日本語でまとめさせる。



- H42. 読んだ内容について、書き手の意向(考え、意見、気持ち、感情など)を理解し、自分の考え、感想などを英語でまとめさせる。
- H43. 読んだ内容について、書き手の意向(考え、意見、気持ち、感情など)を理解し、自分の考え、感想などを日本語でまとめさせる。
- H44. 読んだ内容について、英語で質問に答えさせる。
- H45. 読んだ内容について、日本語で質問に答えさせる。
- H46. 文章の内容や自分の解釈が聞き手に伝わるように音読させる。
- H47. 未知の語の意味や文法の知識を活用して推測したり、背景となる知識を活用したりしながら読ませる。
- H48. 文章の中でポイントとなる語句や文、段落の構成や展開などに注意して読ませる。
- H49. 目的や状況に応じて、速読や精読など、適切な読み方をさせる。
- H50. 英文和訳をさせる。
- H51. 語句の解説をする。
- H52. 文型・文法の解説をする。
- H53. 教科書以外の読み物を楽しみのために多読させる。

以下の項目については次の4段階評価で答えてもらった。

1	全く配慮していない
2	あまり配慮していない
3	配慮している
4	十分配慮している

**教え方、内容の扱い方(科目を問わず、教える際に考慮していること)**

- H54. 生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を整理して教える。
- H55. 生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を用い、多様な場面での言語使用の経験をさせながらそれらの習熟することを図る。
- H56. 場面や目的に応じて、主体的に英語を聞いたり、話したり、読んだり、書いたりして自発的にコミュニケーションに取り組むように指導する。
- H57. 家庭生活や学校生活の中で生徒の興味・関心の対象となる日常的で身近な話題を取り上げる。
- H58. 学習成果の成果を活用して、教室の内外において積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。  
(たとえば、インターネットや電子メールを利用する、英語の本や新聞をよむ、地域の外国人(英語圏に限らない)と英語でコミュニケーションを図る、英語キャンプ・交流・英語ユースフォーラムに参加する、海外研修旅行、ホームステイに参加する、英語部に参加する、など)
- H59. 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育む。
- H60. 世界や我が国の生活や文化についての理解を深めさせるとともに、言語や文化に対する関心を高めさせ、これらを尊重する態度を育む。
- H61. 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養う。
- H62. 音声指導の補助として、発音表記を用いた指導。
- H63. 辞書などを効果的に利用しながら、自ら外国語を理解し、外国語を使おうとする積極的な態度を育む。
- H64. ティーム・ティーチングやペア・ワーク、グループ・ワークなどを適宜取り入れた指導。
- H65. 視聴覚教材や、LL、コンピュータ、情報通信ネットワークなどを生かした指導。

H66. ネイティブスピーカーなどの協力を得て行う授業を積極的に取り入れる。

## 5. 高等学校教員の「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」に関する回答の結果

### 1) 全体の傾向

表5-1に結果を示した。まず、「聞くこと」と「話すこと」の指導に関しては、H10「幅広い話題について話し合ったり(問題点や原因などを考え、意見交換する)、討論したり(賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する)させる」(1.70)、あるいは H11「発表や話し合い、討論などの活動に必要な表現やルールを学習し、活用させる」(1.76) など、英語を使って発表させたり討論させたりするといった活動に関しては数値が比較的低い。一方、H1「英語を聞いて、その情報や話し手の意向(考え、意見、気持ち、感情など)などを理解させる」(3.12)というオーラル・コミュニケーションの基本的な活動はある程度行われているものの、H12「リズムやイントネーションなど、英語の音声的な特徴に注意しながら発音を練習させる」(3.33)、H17「オーラル・コミュニケーション活動に必要な基本的な文型や文法事項などについて説明し、理解させる」(3.38)、H18「オーラル・コミュニケーション活動に必要な基本的な文型や文法事項などを使った練習をさせる」(3.27)、という、コミュニケーション自体よりも、その基となる言語形式的側面が重視されていることが分かる。

「書くこと」の指導には、項目間にあまり差はないが、調査領域の中で、全体として、値が最も低い。興味深い点として、H25「聞いた内容について、概要や要点を書かせる」(2.02)やH27「聞いた内容について、自分の考えなどを整理して書かせる」(1.89)に見られるように、「聞いた内容」について生徒が概要や要点、自らの考えを書く活動は比較的なされていないことが分かる。逆に、H33「考えや気持ちを伝えるのに必要な語句を教え、活用させる」(3.03)やH35「文法や語法について正しく書くことに留意して書かせる」(2.98)というように、文章の構成や展開より書くための語句や文法など言語形式の指導に重きが置かれていることが分かる。

「読むこと」の指導は、他の技能と比べると、全体的に数値が高いといえる。しかし、中でも、H39「読んだ内容について、必要な特定情報を読み取らせる」(3.33)、H45「読んだ内容について、日本語で質問に答えさせる」(3.37)などの値が高いが、逆に、H40「まとまりのある英語を読んで、その内容について、概要や要点を英語でまとめさせる」(2.10)やH42「読んだ内容について、書き手の意向を理解し、自分の考え、感想などを英語でまとめさせる」(1.84)というように、読んだ上で概要や感想などを英語でまとめる、という活動は比較的値が低い。他方、指導上の取扱い的な項目に関してみると、H50「英文和訳をさせる」(3.56)、H51「語句の解説をする」(3.70)、H52「文型・文法の解説をする」(3.56)という、文法訳読、言語形式的側面が高い値を示しているが、一方、H47「未知の語の意味や文法の知識を活用して推測したり、背景となる知識を活用したりしながら読ませる」(3.06)やH48「文章の中でポイントとなる語句や文、段落の構成や展開などに注意して読ませる」(3.29)といったトップダウン的な読み方の工夫もみられることが分かる。

また、教え方全般、および内容の取り扱いについては、H54「生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を整理して教える」(3.38)、H57「家庭生活や学校生活の中で生徒の興味・関心の対象となる日常的で身近な話題を取り上げる」(3.24)、H60「世界や我が国の生活や文化についての理解を深めさせるとともに、言語や文化に対する関心を高めさせ、これらを尊重する態度を育む」(3.25)、H64「ティーム・ティーチングやペア・ワーク、グループ・ワークなどを適宜取り入れた指導」(3.30)、H66「ネイティブスピーカーなどの協力を得て行う授業を積極的に取り入れる」(3.25)などを考慮している教師が多いことが分かる。

表5-1: 高等学校教員の「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」に関する回答の結果

		全般的な傾向 1 全く行っていない 2 ほとんど行っていない 3 時々行っている 4 かなり頻繁に行っている										
		平均	標準偏差	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
	H1	3.12	0.76	15	3.9%	44	11.4%	210	54.4%	117	30.3%	
	H2	2.14	0.80	92	23.8%	165	42.7%	119	30.8%	10	2.6%	
	H3	2.59	0.84	44	11.4%	114	29.5%	187	48.4%	41	10.6%	
	H4	2.76	0.83	32	8.3%	95	24.6%	193	50.0%	66	17.1%	
	H5	2.34	0.87	74	19.2%	143	37.0%	141	36.5%	28	7.3%	
	H6	2.18	0.90	106	27.5%	131	33.9%	128	33.2%	21	5.4%	
	H7	2.19	0.94	105	27.2%	146	37.8%	98	25.4%	37	9.6%	
	H8	1.98	0.84	131	33.9%	147	38.1%	99	25.6%	9	2.3%	
	H9	2.30	0.85	77	19.9%	135	35.0%	154	39.9%	20	5.2%	
	H10	1.70	0.83	197	51.0%	124	32.1%	53	13.7%	12	3.1%	
主に、「聞くこと」と「話すこと」を指導している時	H11	1.76	0.84	181	46.9%	132	34.2%	59	15.3%	14	3.6%	
	H12	3.33	0.76	13	3.4%	28	7.3%	161	41.7%	184	47.7%	
	H13	2.01	0.85	122	31.6%	156	40.4%	92	23.8%	16	4.1%	
	H14	2.31	1.02	114	29.5%	89	23.1%	135	35.0%	48	12.4%	
	H15	2.04	0.87	124	32.1%	142	36.8%	105	27.2%	15	3.9%	
	H16	2.60	0.89	58	15.0%	93	24.1%	184	47.7%	51	13.2%	
	H17	3.38	0.70	5	1.3%	31	8.0%	160	41.5%	190	49.2%	
	H18	3.27	0.75	8	2.1%	43	11.1%	170	44.0%	165	42.7%	
	H19	2.89	0.86	28	7.3%	82	21.2%	183	47.4%	93	24.1%	
	H20	2.27	0.86	76	19.7%	164	42.5%	120	31.1%	26	6.7%	
	H21	1.97	0.92	147	38.1%	136	35.2%	79	20.5%	24	6.2%	
	H22	2.71	0.88	39	10.1%	105	27.2%	172	44.6%	70	18.1%	
	H23	2.68	0.84	34	8.8%	118	30.6%	178	46.1%	56	14.5%	
	H24	2.69	0.88	39	10.1%	115	29.8%	166	43.0%	66	17.1%	
	H25	2.02	0.86	124	32.1%	148	38.3%	100	25.9%	14	3.6%	
	H26	2.33	0.90	88	22.8%	113	29.3%	157	40.7%	28	7.3%	
	H27	1.89	0.79	137	35.5%	163	42.2%	77	19.9%	9	2.3%	
	H28	2.20	0.91	109	28.2%	123	31.9%	130	33.7%	24	6.2%	
	H29	2.12	0.89	116	30.1%	136	35.2%	116	30.1%	18	4.7%	
主に、「書くこと」を教えている時	H30	2.50	0.94	77	19.9%	90	23.3%	172	44.6%	47	12.2%	
	H31	2.22	0.93	110	28.5%	121	31.3%	125	32.4%	30	7.8%	
	H32	2.65	0.86	46	11.9%	93	24.1%	197	51.0%	50	13.0%	
	H33	3.03	0.78	20	5.2%	51	13.2%	214	55.4%	101	26.2%	
	H34	2.40	0.98	85	22.0%	124	32.1%	123	31.9%	54	14.0%	
	H35	2.98	0.87	28	7.3%	64	16.6%	185	47.9%	109	28.2%	
	H36	2.07	0.89	119	30.8%	150	38.9%	94	24.4%	23	6.0%	
	H37	2.19	0.93	104	26.9%	145	37.6%	103	26.7%	34	8.8%	
	H38	2.21	0.94	104	26.9%	143	37.0%	100	25.9%	39	10.1%	
		H39	3.33	0.83	21	5.4%	28	7.3%	144	37.3%	193	50.0%
		H40	2.10	0.94	125	32.4%	134	34.7%	94	24.4%	33	8.5%
		H41	2.84	0.86	31	8.0%	83	21.5%	185	47.9%	87	22.5%
		H42	1.84	0.81	154	39.9%	154	39.9%	67	17.4%	11	2.8%
		H43	2.51	0.90	62	16.1%	112	29.0%	166	43.0%	46	11.9%
	H44	2.99	0.88	31	8.0%	63	16.3%	177	45.9%	115	29.8%	
主に、「読むこと」を教えている時	H45	3.37	0.67	3	0.8%	25	6.5%	173	44.8%	185	47.9%	
	H46	2.95	0.89	25	6.5%	91	23.6%	158	40.9%	112	29.0%	
	H47	3.06	0.88	26	6.7%	65	16.8%	161	41.7%	134	34.7%	
	H48	3.29	0.79	10	2.6%	48	12.4%	153	39.6%	175	45.3%	
	H49	2.86	0.99	46	11.9%	91	23.6%	131	33.9%	118	30.6%	
	H50	3.56	0.68	6	1.6%	20	5.2%	111	28.8%	249	64.5%	
	H51	3.70	0.54	1	0.3%	11	2.8%	92	23.8%	282	73.1%	
	H52	3.54	0.63	1	0.3%	24	6.2%	124	32.1%	237	61.4%	
	H53	2.46	0.92	66	17.1%	132	34.2%	140	36.3%	48	12.4%	

		全般的な傾向									
		1全く配慮していない		2あまり配慮していない		3配慮している		4十分配慮している			
		平均	標準偏差	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
	H54	3.38	0.72	5	1.3%	35	9.1%	154	39.9%	192	49.7%
	H55	3.00	0.79	10	2.6%	85	22.0%	185	47.9%	106	27.5%
	H56	2.77	0.73	14	3.6%	114	29.5%	208	53.9%	50	13.0%
	H57	3.24	0.67	3	0.8%	38	9.8%	210	54.4%	135	35.0%
	H58	2.68	0.84	28	7.3%	130	33.7%	168	43.5%	60	15.5%
教え方、内容の扱い方	H59	3.08	0.73	10	2.6%	56	14.5%	218	56.5%	102	26.4%
(科目を問わず、教える	H60	3.25	0.66	2	0.5%	38	9.8%	214	55.4%	132	34.2%
際に考慮していること)	H61	3.02	0.75	8	2.1%	77	19.9%	205	53.1%	96	24.9%
	H62	2.46	0.86	51	13.2%	147	38.1%	146	37.8%	42	10.9%
	H63	2.97	0.76	10	2.6%	87	22.5%	195	50.5%	94	24.4%
	H64	3.30	0.77	9	2.3%	42	10.9%	161	41.7%	174	45.1%
	H65	2.64	0.87	35	9.1%	137	35.5%	147	38.1%	67	17.4%
	H66	3.25	0.83	14	3.6%	46	11.9%	155	40.2%	171	44.3%

## 2) 高等学校教員の年齢と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

表5-2: 高等学校教員の年齢と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

		20代(49名)		30代(150名)		40代(129名)		50代(57名)		全体の平均(385名)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
	H1	2.98	0.99	3.11	0.76	3.17	0.69	3.09	0.63	3.12	0.76
	H2	1.80	0.82	2.09	0.79	2.23	0.79	2.25	0.79	2.14	0.80
	H3	2.41	0.91	2.54	0.86	2.65	0.74	2.68	0.85	2.59	0.84
	H4	2.76	0.92	2.75	0.88	2.85	0.77	2.58	0.73	2.76	0.83
	H5	2.18	0.95	2.27	0.90	2.46	0.85	2.25	0.71	2.34	0.87
	H6	1.98	0.97	2.17	0.91	2.23	0.89	2.19	0.79	2.18	0.90
	H7	1.96	0.93	2.11	0.99	2.34	0.90	2.16	0.86	2.19	0.94
	H8	1.73	0.76	1.91	0.82	2.09	0.85	2.02	0.83	1.98	0.84
主に、「聞くこと」と	H9	2.24	0.88	2.31	0.88	2.31	0.84	2.32	0.78	2.30	0.85
「話すこと」を指導	H10	1.57	0.79	1.71	0.84	1.74	0.88	1.61	0.65	1.70	0.83
している時	H11	1.59	0.79	1.78	0.87	1.87	0.89	1.58	0.68	1.76	0.84
	H12	3.29	0.87	3.36	0.73	3.33	0.76	3.35	0.74	3.33	0.76
	H13	2.00	0.89	1.93	0.89	2.09	0.83	2.00	0.76	2.01	0.85
	H14	2.39	1.17	2.33	1.06	2.29	0.96	2.19	0.97	2.31	1.02
	H15	1.94	0.83	1.96	0.87	2.12	0.88	2.07	0.86	2.04	0.87
	H16	2.51	0.96	2.55	0.95	2.67	0.87	2.58	0.80	2.60	0.89
	H17	3.45	0.74	3.32	0.77	3.51	0.60	3.23	0.57	3.38	0.70
	H18	3.39	0.73	3.22	0.83	3.34	0.68	3.18	0.63	3.27	0.75
	H19	2.78	0.92	2.91	0.87	2.96	0.82	2.72	0.84	2.89	0.86

	H20	2.43	0.96	2.24	0.82	2.26	0.85	2.09	0.81	2.27	0.86
	H21	1.76	0.83	1.89	0.90	2.13	0.96	1.82	0.87	1.97	0.92
	H22	2.67	0.90	2.67	0.93	2.80	0.83	2.63	0.84	2.71	0.88
	H23	2.49	0.82	2.66	0.91	2.66	0.78	2.82	0.73	2.68	0.84
	H24	2.59	0.93	2.61	0.91	2.74	0.84	2.72	0.82	2.69	0.88
	H25	2.04	0.96	2.00	0.82	2.04	0.85	1.91	0.83	2.02	0.86
	H26	2.33	0.94	2.37	0.91	2.37	0.91	2.07	0.82	2.33	0.90
	H27	1.71	0.71	1.89	0.78	1.95	0.83	1.88	0.80	1.89	0.79
	H28	1.98	0.90	2.20	0.89	2.26	0.92	2.07	0.94	2.20	0.91
	H29	2.08	0.91	2.08	0.90	2.15	0.87	1.98	0.83	2.12	0.89
	H30	2.43	0.96	2.51	1.00	2.60	0.84	2.21	0.96	2.50	0.94
主に、「書くこと」を 教えている時	H31	1.98	0.92	2.19	0.94	2.34	0.91	2.02	0.95	2.22	0.93
	H32	2.63	0.93	2.63	0.91	2.67	0.79	2.67	0.79	2.65	0.86
	H33	2.92	0.84	2.98	0.82	3.10	0.73	3.05	0.69	3.03	0.78
	H34	2.29	1.06	2.26	0.97	2.58	1.00	2.28	0.82	2.40	0.98
	H35	2.86	0.84	2.89	0.91	3.11	0.82	2.96	0.80	2.98	0.87
	H36	2.00	0.87	1.98	0.88	2.18	0.93	2.00	0.82	2.07	0.89
	H37	2.08	0.91	2.17	0.97	2.26	0.90	2.05	0.87	2.19	0.93
	H38	2.04	0.91	2.16	0.98	2.33	0.93	2.07	0.88	2.21	0.94
	H39	3.53	0.65	3.33	0.78	3.33	0.89	3.05	0.91	3.33	0.83
	H40	1.92	0.93	2.09	0.98	2.16	0.96	2.05	0.85	2.10	0.94
	H41	2.82	0.81	2.85	0.93	2.91	0.79	2.72	0.88	2.84	0.86
	H42	1.67	0.72	1.81	0.80	1.86	0.84	1.93	0.86	1.84	0.81
	H43	2.41	0.91	2.48	0.92	2.60	0.87	2.44	0.91	2.51	0.90
	H44	2.88	0.97	3.06	0.88	2.92	0.86	2.93	0.86	2.99	0.88
主に、「読むこと」を 教えている時	H45	3.45	0.61	3.45	0.65	3.42	0.65	3.16	0.62	3.37	0.67
	H46	2.88	0.90	2.85	0.93	3.00	0.88	2.96	0.76	2.95	0.89
	H47	3.02	0.83	3.10	0.85	3.02	0.95	2.95	0.89	3.06	0.88
	H48	3.31	0.71	3.22	0.82	3.29	0.81	3.37	0.64	3.29	0.79
	H49	2.65	0.93	2.81	1.01	2.91	1.02	2.82	0.95	2.86	0.99
	H50	3.55	0.71	3.57	0.70	3.57	0.62	3.53	0.66	3.56	0.68
	H51	3.59	0.54	3.67	0.59	3.74	0.47	3.74	0.52	3.70	0.54
	H52	3.49	0.58	3.53	0.64	3.63	0.57	3.47	0.71	3.54	0.63
	H53	2.51	0.84	2.39	0.91	2.47	0.94	2.44	0.95	2.46	0.92
	H54	3.37	0.73	3.41	0.67	3.31	0.73	3.46	0.73	3.38	0.72
教え方、内容の扱 い方 (科目を問わず、教 える際に考慮して いること)	H55	2.90	0.82	3.05	0.79	2.99	0.73	2.98	0.79	3.00	0.79
	H56	2.88	0.78	2.78	0.72	2.76	0.66	2.60	0.75	2.77	0.73
	H57	3.16	0.69	3.25	0.63	3.27	0.66	3.18	0.66	3.24	0.67
	H58	2.49	0.82	2.66	0.86	2.74	0.79	2.74	0.81	2.68	0.84
	H59	2.96	0.71	3.00	0.72	3.16	0.72	3.12	0.66	3.08	0.73
	H60	3.10	0.62	3.20	0.62	3.27	0.66	3.33	0.64	3.25	0.66

H61	2.73	0.67	2.99	0.70	3.04	0.77	3.19	0.69	3.02	0.75
H62	2.35	0.83	2.47	0.86	2.43	0.85	2.65	0.88	2.46	0.86
H63	2.80	0.76	2.93	0.80	3.07	0.72	2.98	0.72	2.97	0.76
H64	3.20	0.79	3.37	0.68	3.34	0.78	3.09	0.83	3.30	0.77
H65	2.55	1.00	2.65	0.90	2.70	0.81	2.56	0.85	2.64	0.87
H66	3.18	0.81	3.29	0.77	3.30	0.82	3.07	0.84	3.25	0.83

全体としてはさほど大きな違いは見られない。しかし、全 66 項目中 43 項目で、40 代の教員の値が一番高く、38 項目で、20 代の教員が最も低い値を示していることは注目に値しよう。これは、年齢が高くなるほどそれぞれの項目を教える頻度が高いと答えている傾向を示している。

「聞くこと」と「話すこと」の指導についてまず目に付くのは、24 項目中 16 項目で、40 代の教員の値が一番高く、15 項目で 20 代の教員が最も低い値を示していることである。この結果より、年齢の高い教員ほどオーラル面の指導をしていると意識しているようである。また、内容的には、H2「英語を聞いて、その情報の概要や要点を、サマリーを書くなどして、とらえさせる」、H8「聞き取った内容に対して自分の思いや考えなどを整理して、英語で書いたり話したりさせる」で 20 代の教員が他の年代より低い値を示していることがあげられる。他方、H18「オーラル・コミュニケーション活動に必要となる基本的な文型や文法事項などを使った練習をさせる」H20「自分や聞き手の置かれた状況を考慮し、伝える目的を考えながら伝えさせる」で 20 代の教員が最も高い値を示している。

「書くこと」の指導については、全ての項目(14 項目)において、40 代教員が最も高い値を示していることが特徴と言えよう。しかし、内容的には年齢による違いはあまりみられない。

「読むこと」の指導については、全 15 項目のうち 8 項目で 40 代教員の答えが最も高かった。オーラル活動や書くことの指導と比べると読むことの指導は全体的に値が高く、一つの年齢層に偏った答え方が見られない。それだけ、読むという言語活動が、4 技能の内が一番良く行われている、ということを示唆しているのかもしれない。細かく見ていくと、やはり年齢による違いはあまり見られないが、H39「読んだ内容について、必要な特定情報を読み取らせる」で、20 代の教員が他の年代と比べ最も高い値を示している。

教え方や内容の扱い方を見ると、年齢による違いはあまりないようであるが、H56「場面や目的に応じて、主体的に英語を聞いたり、話したり、読んだり、書いたりして自発的にコミュニケーションに取り組むように指導する」で 20 代の教員の値が最も高い傾向が見られる。

### 3) 高等学校教員の「教員歴」と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

全体としては、全 66 項目中 39 項目で、教員歴 15 年から 20 年のグループの値が一番高く、また、全項目中 45 項目で、5年以下の教員の値が最も低くなっている。

「聞くこと」と「話すこと」の指導については、教育歴 15 年から 20 年のグループが、24 項目中 15 項目において最も高い値を示していると同時に、教育歴 5 年以下の教員は、24 項目中 17 項目で最も低い値をつけている。特記する点として、H21「実際の言語使用場面を反映させた、複数の領域にまたがる総合的な活動を設定して練習を行わせる」について教員歴による値に開きが見られることがあげられよう。

次に、「書くこと」の指導でも、教育歴 15 年から 20 年の人が 14 項目中 11 項目において最も高い値を付し、5 年以下の教員は、14 項目中 13 項目で最も低い値を示していることは注目に値し、書くことの指導は経験により深まっていく側面があることが伺えよう。細かく見てみると、内容的には教員歴による違いはあまりないが、H36「場面やことばの働きを設定して書かせる」については教員歴による数値に開きが見られる。

「読むこと」の指導では、5 年以下の経歴の教員が、15 項目中 8 項目で他に比べ最も低い値を示している。細

かくみると、教育経験 5 年以下の教師が最も高い値を示している項目が一つあり、それは、H50「英文和訳をさせる」(3.65)、である。しかし、全体として、「読むこと」の指導は、どのグループの人も、他の技能と比べて比較的高い値を示している。

教え方および内容の扱いにおいて、考慮していること、という観点からも、教歴 15 年から 20 年の教員の値が最も高い項目が 13 項目中 7 項目あることが分かる。一方、5 年以下の教歴の教師は、13 項目中、8 項目で最も低い値を示している。しかし、教歴の違いによる差は、年齢による違いと同様の傾向であり、その差もそれほど大きくない。

表5-3: 高等学校教員の「教員歴」と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

	5 年以下(48 名)		6-10 年(78 名)		11-15 年(72 名)		16-20 年(84 名)		20 年以上(104 名)		平均値(386 名)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
H1	3.02	0.98	3.14	0.78	3.07	0.78	3.23	0.65	3.07	0.66	3.12	0.76
H2	1.79	0.85	2.18	0.79	2.01	0.76	2.20	0.76	2.24	0.81	2.14	0.80
H3	2.38	0.87	2.63	0.85	2.47	0.90	2.70	0.74	2.63	0.79	2.59	0.84
H4	2.75	0.91	2.73	0.89	2.83	0.92	2.93	0.67	2.60	0.78	2.76	0.83
H5	2.08	0.87	2.26	0.92	2.35	0.91	2.45	0.83	2.35	0.81	2.34	0.87
H6	1.98	0.98	2.19	0.90	2.14	0.89	2.31	0.88	2.13	0.86	2.18	0.90
H7	1.92	0.96	2.21	0.94	2.14	1.00	2.30	0.99	2.19	0.83	2.19	0.94
H8	1.69	0.78	1.91	0.76	2.07	0.88	2.07	0.90	1.97	0.79	1.98	0.84
H9	2.21	0.90	2.38	0.89	2.38	0.88	2.27	0.81	2.26	0.80	2.30	0.85
H10	1.48	0.77	1.71	0.81	1.81	0.85	1.69	0.89	1.69	0.78	1.70	0.83
H11	1.46	0.71	1.81	0.91	1.85	0.82	1.92	0.91	1.66	0.77	1.76	0.84
H12	3.19	0.87	3.41	0.73	3.33	0.77	3.43	0.73	3.28	0.73	3.33	0.76
H13	1.96	0.85	2.00	0.88	1.96	0.94	2.08	0.87	2.00	0.75	2.01	0.85
H14	2.13	1.08	2.51	1.13	2.35	1.04	2.50	0.96	2.04	0.90	2.31	1.02
H15	1.81	0.76	2.10	0.85	1.93	0.89	2.13	0.93	2.06	0.85	2.04	0.87
H16	2.35	1.00	2.67	0.89	2.57	0.92	2.65	0.91	2.61	0.83	2.60	0.89
H17	3.35	0.81	3.37	0.76	3.40	0.73	3.49	0.63	3.32	0.60	3.38	0.70
H18	3.33	0.78	3.40	0.71	3.19	0.85	3.26	0.81	3.22	0.59	3.27	0.75
H19	2.92	0.90	2.88	0.84	2.88	0.87	2.95	0.85	2.82	0.86	2.89	0.86
H20	2.46	0.92	2.21	0.81	2.26	0.89	2.24	0.87	2.18	0.79	2.27	0.86
H21	1.60	0.68	1.91	0.87	1.99	1.00	2.18	0.98	1.92	0.88	1.97	0.92
H22	2.65	0.91	2.71	0.88	2.69	0.99	2.87	0.80	2.62	0.84	2.71	0.88
H23	2.56	0.82	2.65	0.87	2.74	0.93	2.65	0.81	2.67	0.76	2.68	0.84
H24	2.48	0.92	2.68	0.89	2.72	0.91	2.68	0.89	2.71	0.81	2.69	0.88
H25	1.92	0.96	2.04	0.76	2.03	0.89	2.06	0.86	1.98	0.85	2.02	0.86
H26	2.19	0.98	2.35	0.87	2.38	0.93	2.44	0.90	2.24	0.90	2.33	0.90
H27	1.65	0.73	1.90	0.73	2.03	0.87	1.94	0.86	1.87	0.76	1.89	0.79
H28	1.90	0.88	2.22	0.89	2.25	0.93	2.31	0.93	2.13	0.91	2.20	0.91
H29	1.96	0.85	2.13	0.87	2.08	0.98	2.25	0.88	2.01	0.84	2.12	0.89
H30	2.38	0.94	2.46	0.99	2.60	1.04	2.68	0.84	2.34	0.91	2.50	0.94

	H31	2.02	0.93	2.15	0.95	2.26	0.95	2.40	0.93	2.09	0.91	2.22	0.93
	H32	2.50	0.92	2.74	0.81	2.60	0.88	2.67	0.90	2.67	0.79	2.65	0.86
	H33	2.81	0.94	3.03	0.76	3.06	0.79	3.07	0.80	3.07	0.67	3.03	0.78
	H34	2.19	1.08	2.29	0.95	2.33	0.99	2.56	1.02	2.41	0.89	2.40	0.98
	H35	2.81	0.94	2.90	0.85	2.99	0.93	3.08	0.85	3.00	0.79	2.98	0.87
	H36	1.77	0.83	2.06	0.84	2.01	0.94	2.13	0.93	2.14	0.86	2.07	0.89
	H37	2.04	0.90	2.21	1.01	2.18	0.98	2.27	0.91	2.13	0.86	2.19	0.93
	H38	1.98	0.84	2.21	1.01	2.19	1.03	2.31	0.96	2.18	0.88	2.21	0.94
	H39	3.40	0.79	3.44	0.73	3.19	0.85	3.44	0.83	3.18	0.89	3.33	0.83
	H40	1.85	0.92	2.03	0.95	2.19	1.00	2.18	0.93	2.11	0.93	2.10	0.94
	H41	2.73	0.87	2.97	0.88	2.78	0.92	2.90	0.86	2.82	0.80	2.84	0.86
	H42	1.71	0.71	1.79	0.81	1.90	0.86	1.85	0.78	1.86	0.85	1.84	0.81
	H43	2.27	0.89	2.69	0.89	2.36	1.00	2.51	0.83	2.58	0.88	2.51	0.90
	H44	2.88	1.02	2.92	0.92	3.13	0.82	3.11	0.86	2.85	0.83	2.99	0.88
主に、「読むこと」を 教えている時	H45	3.40	0.74	3.45	0.60	3.49	0.60	3.44	0.66	3.27	0.64	3.37	0.67
	H46	2.79	0.92	2.86	0.89	2.94	0.93	2.94	0.92	3.01	0.79	2.95	0.89
	H47	2.88	0.91	3.09	0.86	3.00	0.93	3.19	0.88	3.00	0.86	3.06	0.88
	H48	3.23	0.83	3.18	0.82	3.21	0.85	3.42	0.71	3.31	0.71	3.29	0.79
	H49	2.44	0.94	2.83	1.04	2.79	1.05	2.96	0.99	2.93	0.93	2.86	0.99
	H50	3.65	0.64	3.54	0.66	3.51	0.79	3.63	0.53	3.52	0.70	3.56	0.68
	H51	3.67	0.52	3.72	0.45	3.61	0.64	3.75	0.51	3.71	0.53	3.70	0.54
	H52	3.52	0.58	3.47	0.64	3.60	0.62	3.61	0.58	3.53	0.67	3.54	0.63
	H53	2.35	0.93	2.35	0.88	2.46	0.87	2.45	1.02	2.53	0.88	2.46	0.92
		H54	3.40	0.68	3.50	0.62	3.36	0.72	3.29	0.69	3.38	0.78	3.38
	H55	2.85	0.87	3.19	0.65	3.04	0.76	2.93	0.76	2.96	0.82	3.00	0.79
	H56	2.73	0.82	2.88	0.66	2.78	0.75	2.79	0.66	2.65	0.72	2.77	0.73
	H57	3.19	0.70	3.22	0.60	3.35	0.65	3.17	0.69	3.25	0.63	3.24	0.67
教え方、内容の扱 い方 (科目を問わず、教 える際に考慮して いること)	H58	2.42	0.79	2.64	0.79	2.71	0.91	2.75	0.85	2.73	0.77	2.68	0.84
	H59	2.90	0.75	2.97	0.68	3.14	0.74	3.20	0.74	3.06	0.67	3.08	0.73
	H60	3.04	0.62	3.21	0.63	3.25	0.67	3.32	0.58	3.26	0.67	3.25	0.66
	H61	2.73	0.68	2.90	0.77	3.06	0.69	3.10	0.75	3.12	0.70	3.02	0.75
	H62	2.19	0.89	2.47	0.88	2.57	0.82	2.55	0.91	2.44	0.79	2.46	0.86
	H63	2.77	0.75	2.91	0.89	2.94	0.73	3.08	0.64	3.02	0.75	2.97	0.76
	H64	3.19	0.79	3.41	0.69	3.31	0.72	3.44	0.70	3.13	0.81	3.30	0.77
	H65	2.46	0.92	2.63	0.98	2.67	0.92	2.76	0.79	2.61	0.79	2.64	0.87
	H66	3.17	0.88	3.29	0.70	3.26	0.79	3.42	0.79	3.12	0.84	3.25	0.83

#### 4) 高等学校教員の「研修参加経験」と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

「聞くこと」と「話すこと」の指導では、過去5年以内に研修を受けた教師が24項目中15項目で、受けていない、と答えた教師より高い数値を出している。研修の有無による比較的值の開きの大きい項目を挙げると、H1「英語



を聞いて、その情報や話し手の意向などを理解させる」、H4「身近な話題について英語で情報を伝えたり会話をさせる」、H14「モデルをもとにするなどして、スキット、ロールプレイなどを創作し、演じさせる」で研修を受けた教員の方が高い値を示している。

「書くこと」の指導を見ると、逆に、研修を受けていない教師が14項目中7項目においてより高い値を示していることが分かる。

「読むこと」の指導についてみると、ここでも、研修を受けた教師よりも受けていない教師の方が多くの項目に対して高得点を出している。内容的には、ほとんど差はないが、H49「目的や状況に応じて、速読や精読など、適切な読み方をさせる」では研修を受けた教員の値が高いことがあげられる。

教え方および内容の扱いについては、今度は、研修を受けたことがある教師が13項目中10項目で研修を受けていない教師より高い値を出している。その中でも、H64「ティーム・ティーチングやペア・ワーク、グループ・ワークなどを適宜取り入れた指導」、H66「ネイティブスピーカーなどの協力を得て行う授業を積極的に取り入れる」ではその違いは大きい。それに対して、研修を受けていない教師が高い値を出している項目は、H54「生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を整理して教える」である。比較をしてみると、研修を受けたことがある教師の方が、ALT等を取り込んだ、教室における実践的コミュニケーションの授業への意識が高く、研修を受けていない教師は、生徒の言語的「基礎力」を重視する傾向があるように思えるだろう。

表5-4: 高等学校教員の「研修参加経験」と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

	教員研修参加歴なし(170名)		教員研修参加歴あり(211名)		全体の平均(381名)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
H1	3.01	0.76	3.19	0.74	3.12	0.76
H2	2.05	0.76	2.18	0.83	2.14	0.80
H3	2.56	0.82	2.60	0.83	2.59	0.84
H4	2.66	0.80	2.84	0.86	2.76	0.83
H5	2.24	0.88	2.38	0.86	2.34	0.87
H6	2.19	0.89	2.14	0.91	2.18	0.90
H7	2.11	0.91	2.22	0.97	2.19	0.94
H8	1.95	0.82	1.98	0.84	1.98	0.84
H9	2.36	0.84	2.25	0.85	2.30	0.85
H10	1.71	0.80	1.68	0.85	1.70	0.83
H11	1.70	0.81	1.80	0.87	1.76	0.84
H12	3.36	0.74	3.31	0.77	3.33	0.76
H13	2.08	0.86	1.94	0.84	2.01	0.85
H14	2.19	0.99	2.40	1.05	2.31	1.02
H15	2.04	0.90	2.02	0.84	2.04	0.87
H16	2.56	0.88	2.62	0.93	2.60	0.89
H17	3.42	0.65	3.36	0.72	3.38	0.70
H18	3.29	0.71	3.26	0.76	3.27	0.75
H19	2.84	0.87	2.93	0.84	2.89	0.86
H20	2.31	0.84	2.20	0.85	2.27	0.86
H21	1.90	0.89	2.00	0.93	1.97	0.92

主に、「聞くこと」と「話すこと」を指導している時

	H22	2.61	0.84	2.79	0.90	2.71	0.88
	H23	2.63	0.80	2.68	0.86	2.68	0.84
	H24	2.64	0.89	2.70	0.87	2.69	0.88
	H25	2.08	0.85	1.96	0.85	2.02	0.86
	H26	2.33	0.86	2.32	0.94	2.33	0.90
	H27	1.90	0.77	1.89	0.82	1.89	0.79
	H28	2.22	0.87	2.15	0.94	2.20	0.91
	H29	2.06	0.87	2.13	0.89	2.12	0.89
	H30	2.49	0.91	2.50	0.98	2.50	0.94
主に、「書くこと」を教えている時	H31	2.19	0.89	2.20	0.98	2.22	0.93
	H32	2.62	0.85	2.67	0.86	2.65	0.86
	H33	2.98	0.78	3.05	0.77	3.03	0.78
	H34	2.35	0.92	2.38	1.02	2.40	0.98
	H35	2.99	0.86	2.94	0.87	2.98	0.87
	H36	2.06	0.83	2.06	0.94	2.07	0.89
	H37	2.20	0.89	2.16	0.96	2.19	0.93
	H38	2.21	0.92	2.18	0.97	2.21	0.94
		H39	3.30	0.77	3.33	0.88	3.33
	H40	2.18	0.98	2.02	0.93	2.10	0.94
	H41	2.85	0.84	2.84	0.88	2.84	0.86
	H42	1.85	0.83	1.82	0.80	1.84	0.81
	H43	2.54	0.90	2.48	0.91	2.51	0.90
	H44	2.92	0.82	3.02	0.92	2.99	0.88
主に、「読むこと」を教えている時	H45	3.39	0.64	3.40	0.66	3.37	0.67
	H46	2.93	0.88	2.91	0.89	2.95	0.89
	H47	2.99	0.90	3.07	0.88	3.06	0.88
	H48	3.26	0.77	3.28	0.79	3.29	0.79
	H49	2.72	0.98	2.91	1.00	2.86	0.99
	H50	3.62	0.66	3.51	0.67	3.56	0.68
	H51	3.74	0.50	3.66	0.56	3.70	0.54
	H52	3.59	0.58	3.51	0.66	3.54	0.63
	H53	2.43	0.91	2.43	0.92	2.46	0.92
	H54	3.48	0.66	3.29	0.73	3.38	0.72
	H55	3.08	0.75	2.94	0.79	3.00	0.79
	H56	2.74	0.68	2.79	0.75	2.77	0.73
教え方、内容の扱い方 (科目を問わず、教える際に 考慮していること)	H57	3.24	0.64	3.23	0.66	3.24	0.67
	H58	2.59	0.81	2.74	0.84	2.68	0.84
	H59	2.96	0.71	3.15	0.71	3.08	0.73
	H60	3.21	0.64	3.25	0.64	3.25	0.66
	H61	2.99	0.73	3.01	0.73	3.02	0.75
	H62	2.45	0.90	2.48	0.82	2.46	0.86

H63	2.95	0.76	2.99	0.75	2.97	0.76
H64	3.16	0.76	3.40	0.74	3.30	0.77
H65	2.54	0.87	2.72	0.86	2.64	0.87
H66	3.14	0.84	3.35	0.77	3.25	0.83

## 5) 高等学校教員の「受験意識」と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

全体として、受験の意識が高い学校で教えている教師は、受験の意識が低い学校で教えている教師よりも、調査項目に対する回答の値が高く、また両者の違いもかなり明確であることが分かる。下記に個別の領域について詳しくみていくが、全体としては、受験意識の高い学校の教師は、言語形式的な指導のみならず色々な工夫を凝らして、コミュニケーションな授業を展開している、ということが言えるだろう。

まず、「聞くこと」と「話すこと」の指導から見ると、24項目中20項目で、受験意識が高い学校の教師が低い学校の教師より高い値をつけており、その差もかなりはっきりしている。内容を見てみると、H5「まとまりのある英語を聞いて、必要に応じメモを取るなどしながら、その概要や要点をとらえさせる」、H6「自分が考えていることなどについての考えをまとめ、簡単なスピーチ等の発表をさせる」、H8「聞き取った内容に対して自分の思いや考えなどを整理して、英語で書いたり話したりさせる」、H10「幅広い話題について話し合ったり、討論したりさせる」でその差が特に大きい。逆に、受験意識の低い学校の教員がより高い値を出した項目は、H18「オーラル・コミュニケーション活動に必要な基本的な文型や文法事項などを使った練習をさせる」、H19「聞き取った内容に対して簡単な言葉で返答したり、ジェスチャーなどの非言語的手段で答えたりして反応させる」、H22「言語材料の分析や説明は必要最小限にとどめ、実際の場面でどのように使われるかを理解し、実際に使えることに重点を置いた活動をさせる」であった。これらの結果より、受験意識の高い学校の教員はコミュニケーションな活動により注目し、受験意識の低い学校の教員は、言語形式の活用により注目していることが伺える。

「書くこと」の指導について見てみても、全ての項目で受験意識の高い学校の教師の方が高い値を与えており、その違いも相当大きい。特に、H31「自分の伝えようとする内容について、整理して、場面や目的に応じて、読み手が理解できるように書かせる」や、H34「文章の構成や展開に留意しながら書かせる」、H35「文法や語法について正しく書くことに留意して書かせる」、H38「より適切な構成や言語形式で書けるように、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導をする」で違いが大きく、コミュニケーションを重視したライティングにも留意しながらも、適切な言語形式で書く指導にも注目しているといえる。

「読むこと」の指導に関しても、全ての項目において、受験意識が高い学校の教師の方が高い値を示している。特に、H40「まとまりのある英語を読んで、その内容について、概要や要点を英語でまとめさせる」、H47「未知の語の意味や文法の知識を活用して推測したり、背景となる知識を活用したりしながら読ませる」、H49「目的や状況に応じて、速読や精読など、適切な読み方をさせる」においてその差が大きく、逆に、H50「英文和訳をさせる」や H51「語句の解説をする」といった項目では受験意識の高低による差が大きい。受験意識の高い学校の教師は、より実践的なコミュニケーション活動につながる読みの指導をしているといえそうである。

最後に、教え方や内容の扱い方について見てみよう。ここでは、13項目中9項目で受験意識が高い学校の教師の方が高い値を出している。中身を見ると、H54「生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を整理して教える」、H55「生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を用い、多様な場面での言語使用の経験をさせながらそれらの習熟することを図る」の値は受験意識の低い学校の教師ほど高く、中学校の基礎的な学習事項を用いた指導に留意していることがみてとれる。一方、受験意識の高い学校の教師の値が高い項目は、H62「音声指導の補助として、発音表記を用いた指導」やH63「辞書などを効果的に利用しながら、自ら外国語を理解し、外国語を使おうとする積極的な態度を育む」となっていて、効果的な学習方法の指導への

意識の高さが伺える。

表 5-5: 高等学校教員の「受験意識」と「英語教育の方法、内容、教材選択、授業全般への配慮」との関係

	高い(68名)		比較的高い(84名)		比較的低い(107名)		低い(125名)		平均値(384名)		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
	H1	3.34	0.64	3.21	0.73	3.14	0.64	2.90	0.84	3.12	0.76
	H2	2.41	0.74	2.19	0.81	2.20	0.77	1.86	0.77	2.14	0.80
	H3	2.87	0.73	2.71	0.72	2.50	0.78	2.42	0.92	2.59	0.84
	H4	2.91	0.81	2.83	0.74	2.79	0.79	2.59	0.92	2.76	0.83
	H5	2.72	0.69	2.44	0.90	2.38	0.75	1.96	0.88	2.34	0.87
	H6	2.50	0.86	2.44	0.86	2.17	0.84	1.80	0.85	2.18	0.90
	H7	2.32	0.98	2.36	0.89	2.33	0.93	1.84	0.87	2.19	0.94
	H8	2.32	0.87	2.15	0.81	1.91	0.77	1.69	0.77	1.98	0.84
	H9	2.29	0.83	2.25	0.85	2.36	0.82	2.30	0.88	2.30	0.85
	H10	2.09	0.94	1.81	0.88	1.61	0.76	1.46	0.65	1.70	0.83
主に、「聞くこと」と 「話すこと」を指導 している時	H11	2.12	0.92	1.92	0.89	1.65	0.78	1.54	0.74	1.76	0.84
	H12	3.44	0.68	3.42	0.73	3.33	0.74	3.22	0.82	3.33	0.76
	H13	2.12	0.87	2.05	0.86	1.96	0.79	1.95	0.88	2.01	0.85
	H14	2.31	1.08	2.44	0.92	2.30	1.02	2.22	1.07	2.31	1.02
	H15	2.31	0.95	2.18	0.84	2.04	0.82	1.78	0.81	2.04	0.87
	H16	2.65	0.93	2.69	0.82	2.62	0.84	2.47	0.96	2.60	0.89
	H17	3.46	0.72	3.38	0.76	3.36	0.65	3.36	0.66	3.38	0.70
	H18	3.10	0.87	3.40	0.68	3.29	0.66	3.26	0.76	3.27	0.75
	H19	2.74	0.94	2.93	0.85	2.94	0.80	2.89	0.84	2.89	0.86
	H20	2.46	0.84	2.21	0.85	2.26	0.83	2.14	0.84	2.27	0.86
	H21	2.09	0.91	2.17	1.02	1.91	0.86	1.77	0.85	1.97	0.92
	H22	2.50	0.95	2.70	0.83	2.72	0.88	2.81	0.86	2.71	0.88
	H23	2.62	0.79	2.62	0.83	2.63	0.83	2.74	0.85	2.68	0.84
	H24	2.82	0.93	2.76	0.89	2.63	0.86	2.56	0.85	2.69	0.88
	H25	2.34	0.86	2.04	0.86	2.07	0.85	1.77	0.78	2.02	0.86
	H26	2.75	0.89	2.46	0.84	2.31	0.83	2.02	0.92	2.33	0.90
	H27	2.21	0.87	1.95	0.82	1.89	0.72	1.70	0.75	1.89	0.79
	H28	2.62	0.99	2.32	0.87	2.21	0.86	1.82	0.82	2.20	0.91
	H29	2.34	0.92	2.08	0.85	2.22	0.86	1.86	0.86	2.12	0.89
主に、「書くこと」を 教えている時	H30	2.91	0.91	2.63	0.88	2.50	0.90	2.17	0.94	2.50	0.94
	H31	2.69	0.93	2.33	0.97	2.22	0.86	1.81	0.83	2.22	0.93
	H32	2.75	0.84	2.62	0.86	2.76	0.76	2.53	0.92	2.65	0.86
	H33	3.18	0.60	3.20	0.72	2.96	0.73	2.87	0.90	3.03	0.78
	H34	3.12	0.89	2.48	0.96	2.27	0.83	2.01	0.93	2.40	0.98
	H35	3.47	0.68	3.24	0.80	2.93	0.76	2.55	0.87	2.98	0.87
	H36	2.28	0.94	2.15	0.90	2.08	0.83	1.85	0.87	2.07	0.89

	H37	2.69	1.03	2.27	0.91	2.15	0.86	1.86	0.81	2.19	0.93
	H38	2.75	1.01	2.25	0.94	2.21	0.89	1.84	0.81	2.21	0.94
主に、「読むこと」を 教えている時	H39	3.66	0.59	3.50	0.70	3.35	0.69	2.98	1.00	3.33	0.83
	H40	2.62	0.96	2.31	1.03	2.07	0.84	1.70	0.80	2.10	0.94
	H41	3.15	0.83	2.94	0.81	2.83	0.78	2.63	0.92	2.84	0.86
	H42	2.28	0.81	1.95	0.92	1.78	0.74	1.57	0.68	1.84	0.81
	H43	2.65	0.93	2.55	0.92	2.57	0.84	2.37	0.91	2.51	0.90
	H44	3.43	0.65	3.01	0.91	3.00	0.71	2.69	1.00	2.99	0.88
	H45	3.49	0.63	3.44	0.65	3.41	0.57	3.31	0.71	3.37	0.67
	H46	3.07	0.83	2.94	0.84	2.86	0.87	2.90	0.95	2.95	0.89
	H47	3.56	0.63	3.14	0.81	3.00	0.80	2.73	0.99	3.06	0.88
	H48	3.68	0.58	3.42	0.70	3.32	0.73	2.93	0.82	3.29	0.79
	H49	3.54	0.66	3.10	0.91	2.73	0.92	2.34	0.99	2.86	0.99
	H50	3.68	0.56	3.57	0.72	3.56	0.68	3.50	0.67	3.56	0.68
	H51	3.71	0.57	3.75	0.49	3.79	0.41	3.57	0.61	3.70	0.54
	H52	3.60	0.60	3.70	0.53	3.62	0.59	3.34	0.67	3.54	0.63
	H53	3.01	0.80	2.63	0.85	2.25	0.86	2.17	0.90	2.46	0.92
教え方、内容の扱 い方 (科目を問わず、教 える際に考慮して いること)	H54	2.91	0.84	3.19	0.69	3.46	0.65	3.70	0.48	3.38	0.72
	H55	2.66	0.80	2.85	0.67	3.07	0.72	3.23	0.79	3.00	0.79
	H56	2.75	0.78	2.81	0.63	2.69	0.69	2.80	0.76	2.77	0.73
	H57	3.19	0.76	3.25	0.56	3.21	0.70	3.28	0.62	3.24	0.67
	H58	2.96	0.72	2.83	0.86	2.65	0.78	2.43	0.83	2.68	0.84
	H59	3.34	0.56	3.04	0.68	3.07	0.71	2.93	0.77	3.08	0.73
	H60	3.51	0.50	3.14	0.60	3.24	0.58	3.13	0.73	3.25	0.66
	H61	3.31	0.63	2.95	0.67	2.94	0.68	2.94	0.81	3.02	0.75
	H62	3.16	0.66	2.61	0.81	2.31	0.81	2.11	0.77	2.46	0.86
	H63	3.34	0.68	3.06	0.73	2.96	0.63	2.71	0.82	2.97	0.76
	H64	3.37	0.71	3.39	0.64	3.34	0.70	3.16	0.87	3.30	0.77
	H65	2.71	0.86	2.60	0.85	2.63	0.83	2.64	0.94	2.64	0.87
	H66	3.28	0.75	3.31	0.74	3.30	0.69	3.16	0.95	3.25	0.83

## VI. むずび

今回の教師向けアンケートの結果を見ると、中学校と高等学校の回答の傾向に興味深い点が数多く見られた。特に、研修の有無に関して、中学校の場合は、大きな違いがあるようで、研修に参加することによって、よりコミュニケーション的な授業への意識が高まっていると言えそうである。また、受験意識が高さによる分析では、中学校、高等学校教員ともに回答傾向にはっきりとした違いが見られた。なお、本報告書は中間報告であり、今後、発表される最終報告では、より精密な統計分析の結果をもとに、上記のさまざまな要素間の関係について、より具体的な教育現場への提言を含める。

### 付録3

#### CAN-DO 調査における因子抽出と命名(長沼君主分析)

別表1 国内活動因子

分析

	F1	F2	F3	
V14	0.91	-0.02	-0.14	英語でのディスカッション
V15	0.89	0.03	-0.21	英語でのディベート
V13	0.84	-0.02	-0.05	英語でのロール・プレイ
V12	0.77	-0.02	0.02	英語でのプレゼンテーション
V09	0.77	-0.07	0.06	グループワーク（グループで行う英語を使った活動）について
V08	0.77	-0.07	0.06	ペアワーク（2人で行う英語を使った活動）について
V10	0.73	0.06	-0.02	英語でのインタビュー
V11	0.66	-0.04	0.15	英語でのスピーチ
V18	0.64	0.03	0.10	教科書本文内容のサマリー（概要）を英語で書く
V16	0.62	0.08	-0.02	英語でのスキット・劇
V21	0.58	0.13	0.02	英語を使う場面でのジェスチャーについて
V06	0.57	0.19	-0.04	授業時間外で、英語のネイティブ・スピーカーの先生との、英語での自由な会話について
V19	0.48	0.09	0.17	英語での言い換えについて
V20	0.47	0.17	0.13	英語での聞き返しについて
V34	-0.46	0.33	0.24	NHK のラジオ英語講座
V17	0.45	0.02	0.30	英語での日記
V22	0.37	0.21	0.04	英語の聞き取り
V31	-0.06	0.77	-0.06	英語での電子メールや手紙を受け取ったとき
V39	-0.03	0.76	-0.06	英語で書く電子メールや手紙
V37	0.01	0.68	-0.01	英語で書くはがきやカード
V24	0.07	0.62	-0.14	英語での電話
V33	0.03	0.60	-0.08	英語の天気予報
V30	0.05	0.58	-0.03	英字新聞
V25	0.08	0.57	-0.06	英語での説明（例えば、英語で道をたずねられたり、切符の買い方をたずねられたとき）
V35	-0.01	0.56	0.09	テレビ・ラジオでの英語音声のニュース
V28	0.07	0.56	-0.10	英語で書かれた「レシピ」（料理の作り方）
V27	0.01	0.54	0.05	英語で書かれたインターネットのホームページ
V29	0.02	0.49	0.16	教科書以外で、自分から進んで読む英語の本
V38	0.14	0.43	0.07	英語で書く日記
V32	0.02	0.43	0.10	英語で書かれた説明書（例えば、電気製品などの取扱説明書や薬の飲み方）
V36	-0.03	0.43	0.14	英語音声の映画・ビデオ・DVD
V26	-0.01	0.31	0.19	自分の好きな洋楽アーティスト（歌手、音楽グループ）の英語の歌
V02	0.03	-0.06	0.76	英語教科書の本文を読んで理解する
V01	-0.01	-0.01	0.72	英語教科書の本文を声に出して読む

V07	-0.07	-0.02	0.65	辞書を引くとき
V03	0.24	0.04	0.45	英語教科書の本文を耳で聞いて理解する
V05	0.38	-0.10	0.45	授業中の教科書内容についての英問英答について
V04	0.38	-0.05	0.39	教科書内容について、先生による英語での説明（オーラル・イントロダクション）について
V23	0.02	0.23	0.29	英語での自己紹介

F1 オーラルの授業

F2 授業外活動

F3 教科書的活動

別表2 国外活動因子分析

	F1	F2	
V45	0.89	-0.14	英語圏での学校の授業のノート
V43	0.81	-0.02	英語圏での学校の授業
V44	0.81	-0.05	英語圏での学校の教科書
V49	0.40	0.30	英語圏での（ホーム）パーティーでの会話
V48	0.38	0.25	英語圏の人たちへの日本文化の紹介
V51	0.37	0.29	英語圏の郵便局や両替所
V47	-0.09	0.71	英語圏での服などの買い物
V46	-0.05	0.64	ホテルでの英語のやりとり（例えば、英語で自分の行きたい場所や知りたい情報をたずねるとき）
V52	-0.02	0.63	街の掲示や案内
V50	0.03	0.58	英語圏でのファースト・フード店
V53	0.15	0.52	英語圏での公共の乗り物（電車やバス）のアナウンス

F1 学校内

F2 学校外